

7784

錦城齋真玉口演

福井煩作速記

英雄

美談

宮本武藏

東京

文事堂發行

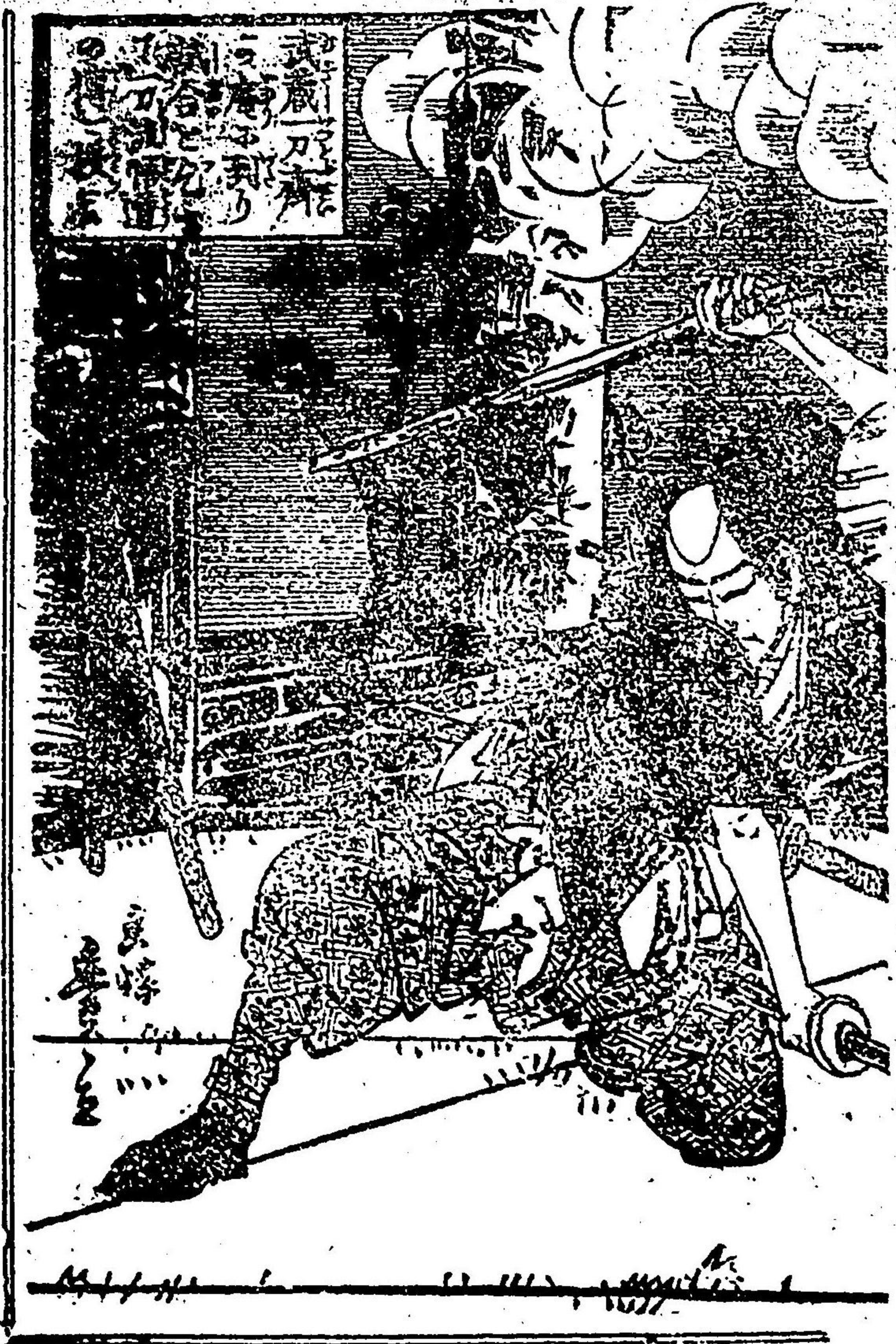


加藤主計頭清正



臨海樓松平大由
守左衛門尉
子胤自時
當正小吉
延享五年

加藤主計頭清正
印





宮本武蔵正明



小刑部大明神

宮本武蔵

981

官本武藏

英雄美談 官本武藏

第一回

錦城齋貞玉講演
福井順作速記

今回官本武藏致名の實傳を講演致します併し之には是迄種々の伊話
しがありまして既に速記になつたもの及び其他古くより武藏と佐々
木岸柳の傳様々綴りし本が出て居りますそれに又講談師が高座にて
喋々と演じて居りますが一として其實を擧げたるものありません
故此度貞玉が種々取調へまして其實傳を演じます中には官本武藏は
寛永年間徳川三代將軍の御代に御前へ出で立合を致したとか又は
石川軍刀齋岩流と云ふ人の弟子である杯と云ふやうな御話しもあり
まして最も其事蹟を寛永にして演じます者がありますが大に相違



藏 武 本 官

致します、天正の頃より正保に至るまで世を送りまして長命の人ではあります、其宮本が盛ん、國々を廻りましたのは天正の頃より、然るに又講談師仲間にては天正の宮本寛永の宮本と云つて二様に分けまして演じます、宮本武藏が二人ある譯は、其内天正の宮本にも種々附會の説を演じて居る者もあり、茲に宮本と云ふ人は二刀の達人でありまして既に武藝小傳又は武術流祖録等にも出て居ります、政名流、二天流、杯と書いてあります、其門人に青木城右衛門金家と申す人がございまして、此人が宮本の術を充分受得ました、然るに其人後に二刀鉄人流と流名を廣めました、そこで劍道にて日下開山と言はれましたのは宮本武藏でござい、尤も相撲にも日下開山横綱と云ふものがあつた、之は明石志賀之助と申す相撲取がありまして、之が横綱の元祖であります、話には少し違ひますが、鳥渡爰で申し上げて置きます、明治三十一年の今日横綱を張て居る

藏 武 本 官

のは十七代目小錦八十吉でござい、すけれども日下開山と云ふ文字を上へ附けましたのは、明石志賀之助ばかり、モウ斯くまでに名を得ました時は如何、者が来ても負けないと云ふ所謂保險附でござい、然れば荒木又右衛門吉村は、家勇、宮本武藏は名人、ソコで此武藏の名前でござい、草双紙体の本杯には無三四杯と書いてあります、之は徳川の伊世の伊話しに致しました、がため、全くは武藏と書いたのでござい、之を以ても分りませう、徳川様伊世に、武藏と云ふ名を附けられないのは、當り前……備前の大守新太郎少將光政公が武藏守を願ひに相成りました、が伊許しがありませぬ、故に光政公伊立腹に相なり、然らば予は生涯新太郎で世を送ると仰せられまして、伊任官遊ばされませぬ、此君は東照宮の伊孫に當らせられる伊方でござい、それです、へ武藏守を名乗ること、出来ませぬ、それで、宮本は徳川の御代の前に名を博めました、人に相違ありませぬ、之が第一の證で

さいます其履歴の本を詳しく尋ねまするに足利十三代將軍義輝公の御家に吉岡無二齋と申して文武兩道に達したる人がありまして誠温厚篤實の壯士でありました就中劍道は自見流の達人でございまして此劍道は誰より無二齋は學んだかど申しますれば同藩に瀬戸口備前と云ふ人がございまして此人より軍學兵法の事を悉く學び發更劍道を學んだ人でございす諸所の戦争に數度の功名を願はしました或時將軍義輝公諸國の劍道者を召集めに相成て其仕合を御上覽あらせられました其中に吉岡太郎左衛門は其妙術を以て百六十餘番の立合の内第一を占めました何れも其時分日本に高名る名人と謂はれましたる人々十六人に打勝ちましたから將軍悉く御感心おらせられましたに實に二人と無い劍道の達人であると云つて夫より無二齋の號を義輝將軍より賜はりましたものでございす是れ太郎左衛門が名を擧げる原……斯の如き人でございす故平生は誠温順柔和尤

も之は軍人の心掛ける所でありまして平生は沈着に致して卒に戰場へ出でたる時は充分に其勇氣を合ひが當り前それを動もすると心得違ひの人は平生乃公は軍人だ乃公は兵隊だと云つて往來を肩を振て歩き或る時は酒に酔ふて往來人の妨げをする御方杯も時々は見へまするが爾ふ云ふ御方は戰場へ出ましては少しも役に立ちません平生は女子供に柔らかに言葉を掛け柔和を是と致し戰場へ出でたる時は我邦のため瓦とあつて完たからんより玉となつて打碎けるも云ふのが軍人の常斯う心得たいものです然れば吉岡太郎左衛門が無二齋の號を賜はりましたのも其心掛け充分あるからでございす茲に榮枯盛衰は天の命する所にして之は致し方はございせん足利は十三代の世よして遂に三好松永等の謀叛……其他其時分の事を精しく御話しを辨ずると長くおりますから茲には述べませんが遂に足利は亡びて仕舞ひまして御家の人々も思ひに離散を致しました其

藏 武 本 官

中に吉岡無二齋は少しの便りを得まして播州姫路の片邊りなる新見村と云ふ所へ参り柴の庵を結び世を棄た人と相成りましてモウ浮世の塵は厭やである云つて別に主取りも致しません此無二齋に二人の子がありまして何れも男子兄を清三郎と申して丁度其時八歳弟を七之助と申して四歳にありませぬ此二人の子供を手の裡の玉と愛し唯だ二人の子が成長するを樂しみにまて伊座おさる尤も子寶と云つて福者の數に入ると誰やらが申しましたか人間子供がなければ往きません幾ら財産家でも子が無ければ他人を養子にして己れが汗水を出して溜めました財産を譲らなければあらんそれですから子供は澤山伊座へあさるが宜しうございます中には心得違ひの人があつて己らア何うも小兒が多くて往けぬ貧乏人の子澤山杯と云ふは大きに心得違ひ男子が出来ませれば年齢に相成れば兵役に就て國の爲に御事公をし女の子が出来ませれば學問をさして女教師にもなり下等社

藏 武 本 官

會は女の子が出来たら藝妓にして紳士を街へさして藝妓が變じて權妻となる之は滑稽の餘事……然るに此兄の清三郎は誠に温和しうございます弟の七之助の方は天性備はりし英智でございまして殊に悪戯者誠に親の無二齋も折々小言は言ひますが少まも父の申す言を用ひませぬ兄の清三郎が却て弟に逆待られる位併ながら此七之助は折々小さい子供に似合はん事を申します 七父上さん坊は大きくなると日本一になるよ坊は……日本一になるよと云ふ事を始終申して居ります或日父の無二齋が 無コラ〜 七坊お前は日本一にあると云ふが何を以て名を擧げるのか 七父上さん母父は劍術の伊師匠さんでございませう「無ホー……」七、無劍家の家に生れば劍術を學ぶを以て善しと致しますそれですから私は劍術つかひの日本一なおります其言ふ事最も善し無二齋は莞爾笑ふて 無爾うかそれでは日本一の無劍家になるか 七、あります「無誰に學んで無劍家にあるか

七之はしたり父上何を仰しやいます、誰に學ぶと云つて私は吉岡無二齋の倅でございます、然れば父より學んで父の流を廣めます、併し父上さん尊父は段々少年を修取さいますと人間は其傳さへ變るもので……然すれば劍術も年を取ると云ふと段々毫碌しませう……無コレ、何を言ふんだ、七、それですから父より學んで父より優るは坊でございます、芝を聴くより無二齋味を敵いて喜んで、無ヤ之りやア面白い……斯うやしましたる言葉は全然二十歳以上の者の言ふ言葉であります、がナカ、爾うでない、漸う十一二歳でございます、實に天晴れ秀才の童兒ありと知る者知らぬ者も皆之を賞讃しましたさうでございます、扱徳川家康公は天正十八年八月武藏國江戸に御入在、慶長五年石田三成の叛逆以後、天下一統の後は武藏の號を名稱致しまゐる者は一人もありません、茲に柳生又左衛門宗矩此方、柳生流の元祖だと申します、が之は眞影流でございます、柳生流は其子息十

兵衛三巖殿が御廣めに相なつたもの、又塚原卜傳と云ふ人がありました之は卜傳流と云ふ一派を廣めました、鎗術には法藏院覺禪房胤榮と云ふ人が法藏院流を廣めました、關口彌左衛門といふ云ふ人は關口流の元祖伊東一刀齋は景久と云ふ實名にして一刀流の始祖、其門人に神子上典膳、後に小野と改名致しました、小野派一刀流之は日外貞玉が叛割典膳のお話しに詳しく申し上げました、故茲には略します、又諸岡一羽と云ふ人が諸岡流とも云ひ、又中には一羽流とも申します、之も一派を廣めました、兼房又三郎は吉岡無二齋の意術を受けまして、其名を博めましたものでございます、佐々木岸柳と云ふ人は佐々木流の達人有馬喜平治は有馬流の元祖でございます、ソコで吉岡無二齋と云ふ御方は全体二刀ではありませんでした、右の手に刀を携へ、左の手に十手を携へて十手と刀で敵を追拂ひましたものです、が此十手は幕政の頃は……尤も其前からせうが罪人杯を捕押へます時に之を用ひま

官本武藏

した物故何となく賤しいと云ふ所から同じ持つならば左の手に脇差を携へたが宜からうと考へましたのは即ち伴の七之助後に至つて之が宮本武藏と云ふ事既に此宮本武藏と云ふ人は十三歳より十五歳にある迄に真劍勝負を十六度致し其他諸國の武術の達人と六十餘度の立合を致したと云ふ實に珍らしき人でございませぬ、それに此人書を大層好みまして只今でも宮本武藏の書いた書が好事家の家にございませぬ、そのを真玉も拜見致した事がございませぬ、黒書の筆が一羽書いてあります、ナカノ妙筆のやうに見受けました、又武藏は一に劍術二に馬術三に書でございませぬ、尤も書も能く致しましたさうでございませぬ、宮本武藏が馬術の達人であること云ふ事は誰も知りませぬでした、此人大坪古流の指南が出来た位な人でありませぬ、が劍術で名を賣りました、たが爲に宮本は擊劍家なりと現に子供に至るまで知て居ります、このは此處でございませぬ、ナカノ馬術も名人の師であつたさうでござい

官本武藏

ます、抑無二齋の次男七之助は既に十二歳になりました時は力量も人に優れ劍術も進みまして此勢ひならば天晴れ世の劍道者もナカノ及ばざる位にあるだらうと無二齋大層喜んで居ります、名人となる位の者は子供の内から遊ぶ事が遠つて居るものと見へまして常に近所の子供を集め自分より年長なる者を毎度敲きまします、竹を取りますると其竹を構へて、七、アア不殘此方へお出で、私しを打ち込でおいで、金ちやん鐵ちやん衆ちやん不殘一緒に掛つて打ち込んでおいで、近所の子供が立腹致しまして、〇、又始めやアがつた、一人で威張つて居やアがる、乃公が一番彼奴を打てやらう、……後ろから致して一人不意に竹を持って打込で来る、ヒヤリと体を交してボーンと向ふを打つ、打つと云ふと道具を着けて居りませぬがために眉間を甚く打たれ、泣いて泣いて家へ歸る、又一人が後ろから来て打たうとする、之も引外して向ふへ突飛す、それです、から毎日、親の許へはお宅の七之助さんが

藏 武 本 宮

悪戯をして往けないよ、お宅の坊が往けあいよと云つて言ッ付けに参ります、親も實は持餘して居ります、前々し上げたる通り己れは段々年を取るし清三郎の方は一向に剣道の心掛けがよい、此者を何か剣道者にして吉岡無二齋の刀術を世に遺したいと云ふ氣がありまする故、或時は叱り又或時は之を愛して居りましたが、或る一日の事無二齋が庭前に出まして向ふの大きな松の木に的を懸けて手裏劍を打て居ります、之は身体の運動の爲でございませうか、無ヤア、エイ、ヤ、エイと打て居る、固より妙手でございませう故に百發百中一發として外るゝ事はございません、然るに如何致してか、エイと打ちますると、後の一本が思ひの外に的を外れまして「ハッ」と思つて居りますると、其後ろの方で大きな聲を致しまして「ハ、ハ、ハ」と笑ふ、無二齋立腹を致して無、誰じや、無禮な奴じや、後ろの方にあつて何を笑ふて居る」と云つて振り返りますると、次男七之助でございませう、大いに怒りまして、無憎くさ

藏 武 本 宮

奴じや子供の分際と致して親を嘲る不届き者、今一度口を開いて見よ一打にして呉ん、武術に掛つた時は親も子もございません、此處に心を入れるが當り前、然れば昔しから云ふ武術の立合に貴賤の隔ては無い、主人が臣を相手に立合をする時に其臣が君を貴とみまして故意と負ける様と云ふやうな事は甚だ宜しくない、それですから徳川三代將軍家光公御稽古の時に夥多の侍旗本がは側へ出て上様を打込むと云ふと御不興を受けるも心得て故意と負けたりする者がございませぬ、それを彦左衛門が悉く悔しみましたさうでございませぬ、當り前の事ではございませぬ、無二齋も倅が笑つたに依つて子供と雖も惜い奴だ、手打にせんと怒つた、七之助は少しも恐るゝ様子はございませぬ、七、父上さん何を怒んなさいませぬ、親なればとて尊父が未熟でお坐さいますから後の手裏劍一本が的を外れたのでございませう、餘り可笑しうございませぬから笑ひました、可笑しい時は笑ふもの、悔しい時は怒るもの、悲

藏 武 本 宮

しい時は泣くもの人間喜怒哀樂はあり内でもございませう」無、高慢
赤事を言ふ奴だか其方は……」愈々無二齋が立腹致しまして突然腰の
一刀をスラリと引抜き、無己れ手打にして呉れる、エイッ……」と云ふ
時に七之助は心得たりと後の方へ下ッて無二齋の後ろに立上りまし
た、其時「アッ」と驚いて、無、オヤ……」と云ふ内に後ろの方に
て「七、父上さん之に居ります」無、エー己れ親を嘲弄致すかと云つて
又「候、ヤッ」と切付けますと云ふと向ふへ飛び此方へ飛ぶ、此時無二齋は
驚いて刀を鞘にヒラリと納めまして「無、コレ〜」待て〜、七之助待
て「七、へー無、オー其方は何時の間にも其早業を何として覺へたぞ
七、父上さん之は覺へたのでございませせん私の身体に備つて居りま
するものでございませす是迄は吉岡無二齋も唯だ子供とのみ思つて居
りましたが今日茲に於て自分が刀を執つて立向つたは唯だ稽古ではな
く全く親を嘲り笑ふたと云ふ所から平生忍耐の強き無二齋先生でも

藏 武 本 宮

早く言へば此の居所が悪かつたので立腹致して全く此七之助を唯だ
一刀に掛けやうと心得ましたうれを体を交して彼方へ飛び此方へ飛
びするのは是れ全くの腕前ありと始めて我子の七之助が舉動に感心
致しまして遂に是より吉岡無二齋晝夜の差別なく此七之助を側に置
て、劍道の事を悉く教へます、又一を聞いて萬を知ると云ふのが此人の
器量であります、實に梅樞は二葉より香しく蛇は寸にして其氣を吐
くと云ふが是れ後に天下に名人とあります、幼名七之助後に此人宮
本武藏政名とあります、之は成長の御話し、初め子供の御話を餘り
長く辨じて置きますと皆様方が芝居狂言又は講釋杯を御聴き遊ば
したお馴染みの所が出ません故是より七之助が成長を致して武藏と
あつて諸國の劍道者と立合の物語りに移ります

第 二 回

茲に有馬喜平治一陽軒信賢とす人がありまして之は有馬流とすし

宮本武藏

ますナカ、劍道の達人でございます。年來諸國を修行致しまして武術を磨き此頃姫路に参りまして道場を開きました。元來名譽の人でございませう。故郷路の家中を始め近郷近在に至るまで其名を慕ひまして入門する者澤山ございませう。忽ち道場は繁昌を致して門人も二百餘人になり人々先生々々と尊敬致して居ります。然るに餘り繁昌致しますから喜平治少しく慢心を致しまして……人間も餘り人に貴とせられますると慢心を致して宜しくないものでございませう。之は多くあり内でございます。自分がエライと云ふ氣にあるから宜しくない人に愛を受けるは辱けけない人々尊敬されるは嬉しいと云ふ氣が出れば宜しいが爾うでない。此方らがエライから人が乃公を敬つて來ると斯う云ふ皆天狗心が出るものでございませう。喜平治も慢心を致しましたから道場の表へ札を掲げます。のに日下開山劍法の元祖と立派に書表はしました。尤も其昔しは皆看板を掲げましたもので人呼で金看板杯と

宮本武藏

やす只今の所謂商標で矢張繁昌家が斯う云ふ事を致しました。近頃金座通りへ往つて見ますと驚く勿れ煙草税金三十萬圓と云ふ大變な事を書いてある商店があります。アレは田舎者が來て表を見たら驚かませう。實に大したものです。併し是等は餘事でございませう。斯くの看板を喜平治が掲げました故に諸人目を驚ろかしまして何うも大した物だ。有馬さんが立派な看板を掲げた表札を掲げたと云つて夫れを惣々人が見に参る位中には心ある人は何も有馬さんがアンナ看板を掲げなくて固より劍術は達人だと云ふ事は知て居る。アンナ看板を掲げると却て彼の人の器量が下がる杯と云ふ人もございませう。之は全くでございませう。然る所へ吉岡無二齋の次男七之助は用事がございまして此邊りへ参ります。すると表に人が立つて居ります。故ヒヨツと見ると右の看板でございませう。後の方にて七之助が之を見て、七、日下開山劍法の元祖……エライ事が書いてあるな……と云つて笑つて居る、

前に居た人が「オイ、何を前さん笑つて居る。七、可笑しいから笑つて居るのさ。」△「何か可笑しいのだ、有馬さんは日本一の先生、日下開山、剣術の元祖なんだ、七之助は其人々に向つて。」七、「オイ、貴さん方、斯様お投機師の看板を見てお驚ろさあすつては往けませんよ。」□「何だ、投機師の看板とは……。」七、「ハ、ハ、ハ、何も日下開山、杯と書かあくても宜さうあものだ、斯う云ふものを見て驚くやうな方が、澤山あるのは誠に困つたものだ。」○「何だ、生意氣な事を子供の癖に言ふ……。」悪口を言ふ者もあり又寝る者もある、其中、七之助は一人笑ふて立歸りまえたのは、香勝寺と云ふ寺院でございませぬ、之は親の無二齋が香勝寺の住職に頼んで、悴に學問を致へて貰ふ爲に、七之助は此寺へ參つて、内弟子に相あつて居りまする事故、其寺へ立歸りました、其夜に至り、御住職が寝て居りましたのを、幸にソツと筆墨を携へて抜け出で、又候有馬喜平治の門前へ參りました、モウ夜は更けて往來は跡絶へ沈どし

て居ります、マダ夫丈に丈がございませぬ、子供の事故に何か足纏ぎの盥をど見ると向ふに、天水桶がある、之を幸ひ踏盥と致して、彼の看板の上へ持て參りまして、達筆に黒々と井中の蛙、大海を知らずと記し、其側に、築者、野村香勝寺内、吉岡七之助と書終りまして、其場を立去て、任舞いしました、初夜が明けますると、此門前に大層人が立つて、甲、ヤ、太郎兵衛さん見さつしやい、又何かナンだせ、有馬さんの看板に餘計な事を書足したせ、乙、ム、何か書てある書てある、丙、それじやア、又エライ事をお書きなすつたんだらう……、丁、民が五六人集まりましたが、初字の讀める人が少ない、只今は有難い事に、學校をお設けになりました故、モウ子供衆が文字をドン、讀む昔しは、手習い師匠がありましたも、ナカ、爾、う、教育が屈きませぬ故に、讀めあひ者が多い、「モン、何と書てあるんです、乙、へ、左様でございませぬ、い、分りませぬ、い、丁、甚兵衛さん讀で見さつせい、甚、サウさ、白湯で用ゐると云ふんだら

藏 武 本 宮

う 丙、ろりやア前薬の能書じやアないか、杯と言つて居る内に有馬喜平治の門人が何か表が騒々しいから飛出して見ると驚いた、立派な看板の上へ黒々と書いてございませうに依つて匆匆に門人は中へ駆込みました 門先生大變でございませう 喜何だ…… 門御覽遊ばせ表札へ悪戯書をした者がございませう 喜ナニ悪戯書を…… 喜平治立腹を致して表へ飛出して見ると 喜何々、井中の蛙大海を知らず…… ヤツ怪しからん事を書く奴かな…… 筆者野村香勝寺内吉岡七之助…… 一之は悪戯書をした者の姓名まで書表はしてある、憎くい奴である有馬喜平治は大層立腹致しましたが兎も角之を諸人に見せては耻ありとて直ぐに看板を外させました、サア見て居た表の人々は 甲太郎兵衛さんマア甚太い事を書いたのう 太誰だ…… 甲彼の吉岡の坊ちやんじや 太ム、それじやアなにか彼の香勝寺に居て學問をして居さつしやる七坊さんか、彼の坊さんは實に悪戯見じや何と云ふ事と

藏 武 本 宮

書たんだ 甲井中の蛙大海を知らずと書いた 太ム、成程之はナンだき、自己の考へには有馬さんが自分一人が聲剣家じやと威張らつしやるに依つて左様な事を書いたんだらう、之はドエライ事が出来た、マア併し自己達が係り合にさつちやアならんから戻らうではないか、其儘にして農民共は立戻つて仕舞いました、扱此時有馬喜平治は往來の者に之を見られて自分の耻でございませうから烈火の如く憤つて居る、其處へ又門人共が打寄りまして 甲時に井上さん何うしたもんだらう 井左様師匠の悪口をしたる奴、吉岡七之助と云ふ彼りア無二齋の次男ださうだ 甲ヨシ、彼れを引摺んで之へ連れ参り先生に手打にして貰はうじやないか…… 先生如何致しませう 喜如何にも憎くい奴、匆匆に其者を連れ参れ 門人畏りましたと門人達が五六人はより野村の香勝寺へ参り立關に來つて案内を願いますと取次の小僧さんそれへ出て 少、ハイ何でございませう 門人我々は有馬喜平次の門

人に致して井上勝太郎近藤源平林庄三郎山口金助何うか御住職にお目に懸りたい 小「へい、只今御住職はお不在でございますが何の御用でございますか 門人「エー手前如き小坊主に用事はあい 小「之はしたり小坊主に用事はないと仰しやいましても師匠様が御不在の時は私がお取次を致します、縦令お武家と雖もお控へなさい、坊主出家は長袖の身でございます 門人「ナカ／＼小僧威張つた事を言ふはい、此寺に七之助と云ふ奴が居るか 小「吉岡の次男七之助殿は入塾してお在なさいます 門人「生意氣な事を言ふ奴だ……居るか 小「左様でございます 門人「其七之助を之へ呼出して呉れ、小僧は奥へ参りまして 小「七之助さん……吉岡さん 七「何だい 小「今彼の有馬喜平治殿のお弟子が出入來になりまして何か貴下に用があると言ひます、笑いかから七之助は玄關へ出て参りまして 七「エー皆さん何か用ですか 門人「其方が七之助と云ふか 七「黙らつしやい、其方杯とは無禮な一言、人の

姓名を問ふには最初自分の姓名を名乗り賜へ 門人「ヤ、高慢な事を言ふ奴だか……とは言ふもの、理の當然でございますから我は誰我は誰と一々名乗ると 七「如何にも拙者は吉岡七之助でございますが何か用か 門人「其方昨夜師匠喜平治先生の御表札へ對して悪戯書をされたな 七「決して悪戯書は致しません 門人「否、や悪戯書に違ひない七「ハ、ア、して、見ると貴下方はナンですか有馬様のお弟子さん達でございませうか 門人「左様…… 七「弟子は師の半分に至らぬいと云ふ彼の文字が讀めませんか、井中の蛙大海を知らずと書いてあるを…… 門人「左様でございます、其通り書いてござる 七「それじやから悪戯書ではございませぬ 門人「ナニ悪戯書でないと言はすのか 七「左様有馬喜平治殿が日下開山劍法の元祖とお書きなさいましたか、日下開山はナカ／＼貴とい文字、又唯だ劍法なら劍法で宜しいが元祖とは何事でございます、貴下方は元祖の文字を存じないか、豌豆や燗芋の看板のやうな食

官本武藏

物の元祖とは違ひます、日本は武國あり武術を以て是とさします此國の武術の元祖とは何事ぞ世間を知らぬにも程がある故有馬喜平治様へは忠告の爲に井中の蛙大海を知らずと書いたのでございます、悪戯書ではない有馬喜平治殿へは諫言申した併し諫言は耳に逆ふ良薬口に苦しと云ふ事故に却てお分りがなくば仕方がない馬の耳に念佛とは是等の事か……門人「ヤ、已れ言はして聞けば様々お事を言ふ奴だ、サア手前共と諸共に勿々道場へ參れ 七、有馬殿は用があるなら此方らへは入來下さい 門人「否、や手前を連れて來いと仰しやるから早速連れて參る 七、宜しうござる、只今參りませう」と云ふ處へ香勝寺の住持がお歸りにありまして、見れば何やら玄關にて七之助と侍士五六人と押問答、尻目に懸けてお住職庫裏の方へお這入りになりお弟子を呼で 住「何事だ…… 弟子「お師匠さん大變です、彼の七之助殿が昨晩有馬喜平治殿の表札へ悪戯を致したと云ふので…… 住「それは

官本武藏

今俺が空兵衛とんから聞いて來た 弟子「其談判には入來さすつて今七之助殿が連れて往かれる處です 住「因つた事を致したは……」お住職は玄關へ出ました 住「扱各位には光づ何うぞ之へお通り下さい、愚僧が香勝寺住職でござる 門人「ア、お手前がお住職か、此七之助はなにかお手前の門人か 住「左様出家ではございせんが學問の修行を致したいと申して、これには此親無二齋と少しく縁もあります、愚僧故に學問を教へて居りました、何を致したか存じせんが何うか之は愚僧が此者に代つてお詫をする、見らるゝ通りまだ幼年、ヤモウ兎角に悪戯兒であつて人様に對し折々失禮を爲します、故常に戒めて居ります、併し門人の罪は師匠にあり、愚僧がお詫をするに依て何うか御辨に預かりたい 門人「否、や勘辨相ありません、外の事なら幸知らず、今日劍道を以て諸人へ之を教へて居る者の表札へ悪戯書をされたのは此上もなき師匠の御恥、師匠喜平治殿が強て連れ參れどのお言葉でも

る故に此七之助は是非共連れて参る再三詫たが何うしても聞入れない、此時七之助が「アイヤお師匠さん、心あき者は致し方がござらん住、コラ、何を言ふ、七、私が参つて喜平治殿の前にて詫をするなら充分詫を致します、心配あるな、お師匠さん、佛法の事に就ての論は、らばお師匠様がお扱ひなさるの道でございませうが、今日は、論の論に致して坊主出家の知らざる所、平問はお師匠様より學びます、が、劍法は親無二齋より學んだ七之助は、心配あるな、有馬喜平治殿は道場へ私が参つてお詫をしますから……」住、併し時として事に至るも計り難く……七、其儀は必ず心配あるな、父上の許へお知らせ下さる事、涉無用と此言葉は實に十五歳未滿の者とは思はれません、悠々として支度を爲し有馬喜平治の門人に連れられまして、其道場へ乗込で来る、是から有馬喜平治と七之助の間答聞かずんばあるべからず否、讀ますんばある可らざるの講談

第 三 回

扱香勝寺の住職は此事に就て太く心配を致しまして、兎に角子供一人を有馬の道場へ遣はす譯にはいかず、何うがなして事を治めたいと考へて七之助をそれへ呼び、住、誠に、お前は飛でもかい悪戯を致した七、イエお師匠様、悪戯ではございません、ア云ふ無禮な奴がおりますると、樂置かれません、又依て私が落書を致しました、何も心配に及びません、是から私は彼の道場へ参ります、住、イヤ、お前を遣てはいかん、愚僧が兎に角往て来る暫時待つて居れ……ソコでお住職一人有馬喜平治の道場へ尋ねて参りました、此時喜平治の弟子三四人居りまして、門人、サア、住職、此方へ通らつしやるやうに……先生、只今住持が参りました、喜、ナニカ、其七之助とやする者を連れて来たか、門人、イエ一人参りましたよ、喜、兎に角、ア之へ通せ……お住職は事、師匠に挨拶をいたしました、が有馬喜平治は横柄な人ですから、縁に挨拶も

藏武本宮

せす 喜住持彼の七之助と云ふのはお前の弟子であるか 住左様聊
か彼の親と縁がありまして愚僧の許へ來り修行致して居ります 喜
ナニカ修身は坊主の分際にて武術を教へて居るか 住イエナカ
武術は教へません唯だ學問のみ修行致して居りますが此度先生の
道場表看板へ彼が何か悪戯書を致したと云ふ事誠に以て恐れ入り
ました何うぞお許し下さるやうまだ漸う十三歳の幼年でございます
誠に修行を致して居る内にも今迄寺子も取りましたが彼の様か悪戯
な子供を取たのは愚僧も始めて折々小言を申しますがイヤモウ更に
聽入れません實は親許へ歸さうと心得て居る場合何うか愚僧に免じ
修辭辨に預かりたう存じます 喜否や勘辨相なりません十三歳の幼
年と雖も其背方は井中の蛙大海を知らず杯と記したのは是れ小兒に
あるまじき事である年齢は十三歳と雖も爲せる事はナカク大人も
及ばん位な悪戯を致した是非共お連れ下さい 住然れば何うか有馬

藏武本宮

殿只今連り参りまするに依て何うぞ充分小言を言つてお許し下さる
やうに又武門の事故彼れを一刀に打果すとか木劍を以て打懲らす杯
と云ふやうな事に相なつては誠に手前も彼の親より頼まれて居るも
ので平生手前の仕付けが悪いと云ふ事になると自然と之が市中へ廣
まり香勝寺へ學問の修行にやり或は手習ひに遣つても師匠の仕付け
が悪い杯と云ふやうな事があつては誠に難儀を致す事でございます
から何うか此儀は平に勘辨に預かりたい願りと詫を致しました
喜兎に角ア宜しいからお連れ下さい又手前も有馬喜平治の小兒を
捉へて立合を爲し又は首打果したりと雖も有馬喜平治の譽れになる
事でもござらんから……宜しい兎も角もお連れ下さい 住弟子の不
埒は師匠の仕付けが悪い故彼の罪を引受けてお詫を致してもお聴受な
くば致し方はございません只今連れ参ります何と云つても有馬喜平治
が承知致しません故に據るなくも住職は寺へ戻つて参りまして 住

サア、七之助よ之へ参れ之へ参れ……七、お師匠様如何でござい
ました。佳、大きに困つた事が出来たよ、お前がア、ン事をしたに依つて
何うしても有馬殿が承知が、お前を連れて往かなけりやア、あら
んから支度をあさい、能くやし付けて置くが先方へ参つたら事、御事に
お詫を致して、宜いかム、ソ……決して向ふへ参つて無法な事を言ふ
てはならんぞよ。七、委細承知致しました。衣類を改めさせお住職は七
之助を連れて有馬の道場へ参ります、誰言ふと、おく之が知れまして其
近所では、〇、オイ、大變だ、大變だ、彼の有馬さんの看板へ井中の、蛙
大海を知らずと書いた香勝寺に居らつしやる七坊さんが今日、有馬
さんの道場で切殺されるんだ。△、爾うだ、今香勝寺の和尚様が連れて
往かつしやるよ云ふ、大變だなア……丙、へーそれは大變だ、可愛さう
じやア、ぬいかなア。丁、ナニ七坊さんか殺されるソ……チャア、已れも
見に往かう、已れも見に往かうと云つて、一人二人三人四人とゾロ、

後から尾いて参ります、更に驚ろかぬ七之助は師匠と共に有馬の
道場へ参りますと、纏て有馬喜平治は、喜、サア住職此方へ通らつし
やい……ユレ、井上、道場へ通せ……二人道場へ通りますと喜平治は小
刀を前半に手挟み大刀を左の手に提げて道場の一段高き所へ立出で
喜、七之助と申すは手前か。七、左様でございませう。喜、不屈き者め、何
故道場の看板へ悪戯を致した。七、恐れ入りましたお許し下さい
喜、恐れ入った許して下さいと云ふ其挨拶を致す位ならば善悪は心得て
居るであらう、已れが悪いと思へばこそ恐れ入ると云ふのであらう、
れを心得て居ながら無禮な事を爲す、勘辨相ならん。七、ハ、ア先生、
勘辨下さらんければ何うなさいませう。喜、オ、汝の首を切落して呉れ
んに依つて覺悟を致せ……お住職は震へ出して、佳、之、リヤア、大變だ
……ユレ、マテ七之助飛でも、お事になつた……何うか有馬殿、
勘辨に預かりたい、愚僧が重々謝罪るに依つて、勘辨に預かりたい、預り

藏 武 本 宮

と謀を致しますから喜マア〜待たれよ住職身身に罪はあひ……
それでは七之助ナニカ手前は此喜平治へ對して手向ひをするか七
手向ひは致しません貴殿が首を切ると仰しやれば據るゝさらんから
首を切られませう併し先生貴殿が私の首を打刳ると仰せられてもそ
れではお切あさいと云つて首は差伸べませんぞ罪人が上役人の手に
掛つて捕押へられ打首に相なる時は身に寸鐵を帯びず殊に已れが罪
あるに依つて首を切られる事を覺悟致して居ればこそ首も伸べやうが
元々斯くやする七之助は已れが悪いとは存せん其首を刳ねやうとせ
られる此身の邪しまお相手に相ならう喜ナニ言はして置けば難言
過言憎くい奴サア来いと喜平治は大刀を掲げて道場へ下りましたそ
りやこそ事に至つたりと道場の窓から覗いて居りまする人々は何う
ある事かど片唾を呑で控へて居る此折門人共十二三人心地宜げに左
右に控へて居る七之助は住職に向ひ七お師匠様決して心配ある

藏 武 本 宮

な打たれれば夫迄の事向ふで切付けのを其儘に首を差伸べては切
られません私はお相手をする積りです此折喜平治はエイト掛腕を致
して大刀スラリ引抜いたソレ七之助が切られたと思ふと斯は如何に
ヒラリと後へ飛下つたお住職は七之助が身には脇差一本所持致して
は參らんと思ひきや何時の間にか懷中に秘し持たる儘か一尺二寸の
木劍を取出し有馬喜平治が大刀引抜きました途端に後へ下つて身を
捕へました隙さす喜平治が切込で參るのを受つ流しつ致して彼方に
飛び此方に飛ぶ七之助の其早業と云ふものは實に眼にも留らぬ程の
早さにて住職を始め并居る門人見物人迄も驚いた有馬喜平治も此時
喫驚致して居る所へボン〜七エイヤッ……と云ふ氣合を入れて
喜平治の手許へ這入ると見へまするが否や突然喜平治が右の二の腕
を七エイト打つ喜南無三……と喜平治が後へ下らうとする内に
何かは堪らん木劍と雖も後に至て日本國內に其名を擧げる宮本武藏

藏武本宮

政名幼名の折から致して是れ凡骨を脱れて居る腕前の七之助に打た
れました事故手が癩れて有馬喜平治刀を其處へ取落して 喜殘念
と云つて拾はうと致しました處を眉間の邊りを彼の木劍にて 七エ
イど打つ何かは堪らん喜平治は腦骨砕けて仰向けに其處へ倒れ唯だ
一打にて息は絶へました此有様を見るより多くの門弟等は「斯は重
見なりとて油断はならずそれ打取れよ」と一同又拔連れて七之助を追
取巻くを少しも動せぬ七之助は「七アイヤ門人衆此有馬喜平治殿は
先刻より手前が詫ると雖も聽容れず無禮な振舞い過つて改むるに憚
かる事勿れ再三詫れば許して然るべきに然はなくして手前如き十五
歳未満の少年に向つて眞劍立合杯と云ふ心得違ひ夫故斯く慍らしめ
た元より眞劍を以て手前に切付け手前が受損じたら此七之助は一命
を損すと云ふ已を得ぬ場合身体を護るが爲に向ふを打ち手前に打た
れて相果てたる有馬喜平治殿うれにお手前等は敵打と心得て手前を

藏武本宮

打たう杯とはお心得違ひなり其處退かずやと云ふ聲は宛然百雷の一
時に落しかと思ふばかり表に居りました人々も事の意外に慍るき香
勝寺の住職も膽を潰して「そら大變だ」と其儘に此處を逃出しました七
之助は大勢の門弟を少しも恐れは致しませんが今此處で彼是して居
る内に香勝寺のお師匠様が若し向ふの手に捕へられでもしては師匠
へ對して相濟まんど心得て 七お師匠様は心配あるか……サア一同
の者よ此七之助を打ちたくば速かに香勝寺へ参れ併ながら先づ有馬
喜平治の死骸は片付けろ師匠の耻は門弟の耻さりと右左から来る奴
を彼の木劍にて丁々發矢丁發矢と打据へましてお住職を突然脊負つ
た十三歳と雖もナカク力もあるお住職は驚ろいて……門人共が眞
劍を持って追驅けるから震へて居りやする故 七何も浮心配あるかど
逸足早く驅出しました此折有馬の門人達はそれ逃そなど大勢追驅け
て往く先刻より道場の窓から覗いて居つた人々は「サア見ろ有馬

喜平治が大變を看板を懸けやアがつてトウ十三にある七之助はんに打殺された宜い氣味だ云ふのでワウワツと騒ぐ吉岡七之助は香勝寺の住職を肩に引懸け飛が如くにお寺へ歸らうとして参りました處へ後からは大勢有馬喜平治の門人が追駈けて来る凡る道の三四町も来ると向ふより供廻十二三人召連れまして鎧を一筋立させ乗物にて來たる人があります此騒ぎに御籠の内にあつた一人の武士が武士一同何事が出来たか御籠に居つたる一人の若党が若ハッ……向ふより何か一人の坊主を脊負つて子供が隔け参りますを後より大勢追駈け來たるやうでございますスッ何事が出来たと御籠の内より出でましたるお武家は之なん宮本武左衛門とやする方方に致して後に此武藏の男にさられるは方でございます武藏の咄み鎧を執て相待ちます處へ此七之助が駈参りまして七アイヤ其處へお出でに相なつたは方は何れのは仁にて候か私は吉岡七之助とやする者有馬

喜平治なる者を只今眞劍勝負に依て手前木劍を持って彼を討果しました然るに門人共大勢追駈け参り私一人さらば敵を引受けまするが之なるは私の學問の師匠香勝寺のお住職何卒義を見てせざるは勇なしとやら侍士の一分に依て師匠をお助け下されし然らば拙者は後へ取て返し大勢の相手になるの心得何うぞ師匠香勝寺様を暫時お預かり下されど其言葉の様子舉動萬端に感心致した武左衛門 武オ一扱は聞きつる吉岡無二齋の次男七之助殿か心得たり住職は確かに預つたは心配なく立派に立合をせられよ 七有難し」と脊負つて居りました香勝寺和尚を宮本武左衛門に預け取て返して有馬喜平治の門人大勢を相手にしやうと云ふ茲に於て宮本武左衛門如何なる取計らいをして此場を治めまするか……之は武藏の書物にも宮本武藏が十三三歳にて有馬喜平治を殺したと云ふ事は歴然と出て居ります武藏が始めての働……武左衛門のお話しは次回に演じます

宮本武藏

此時宮本武左衛門は七之助の頼みに依りて住職を自己の乗物へ入れま
 した七之助も駕籠の側に居りて師匠を警固致さうと心得て居る内に
 大勢間近く追迫りましたから猶豫なく自分は大勢を相本に切死をす
 る量簡然るに前すし上げた通り懐中に秘え持たるは彼の木刀でござ
 います、真劍ではございせん故に宮本武左工門に向つて 七、實に卒
 爾な事を頼つて恐れ入りますすが、小刀を拜借致したい 武、オー心得
 たりと武左衛門が小刀を貸與へました左には木刀右の手に彼の脇差
 を執つて後へ引返さうと云ふ時に武左衛門は「暫く待たれよ七之助殿
 血氣に搦るは匹夫の勇である、先方より來たるまで此處に待つて居れ
 七左様でござるか」と云ふ處へ有馬喜平治の門人の内井上佐太郎近藤
 久馬の二人が 二人「ア、イヤそれにおいでなさるお武家只今之へ坊主
 を一人背負ふて少年の者参りしか如何にお見受けやせば其駕籠の内

宮本武藏

へ一人をお匿しあるは様子、サア速かにお渡しあれ 大勢爾うだ爾う
 だ若し無法お事を言掛けるあらば其お武家こそ相手ありと二人
 三人と段々集まつたる門人が大音を上げた故堪りかねて七之助が駕
 籠の後ろから出やうとするのを武左衛門之を押止め 武、斯は怪しか
 らん一言慮外千萬なる多一言、只今何かは知らん之へ來つて助け呉れ
 どやするに依りて助けた、猿鳥懐いに入る時は獵師も之を獲らず助け呉
 れと言はれたに依りて侍士の一分を以て助けた、お手前達は何人である
 か 門人、我々は此邊りに道場を出して居る有馬喜平治の門人、只今師
 匠喜平治事童兒の爲に打果され残念でござるに依りて師匠の仇討に参
 つた、シテ、身は何處の仁であるか 武、ハ、ア有馬喜平治殿はナニ
 カへ然らば只今一人の僧を背負ふて來たる少年の爲に討たれたと仰
 しやるか、情けなき處の劍術の指南者かな、夥多の門人を取立てる者が
 兒童の爲に打たれる杯とは誠に以て柔弱千萬…… 門人、アイヤお黙

藏 武 本 宮

り召され師匠の悪口は聞くに及ばず、サア何うしても其坊主と小僧を
お出し下さらんければ貴殿がお相手あり、ソレツと云ふ間も亦く四十
何人宮本武左衛門の周囲を追取巻きました、お住職は御籠の内では
怪しからん事にあつた、七之助の爲に此お武家まで御離儀をなさるか
スワ大變なりと心配をして居る、七之助は少しも驚ろかん、若し師匠へ
大勢の奴等が手向ひを致しなば相手にあらうと云ふ量簡にて相待つ
て居りますると此武左衛門が、武然らば各々へやし聞けん、手前事は
肥後國熊本の城主加藤肥後守家來に致して宮本武左衛門とすする者
なり、用事あつて此邊りへ参りしに、只今之へ來つて助け呉れど、一言
に依て助けたり強て各々が相手とありたくば速かに是る宮本武左
衛門お立合やさう、門人「ナニ熊本の宮本武左衛門と……聞くより門
人共少しも恐れまして一人も手を出す者亦く一人下がり二人下がりす
る、其内武左衛門の御籠の後ろに居りました七之助は、七宮本先生彼

藏 武 本 宮

の門人共は貴殿へ對して無禮な一言モウ此七之助覺悟を致したりお
止まり下されど出やうとするから武左衛門が「マア待て斯くまでや
しても分らんか……サア有馬喜平治の門人卒で此上は此住職と七
之助なる者を助けた宮本武左衛門がお相手にあらう、若葉共に於さま
しても主が主から來家が來家、何れも其勢ひ猛くサア來い來れど各自
に刀の柄へ手を掛けた、如何にも加藤肥後守と云ふと大したお名前で
ございまして其は家來の宮本と云ふので有馬喜平治の門人之は敵は
んど一人減り二人減り蜘蛛の子を散らす如くに何處へか逃去て仕舞
ひました、此時武左衛門は大口開て打笑ひ、武「アレ見られよ住職有
馬喜平治の門人は拙者の一言に驚ろいて逃げ去ると云ふ……ナニ彼
れしきの徒が百名参らうとも二百名参らうとも此武左衛門驚ろさず
さん少し手前の廣口かは存せんか……」と云ひさま仁王の如く突立ち
上りし有様は實に三國の時燕人張飛が敵の大軍を退けたる時も斯

藏 武 本 宮

くやと思ふばかり其猛勢に恐れて皆追々に逃去りました。武左衛門は「兎に角此御籠で香勝寺とやらへ擔ぎ込で……お住職をお助けした以上は何處迄も御警固やさうと言へば七之助は「イヤ〜」モウ是にて宜しうござる。武今一時お助けやしても萬一彼の卑劣の連中が途中に待つてお住職へ如何様な事を致すかも知れん取急ぐ旅ではござらんからお送りやさう任職は此時に武左衛門が親切を悦び遂に御籠に乗せられたる儘香勝寺へ参りまして其内にモウ日も暮れて仕舞ひました。彼方ら此方らでは大評判……お住職は寺へ立戻りまして是から宮本武左衛門先生を悉く尊敬致して養應爲します。武何うぞお構ひ下さる。住何は兎もあれ一時當寺に在つて休息を願いたい。そこで武左衛門も夜分にも相ありましたる事故に武宜しい兎に角今晚は當寺に多厄介に相ならうと打寛いで居ります。處へ此一件を誰が知らせましたるか當時新見村に居ります。處の吉岡無二

藏 武 本 宮

齋候たいしく香勝寺へ驅來つて見ると門内には一挺の御籠があり又若黨も二人ばかり居ります。故驚ろいて扱は俸七之助はトウ〜有馬喜平治の爲に打果されたのではないかと心配を致して寺内へ道入るを七之助親の姿を見るより早く飛出で、七、オーお父上……無コラ如何致した。七、只今宮本先生の爲に助けられお住職と共に此寺へ無事に立歸りました。無ナニ熊本の宮本武左衛門先生と直ぐにお目通りを致さん……と進み入る住職は住職で「マア〜」宜うお入來さされた無二齋殿モウ實に御子息の悪戯には困つたもの成べくは貴殿のお耳へ入れまいと心得て居つたのに……無イヤ〜只今農民共の話しを聞いて心配旁々是まで参りしが兎に角其武左衛門先生に御面會致してお禮を下さう是から宮本武左衛門に始めての對面尤も互に名は知り合て居ります。中故一通りの挨拶済み。無手前事は瘦浪人吉岡無二齋と申す者。武之は痛み入たるお言葉。加藤肥後守

藏 武 本 宮

家來宮本武左衛門、子息七之助殿のお働き實に感心致したナカ、少年とは思はれませんが、無、イヤ武左衛門殿七之助はモウ私の倅でござらん勘當致しました、ヤモウ七八歳の折から致して勤もすると親へ對して手向ひするやうな振舞を爲し、已れが少し小力のある處から、盛は固より何かの事が粗暴でござる途には、彼奴は人を害し……殊に今聞けば有馬喜平治殿をトウ、討たど云ふ事、人を殺したる者は我子でござらんモウ勘當致しました……コレ七之助其方は速かに此處を去て仕舞へ、それとも親の前に於て切腹を致すか、迫られたに依て七之助も「之はしたりお父上、有馬喜平治如き奴が彼のやうな看板を出す時は今お父上は世を棄てお仕舞ひなされ武術もお棄てなされた、雖も吉岡流と一派を開いたお父上が此邊りに居るのに有て無きが如き喜平治の振舞ひ、憎い奴でござるから……無、ヤ猪口才な事を汝少年の分際ですするか、親子の押問答の中にも親は親子は子なり、何とな

藏 武 本 宮

く愛情の溢るゝを察した宮本武左衛門「それでは斯様なさい無二齋殿暫時、子息は此武左衛門がお預かりやさう、今勘當すると仰せられた處がマダ、十五歳未満ナカ、お智恵もある今のお言葉一人此儘追放すると雖も天無縁の民を生せず何處へ參つても十五歳にもあらば立派な主取りも出来る、身分じや、けれ共此儘追放すは不憫じや、兎に角武左衛門がお預かりやさう、と云ふのは有馬喜平治の門人がまだ大勢あるに依て、萬一其者が集まり又此七之助殿へ對して如何様か害を加へるかも知れんから、寧ろ國を隔つたる熊本へ連れ參り夫から先きは此武左衛門の胸中、何と無二齋殿勘當をしてモウ親子でないと思ふ一人の子をお棄なされる位、さらば此宮本武左衛門にお預け下さる思召しはないか、うれを聞くより側に居た香勝寺も「ヤ之は誠以て宮本先生のお扱かひ、私も暫時此寺へ置いて充分に學問もさせたいが兎に角、後難を恐れるに依て之は左様なすつたら宜からうと思ふ、此

藏 武 本 宮

處で直に話しは極まり吉岡無二齋は「それでは何うか武左衛門殿お頼み申す、モウ武左衛門殿へお頼み申した以上は此後七之助が何か心得違ひがあつた時は斯く致して下さいと匆々に筆を取出して白紙へ書て差出したのは

第一箇條 倅七之助事貴殿へお預け申せし以上は親に代つて

分には訓誡の上天晴れ武藝者に相ある様御指南被下度事

第二箇條 愚鈍ならば奴僕にして侍被下度候事

第三箇條 人倫の道を犯したる時はお手打不苦候事

此三箇條を書いて宮本武左衛門に渡し、無コレ七之助其方は勘當を致した子だに依つてモウ言ふまでもないが此三箇條を守り武左衛門殿を親とも思ひ主とも思ひ萬事を慎んで教を受けよ……却て長居をしては……と云ふのは兎に角一時は親子の分れにある事故氣丈とは言ひながら七之助が別れの際に落涕でもしてはあらんと吉岡無二齋は

藏 武 本 宮

匆々にして武左衛門に分れを告げて表へ出る後見送つた七之助「アイヤ親上……」と云ふから無待て、モウ此無二齋は父ではある併し親子と名乗りたくば宮本先生の許にあつて今までの無謀赤心を改めて人間とあらば又親子の名乗も致する予……萬事は宜しくと言葉を遣して悠々と出で往く姿を見送つた宮本武左衛門は先づ今日日本に於て吉岡無二齋の如きは眞の侍士であると思ふ後を見送りまして是より庫裏へ來り香勝寺の住職と種々の雑談圖らずも當所へ來つて武左衛門が吉岡七之助と云ふ豪傑を一時預かり、マタ此時は自分の養子にするまでの心はございませんでしたがるは不思議なもの是从から宮本武左衛門が彼の七之助を遣れまして肥後岡熊本へ立歸り其内ッヒツヒ其情愛に絡んで七之助を宮本の養子と相おし宮本の姓を名乗り武左衛門の武の字を取て武藏即ち武藏と改名を致す、是までは子供の内のお話ですが追々看客諸君の存じの名高き鍋蓋の立合或は箱根

山の狼退治又は姫路のお天守改め杯と云ふ面白きお話しに移ります
 借此一回は佐々木岸柳のお話しに移ります是まで宮本武藏のお話
 しは講談又は種々の本にも出て居りまするが肝腎の左々木岸柳の屈
 歴が詳しく出て居りません故に之を演じます此左々木岸柳は宮本
 武藏に劣らざる豪傑であつたさうでございますが風としたる事よ
 り武藏の實父無二齋を打ちましたから後に武藏に打たれまする面し
 て此ガンリウと云ふ劍道者は二人あります一人は寛永の年間に小石
 川白山下に東軍流の達人石川軍刀齋巖流一人は佐々木岸柳吉高と
 します劍道名譽の人でございます今此岸柳の山緒を尋ねまするに永
 祿年中近江の守護職佐々木六角入道承禎と云ふ方に一人の妾があり
 まして名を松ヶ枝とす生れは出羽國最上在の者で至て美人でござ
 います承禎常に此女を愛し此女も亦至て心掛けの宜い者で能く承禎

に仕へて居りました其内に一人の男子を設けましたから承禎大に喜
 んで名を久三郎吉高と附けました之が即ち後に岸柳でございます中
 には佐々木岸柳を高の知れたる浪人だ杯と云ふ事を今迄やして居り
 ましたがナカ／＼左にわらず斯の如き立派な人の胤でございます然
 るに承禎足利將軍義昭公に背きましたから義昭公は尾州の織田信長
 朝臣を頼み六角承禎が籠り居る江州觀音寺の城を攻させました承禎
 如何で織田の猛勢に敵ふべきや之は迎む往かんと考へて永祿十一年
 九月十二日遂に城を明渡し其身を始め家の子郎黨に至るまで皆離散
 致して仕舞ひました其騒動大かたからず上を下へ騒ぎ立て家財を
 棄て逃るもあり老幼を扶けて迷ふもある其中に妾の松ヶ枝も據こ
 るあく一子久三郎を懐ろに入れて乱軍の中を漸うに逃れ少々の金子
 を持つて故郷の方へ志して立出でました習はぬ旅とは言へ其心平生
 から豪膽でございますから女ながらも少しも驚ろく氣色なく出羽國

最上の片在所へ来りました然るに父は既に此世を去り今は唯だ母一人にて漸う細き煙りを立て其日を送つて居る處へ戻つて来りましたから母は實に夢かと思ふばかりに驚き又喜んで母宜う戻つて来た松ヶ枝お前は近江じやら云ふ遠い國へ参り初めは賤しき奉公をしたさうだが今は大したお方のお妾にあつたと云ふ事を聞き妾しも一遍は尋ねやうと思つて居た處、オー、それに懐て居るはお前の子であるか。松母上様之は六角様と云ふお方のお胤であつて妾が産み落したる此子名前は久三郎と申します。母、オー左様であつたか宜うこそマア、……して何う云ふ譯で此度は故郷へ言はれて松ヶ枝織田の爲に云々の事にて滅ぼされたる一伍一什を話し松モウ是よりは此お子も仕方がない土民に暮して仕舞ひたくはないが此片田舎で育てるより外はないと云へば母親に於ても母鬼に角妾しの爲にも孫であるからはよりは何うがなして親子三人其日さへ送つて往けば宜い

と云ふもの。松母様決して怪心配なされませするな蓄への金子は、一百兩程の金子を出しましたから母のお袖も大に喜び直に村長の許へ参つて此話しをするに村長も之を聞いて村長アそれは結構な事じや、マア何にしてもお前一人で食へる事も出来まい處へ娘どのが戻つて来さしつて加之孫までも連れて来たといれば目出たい事、それでお前の所も又立派に立つ村の人々も皆助けて呉れまして不潔い家ではありまするが彼方を繕ひ此方を繕ひ漸う家も出来ました爰に今日と經ち明日と過ぎて一箇年ばかり居ります内に母親お袖は久々にて我が娘に逢ひ嬉しいと云ふ心の弛みか却て身体が悪くなりまして二月ばかりの患ひで病死致して仕舞ひました松ヶ枝の歎きは大かたあらず折角故郷へ尋ねて参り母親にも是からは安心させやうと思ひし甲斐も亦く相果てましたから泣々野邊の葬送を爲し七日の追善も心ばかり勤めまして夫よりは我子久三郎の成長を楽しみに一日

藏武本宮

と送りまするが外に財産もございませぬ故郷を洗濯人仕事廻らぬながらも其日を送り何うか此久三郎は胤が胤故成長の後天晴侍士に致したい又運あらば一國一城の主人にもなれるお方と唯だそれのみを楽しんで居りましたお話しは段々過ぎて久三郎十三歳にありました處が天性骨は太く力量は衆に勝れ才智も尋常でありませぬ故村の者は舌を巻いて居ります發端にも宮本武藏が未だ幼年にて七之助と申した頃凡人を脱れた勝れた人と言はしたたが此佐々木久三郎も同様の人でございませぬそれですから後に岸柳島と云ふを遺した位で武藏が敵を討つ時にもナカ〜一通りでは討てませぬ双方共名人同士の実立合之は末に至つて敵討に詳しく申し上げませぬ此久三郎も悪戯兒でございませぬ近所の子供達が毎日言付けに来る母親の松ヶ枝は「ア一誠に濟まん事でございませぬ」と詫を致して戻つて來ると頼り小言を言つて何うかア一云ふ子供と交つて呉れるな遂には士民

藏武本宮

とあり又山へ遁入つて獵師の眞似振をするも賤しい者になつて仕舞ふと意見を致しませぬが久三郎は未だ己れは近江國の守護職たる佐々木六角承禎の子と云ふ事は自分では心得ませぬすると同人が十五歳にありました時松ヶ枝は風邪の心地で二三日寝ましたが何うも尋常の風邪でありませぬ故自分の心休ても母親同様之が重うあつてモウ助かるまいと覺悟を致しましたる處から久三郎を枕邊へ呼びました久母さん今日はお心持は何うでございませぬ母「オ一昨日に變つて今日は大分心持も宜い、ア鳥渡此處へ來てお呉れよ顔打守りまして松ヶ枝は病に苦しき其中に蒲團の上に坐を占めて、母「久三郎今日はお前に話す事がある、お前も最早十五にもなつたからやし聞かせるがお前は眞實の父の顔は存じまい産れて間もさく此出羽國最上の邊りへ參つて見る影もなき詫住居はして居るもの、是から後は彼の悪戯は廢めて仕舞ふて劍道武術を學んで天晴れお人となつてお呉れ

藏 武 本 宮

久「母さん、それでは私の父上様と云ふのは、母「オ、近江源氏の嫡流に
て佐々木六角入道承禎殿の胤なるや、我が亡き後にても心を改め身
を苦しめ文武の道を能く辨へ佐々木の家名を興し天下に名を揚げよ、
必ず父母亡しして假にも悪き道を學び非道の心を出さぬやうにして
呉れよ、才智衆に勝れたりとて自慢する心を起し人を侮り又は驕り増
長をしてはありませんぞよ、然すれば此世を去るとても草葉の蔭にて
此母が喜んで居るぞよ、又今予した一言を守らぬに於ては縱令死でも
死切れぬぞよ、久三郎の顔を見て潜々と泣く其時に腕拱いて居た久
三郎「オ、それでは母様私は佐々木承禎様の子でありますか、此間
村の空兵衛とんの話しに近江の豪傑佐々木六角承禎と云ふ人は信長
の爲に亡びたと云ふして見れば母様其織田信長は敵……母「コレ、
未々其様な事をお前が言ふてはなりません、宜いかやモウ之を言ひ
聞ければ何も妾しは心残りはない、サア此處に大切ある系圖があるぞ

藏 武 本 宮

差出したるは是れ即ち近江を去りまする時に六角承禎が呉れたる六
角家の系圖の寫しと久三郎は紛ふ方なき我子ありと書た所謂證書で
ございます之を渡しました時に久「ハ、ア左様であるか母様、それを
知らずして今迄土民に交りたり其子供達と遊んで居りましたが爾う
云ふ事あらば是より私は武術を充分に學び天晴なる人となります
に依て安心をして下されよ母様、母「オ、それ聞いて安堵した、ドリヤ
一睡りやりませうと布團の上に横はりましてスヤ／＼眠るかと思ひ
きや時も入相諸行無常と告渡る最と物凄き鐘の音と共に母は段々ど
息を引取る様子、今布團の上にお坐りあされて我が身の素姓を悉く話
して下された母上がヤレ訝かしの事やと側に寄りまして久「母様、
々と呼べば兩眼を開いて二つ三つ點頭きました、之が此世の別れに
て遂に松ヶ枝は病死致して仕舞ひました、サ、モ豪氣の久三郎も遂に
は祖母さんに別れ今又母上に別れる事故泣より外はなく途方に暮れ

藏 武 本 官

て居りました其内に近所の人々も集まり来り 甲「マア、久さん仕方がない、母さんの死骸へ取纏つて泣いて居たどて決して戻るものじやない、早う甚兵衛さん太郎右衛門さん何うか檀那寺へ……」乙「オ、それじやア俺が棺桶を買ふて来やう、杯と手分けをして、それは田舎の事ですから親切に彼方此方と奔走をして其明る日に葬式は仕舞ひました何が何を云ふにも久三郎は未だ若年ですから近所の人々も一人二人宛代るゝ来て世話をして居ります其内に七日の追善供養三十五日四十九日百ヶ日も過ぎまして後は何か其日の業をしなければ食べるにも困りまする故他人に連れられて山へ這入つて樵をさし又は人の使ひ杯を致して其日を送つて居りましたけれども前中し上げた通り素姓の正しき近江源氏の佐々木承頼の子でございします故に風と自分の思ふにも其日の穰ぎとは言ひあがら賤しき業をして一生を暮すは残念だから一層の事、劍道修行を爲し世に英勇と稱せられ父祖

藏 武 本 官

の家名を再び興し一國一城の主と成るべしと心に深く思ひ込み是より久三郎は孤兒なれども懼るゝ心もあく山に入りては木の枝を折取り木刀と爲し終日岩を敲き或は大樹を相手とあして腕を固め又或時は峯に登りて身体の軽くなる事を勉め又は谷に下つて游泳の稽古を爲し、斯く致まで月日を送つて居りました處が此久三郎が良き師匠と頼む人の出来たと云ふのは茲に出羽國山形の城主最上出羽守藤房公は御大祿であらせられました文武両道にも暗からず上を尊び下を憐み臣を愛し誠以て名君でございしますから御領分の人々も此太守を尊敬致して居ります然るに此御藩中に知行三百石を領す野田大膳と云ふ人がございします之は劍道の達人尤も最上家は武術が大府盛でございまして此お家に飯田播磨守武壽と云ふ御仁がございしました此お方は伊東一刀齋の門人で自ら飯田一刀流と名を賣た程の先生とれに肩を并べる野田大膳一家中の者共残らず此人を師として劍道を

藏武本宮

學び門人も數百人をさいます。頃は彌生の半ば山々の櫻は爛熳と咲満ちまして宛然銀世界の如く岩間の蹠躑は花を重ねて宛も毛氈を敷たる如く實に其氣色は言葉にも述難い位廣く彼方を見渡せば種々の花が野に満ちて咲て居ります。又向ふを見ますると千歳山とやして之は俗に出羽富士と云ふ能く富士の山に似て居ります。其千歳山の麓には一流の川がおります。之は矢張り最上川の支流にて長狭川とやします。大膳先生は一日閑を得まして櫻觀に参りました。去來と云ふ人の發句よ

なにごとぞ花見る人の長がたな

と云ふ句があります。が今に之は分らぬと云ふ人がございます。扱此風流の花觀と云ふものは別段なもので全く花を見るならば人の居ない所で唯だ一人四邊の閑靜な所で見ることが全くの花見です。然るに爾う云ふ連中は少なくて大抵は花より團子の方で若い連中が花見に参りま

藏武本宮

すると甲何うだい今日はお前花見に往たさうだが見て来たか乙何うも大層人が出たせ花の下で酒を呑むが樂しみだ又美しい女達が鬼子ッこうをしたり隠坊をしたり大勢寄て騒いで居たが中に願倒つた奴があつて緋縮緬の腰巻を出して轉げたのは誠に面白かつた。甲そりやア宜いが花を見て来たのか乙否や花は見ずに歸つて来た杯と云ふ無風流が多うございます。野田大膳と云ふ先生は武術者に似合はず優美い事を樂しみました。尤も之が侍士の常でございます。大膳先生は破子辨當狐に酒を入れて奴僕に持たせ此風景を眺めて此方の方へ参ります。と早や夕景に参ります。

歸るさをかにと夕日の糸櫻いと色添ふ花の木の下

と云ふ古歌がございます。花見の人々はモツ夕景の入相櫻を別れどして東西に散り南北に別れて己が隨意に立戻りました。此時大膳は狐の酒を呑尽して之を小者に持たせ一子墨丸とやして當年三歳に参りま

藏 武 本 宮

する悴を連れて大サアモウ戻らう戻らうと守の一端に豊丸の手を引かして諸共に此處を立去り離れて向ふの山邊に近づきますると此處にも木の間木の間に櫻咲き満ち岩間々々に躑躅が咲いて得も言はれぬ風景でございますから思はず立止まつて眺めて居りますると此御子息の豊丸と云ふのはマダ漸く歩く位な年齢でございすがナカク悪戯で如何致したのでございませうか此守婦が油断をして居りました内に岩間の躑躅を折取らんと云ふ氣がナヨロ〜と馳出しますると苦蒸して居りまする大きな石の上へ上る途端に前の川へ這り落ちました守の女は「アレ旦那様大變でございます……アレ若様が……大「オー早う往かんかど大膽が走りまする内に急流でございするから早や豊丸は小半町も彼方へ流れて参りました故に下僕の周助は儼然しく川へ飛込み守の女は聲を上げて泣騒ぎ女自分がお守を致して居りました若様が川へ落ちたとあつては自分も共々此川で死ぬ

藏 武 本 宮

くければ旦那様へ相濟みませんと泣て居る大膽は川上にあつて大誰か来よ誰か来よと言ふて居ります尤も出羽の川は總て急流でございますから之を見た人々も「ソラ野田の若様が川へ落ちた己れが飛込さう我が飛込めと騒ぐばかりで一人も飛込む者はあゝ其内に一町半程流されました處へ先刻から向ふの堤際で野田大膽先生の花見の様子其お侍士の風姿を眺めて頻りと羨んで居りました一人の小僧が突然川へ飛込みまして援手を切つて遊ぎます故彼れは何處の小僧だらうと云ふ内忽ち二町ばかり遊ぎまして豊丸殿を左へ抱き堤へ上つて小「サア皆さん之は彼のお侍士の若殿様だ俺がお助けすしたに依て早うお侍士にお知らせ下さい水は澤山呑で居ない却て流れが激しいから水を呑む間もあく流れたからお身体は何ともあゝと言つて居る所へ野田大膽殿續いて家来も驅来り大如何にも其方は感心な者だ我が悴を助け呉れ辱けあゝシラ姓名は何とす尋ねられて小僧は「ハ

イ私は……とは是から姓名を名乗る是れ何人でございませうか看客諸君も大抵想像にありませう之あん佐々木久三郎後に至て佐々木柳と云ふ豪傑になりませす佐々木の傳記が今一回ございませすから暫時休憩を致して次回に上げませす

第六回

此時彼の小僧は「之は先生様で在らつしやいませるか私は御城下を離れませる在に住で居りませる久三郎と申す者でございませす。大ア、ア、シテお前の両親等はあるのか。久イエモウ私は今は孤子で父母もなく唯だ一人村の人の世話を受けまして或時は山へ這入り獵師の真似も爲し又或時は樵採を致して其日を送つて居りませる者。大ア左様かそれは不便の事である併し今此急流へ飛込で我子を助け呉れた水練の程は感心致した何人より學ばれたるか。久イエ之は別にお師匠様とてはございませせん山々の谷へ身を投じて遊びの稽古を致し

て居りませす。大併し堤の上より川へ飛込む時にエイと云ふ掛聲をして飛込だが總て掛聲と云ふものは身に答へた所がなければ定まらぬものお前は幾分か劍法を學びしかと云ふのは流石野田先生此小僧の舉動應接萬端何處もなく武張つて居る所に眼を着けたそれも其管佐々木承禎の遺子ですから……大層大層の氣に入りませして。大兎も角も私の屋敷迄俱々参るやうにと云ふので同氣相求め同病相憐れむと云ふ喻の通り久三郎の方にも今人々から聞けば彼れは當御城主様の劍術の先生だ野田大膳様だ、エライ者だと云ふ話してございませるか久三郎も豫々劍道を學びたいと云ふ氣がありませるに依て久有難う存じます然らば私は家ども無く彼方らの家の物置を借りて寝伏しを致し此方らの人の様を借りて寝たり致して居りませる者故にお供を致したう存じます直ぐ大膳殿は久三郎を連れてお歸りになりませすと奥方も此話しを聞いて大層喜び守の一婦は奥様へ對して

お詫を致しますと、奥ア一仕方がない丁度今が危険い年頃手も
離されぬのが子供の常、何もお前が悪いのではない併し其百姓の子と
やらが助けて呉れたのが豊丸の幸ひ、其者を之へ、家來の案内にて
久三郎は野田御夫婦の前に両手を支て挨拶を申し上げますと大層
奥様のお氣に入つて、奥それでは當分宅へお置きになつては、良人
大膳殿へ御相談にありましたから其明る日に大膳殿は村の甚兵衛と
云ふ者を呼出して、大當分私が宅へ置くから左様心得て居よ、どのお
言葉甚兵衛も大に喜んで、甚それは誠に有難い仕合せでございませ、
此久三郎は可哀さうに遠い國で産れまして故郷へ戻つて来る間も亦
く祖母は病死致し一二年経つ内に又母親の松ヶ枝に死別れました夫
故私は親類ではございせんが餘りの惘然さに世話を致して居りま
した、此子はナニカ様子を聞くとお武家の落胤だとか云ふ事、何うぞ
大膳様此奴を一人前の人にしてやつて下さるやう若し又此久三郎に

心得違ひがありましたら此甚兵衛が引受けを致しますから何うぞ
何分お願い致します、金受けになる人も人受けになるなど世の人の
云ふのに甚兵衛が進んで受人にありましたから大膳も安心を致し愈
々久三郎を自分の家へ置く事になりましたが併し中間にして使ふは
惘然とあつて羽織袴を着けさせ大小を手挟み若黨にして使つて居り
ます、それから久三郎に劍術の稽古をさせるまで道場へ出して大膳殿
は御門人井上龜五郎と云ふ者におやし付けにありと委細承知仕り
龜サア打込で来いと云ふ久三郎始めて竹刀を執りました故に何とあ
く調子が可笑しい中には笑ふ人もありますから大膳殿「決して笑
ふな、マダ其道を辨まへ、あいに依つて体の構へ方も可笑しいが、ドウして
足の踏方アノ氣合の様子は初心としては旨いものだ、とお褒めになる、
尤も大昔しは劍術の稽古に面鏡手胴を着けてホカリ、敵くのでは
ございせん、既に直眞影杯は最初木劍を持って形を仕ふ乃で打つ手、

蔵 武 本 宮

く手受太刀等の形を充分學んで終ひに向ふを打つやうにあつて頭草
とやす厚い皮を額に當て、鉢巻を致します中には木劍の立合と云ふ
と素面素籠手で向ふを打つた杯と云ふ者がありますすが決して爾う云
ふ事はありません木刀で打てば骨までも砕けます木劍は唯だ形を仕
ふだけで向ふを打ちますのは袋竹刀でございます袋竹刀とやすと
革の丸き袋の中へ竹の細く切たのを何本となく入れてありますから
敵かれると少しは痛みますすが決して怪我杯をするものでないそれ
が段々ど當り前の竹刀を持ち面籠手胸を着けて敵き合ふやうになつ
たのです併し是等を長く演じますと傍退屈ですから略しますそこ
で龜五郎殿が久三郎と立合つて其日一日教へてやり夫より毎日く
教へてやる處が感心なのは小僧さん夜分にあつて皆門人の寝た時
分に一人道場へ參つて太き赤檀の木刀を振て居ります或る晩の事
野田大膳様がお居室にて茶にうかされしか寝に就かずウツラくし

蔵 武 本 宮

て居ると道場で「ヤー、ヤー、エーッ……」と云ふ掛聲がしますから今頃
何であらう誰が稽古をして居るであらうとソツと來つて見ると久三
郎が両肌を脱いで木刀を右左へ振て居る感心なものだ外の弟子達は
稽古を終ふのを待て居て直ぐに城下へ遊びに往き女でも調弄ふか酒
でも呑む閑さへあれば遊びたがる、それに引換へて久三郎は目の覺め
て居る時は始終劍道の事のみ心に心を入れて居る實に感心したから其
れへ出て褒めやうと思つたが、イヤ師匠の目を恐んでまで稽古をして
居るものを褒めては却て爲にあらぬと思ひ返して其儘にお寝みにな
りました斯くする事久三郎は三箇年併し餘り物に凝りますと段々
身体が疲れる事故或日大膳殿が側へ呼んで 大久三郎やお前は儘かの
内に劍道は大層上達を致したが併し慢心をしてはならんぞよ又修行
は宜しいが少しお前は無理をやるやうだ人間も修行をする時は修行
の時又身体を養ふこともあければならんから夜深に至るまで道場に

藏 武 本 宮

居て餘り身体を使つてはありませぬ。久有雖う存じ升、それではお
師匠様私が毎晩皆さんのお寝みにあつて居る時道場へ出て木刀を振
て居るのを先生は御覽になりましたか、恐れ入りました。大「イヤ謝罪
る事は赤い感心致して私も喜んで居るが併し身体は大事にするが
宜い師匠の言葉に久三郎も涙を流して喜びました。其内段々歳を重ね
まして十五歳より二十一歳迄七年修行を致しました殊に野田先生も
外の弟子とは違つて此久三郎には最も念を入れて教へました。唯だ道
場を出て木刀竹刀を持つて敲き合ふばかりが稽古ではなくチャンと
坐つて居る時も一々物を尋ね答へが悪いと小言を言ひ答へが善け
れば之を褒める所謂口傳でございませぬ。總て物は見たり聞たりするの
は極く薬でございませぬ。夫故七箇年ではありませぬが他へ參つて十箇
年も十五箇年も修行したよりか尙更確かお腕前にあつて今では野田
先生の門人の内にて久三郎に及ぶ者は一人もなく師匠の代稽古が務

藏 武 本 宮

まゝるやうにありましたから家中一般の人も賞讃して 甲「彼の若衆の
久三郎殿は終ひに野田先生の養子になるか知らん 乙「イヤそれでも
豊丸殿が在らしつた限りは養子とはされませぬ。丙「それでも先づ彼の
人より外に野田先生の後目はあるまいと家中の人にも可愛がられて
居りましたる内に人間は老少不定病の器で如何なる豪傑も仕方のあ
いものど見へて此野田先生が重き病とありまして早や半年餘り道場
へ出て教へる事が出来ないうれが爲に最上公を始め御重役も大府御
心配をさされ御大祿の太守ですからお醫者も澤山居りまして種々の
手當てを致しましたが其甲斐もあくトウ、大膳殿病死致されまし
た之に依つて兎に角家督相續は悴の豊丸殿と極りましたが若年の事故
ナカ、父の後を引受て一同へ指南をするに云ふ譯に參りませぬ。夫
故に此久三郎が先づ一時豊丸殿の後見となつて門人共へも教へて居
りました茲に於て久三郎へは最上公から別に祿を賜はると云ふ仰せ

がりましたが此人は至て變人で、私は元野田大膳の家の若黨に住込
みました者故何處迄も野田家に仕へて最上公へは仕へません、師匠が
病死された後は未熟ながら此久三郎が御門人達へ劍道の指南を致
しては居りますものゝ豊丸殿が後目相續をなされたに依て其豊丸殿
に仕へ彼の人の後見は相勤めするが最上公よりの縁は頂戴致しま
せん、と斷つた云ふのは何だ、と云ふ久三郎の量簡で昔から劍道
者も夥多あるが我も是より益々修行の上何か一つ他に優つたる術を
編出さんと夫れのみ考へて居る、然ればにや後に岸柳と云ふ名を得た
即ち柳の枝を相手に致して一流の奥義を極めた人之は後のお話して
ございます、光陰關守あくして矢の如く早や幾歳か過ぎます内に以前
に變つて此久三郎少しく慢心の兆が今迄は若黨で居て家中の人
々にも鄭重に挨拶をしたのを自然と師匠風を吹かして遂には言葉も
難に成り初めの内は仕方がない、縦令若黨であらうとも腕前が確かで

師匠の後を引受けたから取も直さず大膳様と思つて居たが餘り小言
が激しい故に段々と家中の者が悪口を致して、甲時に竹村さん癪に
障るじやアないか、乙何を……、甲彼の久三郎さ、乙爾うさ實はお
手前が言はなければ拙者から爾う云はうと思つた、初めの内は大層温
和しくして居たが此節はイヤに威張つて來た、モッ俺は稽古に往かな
い、幾ら劍術の腕前があらうとも高の知れたる彼奴は土民、動もそると
己れは土民ではない、近江國に有名處の一城を築いた者の倅だ、杯と言
つて居る俺はモウ罷めやう、甲俺も罷めやう、と一日く、に門人が段
々ど滅て仕舞ひました、然るに野田豊丸と云ふ人は至て温和しい内氣
あ方です、から時に依ては久三郎に向つて意見を、豊叔お前は俺
の家來と云ふやうなもの、俺が三歳の折川へ落ちて命を繋る處を助
け呉れた大恩人、亡き父のお言葉に依て俺はお前を兄さんと思ふて居
るが今日も今日とて登城をすれば家中の面々がお前の噂さ成程、父上

様の後を引受けて呉れて是だけになつたは辱けないが少しも前が慢
心をしたやうたに依つて何うか其心を罷めて貰ひたいと意見をします
と諫言は耳に逆ふ良薬は口に苦しの喩へで自然と之を鼻で扱らうや
うにあつて來ましたから豊丸殿并に大膳殿の未亡人も自然と久三郎
へ對して言葉も交さぬやうになつて來ました利口な男でございます
から早くも之を知つてエー斯様寺所に居て生涯終るよりか一層の事是
から諸國を廻り劍道修行を致して一の流儀を廣めやうと決心致しま
して久三郎は二十五歳の折出羽國山形を後と致して劍道修行のため
國々を廻りまする、扱道中のお話しは別段なく泊りを重ね日を重ねま
して参りましたのは尾張國茲に日本武尊のお持ちにありました彼の
名高き草薙の御劍の納まつて居りまする熱田の宮へ参詣を致し圖ら
ずも此處で劍道の妙手をつ編出し是から久三郎が岸柳と改名の條
りより圖らずも宮本武藏の實父吉岡無二齋に温泉場にて出合ひ初

第七回

めは親しく致しましたが事の間違ひからして無二齋を一刀に切つて落
すと云ふ宮本武藏の敵討にある講談、佐々木久三郎岸柳成長の傳記は
是迄に止め置き後に戻つて宮本武藏のお話しに移りまする之は次回
に詳しく演じませう

茲に佐々木久三郎は尾張國熱田にて一流を編出しました其譯はマダ
修行中であつたとして或時海岸に出で、滿潮干潮の波音を考へ又或
時は松風の耳に遮る音を聞き又或時は柳の枝が顔にあたるを拂ひ
退ける是等の所は武術修行のお話しでナカク、充分武術を學ばんけ
れば口演者に於ても相分かる譯のもんではありませぬ能く講釋師は
已れの勝手な事を言ふて居りますが武術の極意と云ふものは容易な
らぬものソコで岩石砕き燕返しと云ふ手は此久三郎が考へましたが
之は固きものを敲いて柔らかく受けると云ふ又燕と云ふ鳥は横に飛

藏 武 本 宮

ふ事は實に速く矢も及ばんと云ふ位此燕の風を横ぎる氣合と云ふものは實に人間杯が之を異似て出来るものではある尤も人間には羽がございませんがそれを岸柳が木刀にて岩を敲きそれを返して左へ受ける其早業と云ふものはナカ〜容易ならん事です己れは身体を後へ引いて前へ木刀をやると云ふ三拍子の氣合去れば後に武藏が仇討の時に此岸柳の燕返しのを爲に拂はれまして既に両足を切落される處を武藏は劍道ばかりではございません若し劍道ばかりならば爰で岸柳の爲に返還になりまするが俗に天狗飛さりと申します飛上がる術を覺へて居りましたが爲に岸柳に拂はれたる時、エイと云つて上へ飛ぶ此折岸柳の刀が武藏の草鞋の泥を拂たと云ふ位モウ一寸武藏の飛上りやうが低ければ岸柳の爲に足首を切拂はれるのでございました、是等は何方らも名人同士の立合末に詳しく申し上げますソコで久三郎は自然と岸の柳に由て術を考へましたから吾は岸の柳だと云ふの

藏 武 本 宮

で終ひには自ら岸柳と名乗りました元と野田大膳殿に就て充分武術を學んだ上に又自分が一の術を編出しましたから先づ只今天下に敵たう者は無いと云ふ位の敏腕にあり是より京へ上りました處が大層武術が盛んでございましたから久三郎の参つた事が忽ちに知れ渡りまして劍道修行人佐々木久三郎岸柳と云ふ者が來たどて都に在る處の諸侯方が何れも岸柳を召されて其業をば覽になると實に天晴の敏腕然るに岸柳は前にもやし上げました通り慢心がありますから御大身方へ向つても高慢な言葉があります故業は宜しいが彼の人物は甚だ宜しくないと云つて一旦お呼上げに相あつてもお召抱へにはならんで先づ相當な謝禮を致して所謂敬して遠けられますから主取りを仕損なつて残念で堪らないから人の事を悪く言つて世の中は皆千人目明き千人と云ふが初目明きは無い者だ此岸柳は自ら一の妙術を考へ昔しより今に至る迄武術に掛けては我が日本國に吾れに續く

者はあく又時來らば一國一城の主人にも成れる人物であるのに尋ば
かりたから仕方がない杯と今は宛然發狂人の如く誰に向つても始終
斯の如き高言を吐て居ります或時岸柳は播州姫路の城下へ参りま
て近江屋佐五右衛門と云ふ旅宿へ泊りました一日二日と過す内に其
旅宿の亭主と心安くあつた處から此佐五右衛門が言ふには 佐時よ
先生如何です當御城下へ道場をお出しなすつては御城主様からお咎
めにある氣遣もありません當時は城下町人共も皆劍術を大層好みま
そる失禮ながらお時へがございませんければ私が引受けませうと岸
柳の高慢な言葉にも構はず此佐五右衛門親切に大層世話を致して道
場を開きました初めの内は好い鹽梅に弟子も出来ましたが終ひには
師匠の言葉が餘り荒々しいから何ば弟子とは言ひながら宛然犬猫の
如くに扱はれては面白くない稽古はしたいがア云ふ先生に教はる
と腹が立つと云つて又弟子が減ちてしまふ折角開いた道場も弟子が

無くては仕方がなくッヒ〜彼方らへ彷徨ひ此方らへ彷徨ふてブラ
リと播州有馬の温泉へ参りました其當時は有馬温泉場には諸家の御
家來達が皆湯治に來ておいでなさつて間々には運動のため温泉場の
庭に於て劍道の立合杯があるうれを聞て岸柳が善し斯ういふ所には
大名の家老杯も來て居らうから此處で一つの自分の敏腕を見せて抱へ
られやうと云ふ量簡で佐野屋と云ふ家よ泊りました處が岸柳如きに
は誰も目を懸けおいと云ふのは宮本武藏の伊賀父吉岡無二齋殿は段
々老年にもなり身の補おいの爲は湯治場へ往て樂しまうと云ふので
有馬へ來てお在なさる尤も此折無二齋殿は當時中國十一州の大守
州廣島の城守毛利右馬頭輝元公に召抱へられ知行八百石を頂戴して
何不自由さき身でございまするが早や六十歳の上を越へ老体もある
に從ひ動もすると昔しの古疵か痛み或は打身杯の痛みが度々出でま
す夫故有馬の温泉へ養生の爲においでに参りましたが自分の家來

藏 武 本 宮

又は門人を伴に連れて往くと養生にあらんと云ふものは無二齋殿は
心懸の善い人ですから常に我子や自分の家來と雖も親主人の權を以
て働らかせる事がお嫌いで大抵は自分でなされる殊に温泉杯は遊び半
分よおいでなさる事故家來を連れて往て使ふのも氣の毒に思ひ且つ
湯治場では武張つた話しをするよりも何か面白き樂しきをして世の
中を樂に送りたいといふ思召しで毎度出入りを致します處の八百
屋の久助といふ者がお城下にありませす此者は至て篤實で悲も可なり
打ち風流の事も少しは辨へて面白い氣性ですから一層の事此者を連
れて往かうと思ひまして早速呼寄せ無二久助今度湯治に往くが伴
を致して呉れまいか。久有難うございませすお伴を致しませう直ぐ
に話しが極まりしたから久助の家には手當を致して此者を若党の如
くにしてお伴に連れて有馬へ來つて第一番の宿屋にお在なされると前
やし上げた通り諸國の武家方が大層入込で居ります故謹言ふとな

藏 武 本 宮

く吉岡先生が常旅宿にお在なると云ふ事が知れて我もく〜と尋ね
参り 甲何うか御養生中ではありませうが御寸暇の折は手前にも劍
道の一手お話しを願ひたい。乙私にも劍道のお話しを願ひたいと願
りに願われましたが。無イヤ〜此度は我等は唯だホンの心懸りの
爲に参つた夫故劍道の事は御免を蒙ると斷つては居りましたやうさ
もの、遂には人に誘はれ元々劍道者ですから之も身体の運動にあら
うと旅宿の庭に於て尋ね來る人々に劍道を教へたりして居りますか
ら岸柳杯に目を懸ける者はあゝ此事を聞て佐々木岸柳が或日右の宿
へ尋ね参り。岸當旅宿に吉岡無二齋と云ふ老人が泊つて居るか。〇
左様でございませす。岸手前は佐々木久三郎岸柳とす者老人へ御對
面を願ひたい。甲我等は岸柳門人青山紋平。乙押田佐吉とす岸柳
取立ての門人でござる無二齋老人に面會を致したい其言葉杯の様子
が誠に以て無禮でございませす宿屋の若い者直に無二齋先生に之を知

藏 武 本 宮

らせる。無へ、アそれは豫て聞及んで居る佐々木岸柳とか云ふ當時
赤にか國々を廻り道場を尋ね少しく劍道の下手の者と見ると之を酷
い目に遭す所謂道場荒し面白き者來つたり。久助に少し附けま
ると八百屋の久助それへ出て、久エー此方らへお通り下さいませ私
は吉岡無二齋の若黨久助と申します者。岸ア左様か許さつしや
い。是より坐敷へ通り無二齋は事郎擊に挨拶を致しましたが岸柳の方
では傲慢な口調を以て。岸エー御老人は當時入湯に來てお在なざる、
然るにあんでござるか日々運動の爲とか或は又慰みの爲とか云ふて
人々へ劍道を教へてお在なざると云ふが之は全く慰みに教へるので
ござるか又は金銀を取て劍術を商はれるのでござるか私は日本國內
を廻り劍道者の道場を尋ねると言へど金銀を以て劍道を教へ杯する
事は更に嫌ひ、所謂天無縁の民を生せずと云ふ事がござる、依て今日劍
口の爲に劍術を商ふのでは無い日本に名を得んとする、而して無二齋

藏 武 本 宮

殿も御承知でござらうが吾れ岸柳と名を附けしは茲に奇々妙々一種
變りし妙手を編出した爲でござる。成べくは御老人お立合を願いたい
其言葉の様子何となく氣違然て居るから無二齋は岸柳の言葉を少し
も氣に懸けませぬ。無イヤ之は、マダ、お手前は若いし豫て
聞及ぶに岸柳殿は劍道の達人、モウ無二齋杯は老体にあつて身体も
自由にならず夫が爲に斯の通り温泉場へ來て氣を養ふて居る位な事、
ナカ、貴殿と劍道のお立合杯は出來ない。岸イヤお黙りなさい。横
令人から好まれたにもせよ慰みにもせよ此庭に於て劍道を教へさ
る以上は拙者に限つてお立合が出來ないと云ふ道理はあるまい。是非
お立合を願ひたい。爾う斯うする内に近くの宿屋に居ります多くの
武家方が之を聞て追々此宿屋へ集まり参りまして。甲ソレ評判に
聞た佐々木岸柳と云ふ奴が無二齋先生の所へ來て立合を所望を致し
て居るとやら面白し。乙ナニ佐々木岸柳彼奴もナカ、評判の

藏武本宮

達人と云ふ事併し吉岡先生に及ぶものか杯と口々に騒ぎ立ちて忽ち此宿屋の庭へ集まつた人々は百人餘り再三數度無二齋は辞退をしたが聞入れませんでした。無宜しい併し岸柳殿眞と立合をしたいと云ふからば一度我等は廣島へ立歸り其上にて上願ひ濟の上にての試合は仕つるが此場にて租忽にも旅宿に在て私の試合をするは宜しくあり。岸アイヤ、爾う仰せらるゝは無二齋殿折角岸柳が尋ね参りしに一時此處を逃げられるお心でござらう。無イヤ之は無禮なお言葉、逃るやうな未熟ある吉岡無二齋ではあり一言二言云ふ内に互に言葉も荒くまつて憎くき岸柳の振舞と心得たれば無然らばお相手やうと雖も宿屋の廣庭へ出ましたから見物一同は片唾を呑で控へて居る此折佐々木岸柳は長き木刀太さも人の常に持ちまするよりか三倍も太き木刀を執上げましてサア来い来れと云ふ身の拂へ無二齋殿は短かき木刀之は伊秘藏の木刀で温泉に參るにも袋に入れて持来り今

藏武本宮

迄は之を取出しませんが岸柳の一言憎しと之を取出しました大勢の者は伊老体如何であらうかと拜見をして居ると斯は如何にヤツと云つて立上つた時今迄は少しく腰は梓の弓の如くに曲つて居たが木刀を執て立上がる時は眞直に腰が伸びました併しながら無二齋殿は老人の事故自髪は宛然雪の積りし如く殊に小兵でございます之に引換へて岸柳は大兵に致して壯年血氣双方睨み合つた時には夥多の人々は「ア御老人お可愛さうである此方らは体も大きいし血氣壯ん御老人では逆も六ヶしからうと一同は手に汗を握つて心配をして居る内に「エイヤツと打込だる佐々木岸柳の木刀を無二齋は左の方へヒラリと避けましたから虚空を打た久三郎南無三殘念なりと右へ拂へば又ヒラリ老人とはやしなから吉岡無二齋此時は全然少年の身の如く其身軽く致してヒラリと飛廻り岸柳が打込で来る木刀を受けずに唯だ体のみを交して居る如何に岩石碎の術を試み又は燕返し早業と

藏武本宮

仕ふ岸柳も無二齋の早業には實に驚いて之ではならんと外へ拂つた、
アワヤ無二齋は小手の邊りを打たれたらうと思ひきやエイと云ふ氣
合で手許へ付け入り、急遽岸柳が肩の邊りを發矢と打つ、何かは堪らん
佐々木岸柳ヒヨロと後へ下がるを附入つて利腕を打と打ちまし
たから流石の岸柳木刀ガラリと取落すを無二齋は突然木劍を岸柳の
頭上へ當て、グツと押す老老爺と思つて居りました處が其力は實に
強くサシモの岸柳も其處へ尻餅をついて仕舞ひました、無二齋は小聲
にて無お若い、岸柳殿失禮ながら世間にて傍身の爲に打たれる
者あるか知らんが夫れはマダ劍道も辨へぬ者、老人吉岡無二齋は力は
ない、先刻傍身の言はれた通りモウ毒確した、人間の肩れじやがマダ、
傍身如きお年若の者に打込まれる無二齋ではござらんぞ、茲には上
から上のあるものは是からは決して天狗心にあられるな、高言をさされ
るお恐れ入りましたか、ど彼を懲らしても見たり又柔かに彼へ教訓を

藏武本宮

加へる無二齋此折見物一同はザマを見るワツワツと云ふ、岸柳面目次
第もない、側に居たる青山押田の二人も呆れ返つて仕舞ひました、岸柳
はソコにして此場を逃げやうとするから無二齋は「アイヤ佐々
木殿折角お尋ね下されたのに此儘お歸しやすは不本意、何はさくとも
粗酒一……コレ久助々々支度をせよ……折見物の方々よ佐々木岸
柳殿は確かな腕前、先づ劍道の傍名人じや、老人吉岡無二齋をお黙り
さされて取意とお負けなされた、無二齋の勝は眞の勝ではござらんと
云ふのは後難を慮れるが爲でございます、見物は此言葉を聞いて「ア
一流石は吉岡無二齋はエライ、向ふに花を持たした感心さものだ、ど一
人減り二人減り皆此處を去て仕舞ひました、其折岸柳は「誠に以て吉
岡殿面目次第もござらん、吾れ傍身の如き傍達人に出會ふた事なく是
迄高言を放つて居りましたが實に傍身へ對しても無禮な言葉お詫の
仕やうもござらん、何うぞお許し下され、此後何處へ参らうとも決して

高慢をよさん恐れ入た身の腕前とナカ〜奸智に長けた男ですか
ら吉岡に詫びます無二齋も氣の毒に心得て 無イヤ〜其やうに
詫られる事はないお手前はナカ〜未熟でよいお若いにしては感心
だ。と尙も花を持たして話す内に酒の支度も調つたこの事はより一献
酌まうと云ふ時に岸柳は「お志しは誠々辱けなうござるが是より四
五里先さよ少々詰問る者もござるから折角の御馳走ですが今日は之
にて御免を蒙ります挨拶ソコ〜二人の弟子を連れて此處を立出で
ました後に吉岡無二齋は莞爾笑つて。無久助扱々彼の岸柳と云ふ
奴は無禮な奴であるのう。久旦那様好い氣味でございましたかア私
はアアあれで胸が空きました彼の野郎日本國中を廻つて負けた事は
一遍もない扱と大層高慢な事を言て居りましたが先生の爲に打たれ
ました。無併し之はあんだぞ決して何處へ参つても主人無二齋が佐
々木岸柳を温泉場にて負した扱と話を致すな。久ヤしは致しま

せん話しを致して居る處へ我が宅より致して早く立戻るやうどの書
面何事の出来せしかど吉岡無二齋訝かりながら遂に有馬の温泉場を
發足て我が家へ立歸り是より吉岡無二齋が岸柳の爲に横死を遂げる
と云ふお話し次回に申し上げます

第八回

扱吉岡無二齋は有馬の温泉にて佐々木岸柳を懲らし夫より致して彼
の八百屋久助と二人にて物語りの處へ國許より悴清三郎用事ありと
て使の人が参りましたから吾れ斯の如く湯治場に在て身を養はん
と云ふ處へ用事ありとのみの書面にては更に分らず何か病氣の事にて
もありつるかど心配を致して支度匆匆に立歸りますと案の通り悴清
三郎病の床に臥して居ります故大に心配を致して醫者よ薬と夫々手
當を致しましたる處一日〜と快方に趣きました無二齋も大に安心
を致して居りますと太守輝元公無二齋をお側へ召されまして。 輝如

宮本武藏

何に其方は旅中にあつて彼の佐々木岸柳を懲らしめた由を近臣龜崎東馬より承つたが之は眞の事であるか。無事意にございませぬ私に事を好みませぬが先方より致して無禮なる一言に己を得ず立合ひました彼もナカク、劍道の達人にしてマダ年も若し惜しき者でございませぬに依つて充分教訓を加へました太守お聞き遊ばして、揮ふれば如何にも老人の忍耐感心を致した彼の岸柳は増田右衛門尉を始めとして其他の大名達も家來に抱へんとし此毛利へも勸めたる者もあるが彼れ劍道は充分の腕前のやうに見受けられど何となく慢心面に表はれ居る故何れへ参つても其心を憎んで抱へる者無しと聞く併し諸大名にて抱へんとする位な腕前の岸柳を伊身名人とは言ひあがら老体として彼を打懲らしたるは予の家に對しては實に名譽の事である依つて尙ほ加増を申し付けるにあつて有難くも百石の加増に相寄りました毛利公は先づ當時日本に於ては伊家來無二齋程の者はあるまいと

宮本武藏

お喜びなされて居る然るに無二齋の門人に多田權左衛門と云ふ人があります此人は至て無二齋先生のお氣に入でございませぬが此度師匠の伴清三郎殿伊病氣伊快氣に就て病中の憂ひを慰めんと考へ猿樂の能を催す事に相なり依つて其前日無二齋の所へ來つて、權明日は何うぞ伊光來を願ひたい又伊子息清三郎殿伊病氣も伊快氣に相寄り誠に以て結構伊伊事でござる就ては何うか清三郎殿も御籠にて伊入來賜はらば辱けさうござる之は師匠へ對しての禮でございませぬから權左衛門親しく申し入れますと無二齋は大きに喜び、無左様か然らば明日何時頃より出張致して宜からうか、構はれば伊家中の面々何れも伊當番伊役目もござらうに依つて夕四時を一番の舞と致して夜八時迄に舞納めます事故に何うも其刻限に伊出張を願ひますと云ふて權左衛門は歸りました扱明る日に相なり伴清三郎に向つて無事どうじや其方も今日は御籠にて参つては何うか權左衛門も心配致す

蔵 武 本 宮

事故お前も参らんか。清お父上有難うございます折角の親切を無に致すやうでござるがマダ私は息切れが致しまして駕籠に乗て参れば足は疲らさずとも宜しいが何となく今日は爾う云ふ所へ参る心持がございませぬ何うぞお父上私の事は心配下されませぬな此様子ではモウ三四日経てば病氣も全快致しますする何うぞお父上は誰か連れておいで遊ばせませ私はお留守居をして居ります。無さうか、それ宜からう却て病氣の時に無理に連れて往て人又氣をかね坏する時は病に障るから夫れも宜からう併し折角權左衛門が心配致し呉れる事故乃公が往て程宜うござうれでは悴往て来るぞとお出遊ばされたのは四時少々過ぎ扱多田權左衛門の屋敷へ來つて見ると何れも家中の面々詰掛けて居りますし先生がお入來吉岡殿無二齋殿と皆一同に尊敬致します無二齋も一同に挨拶を爲し又權左衛門に向つて。無多田氏今日は悴清三郎も相きに預つたが彼れ大分心地能くアノ分に

蔵 武 本 宮

ては兩三日内に床上げも出来やうが親子諸共貴宅へ参つて種々世話にあるも却てお氣の毒殊に病中ではあるし彼は折角の事ではあるが今日は見合せました悴より厚く禮を……權コレハ、何うも先生恐れ入りましたそれヒヤア強てお招きやすよりも却てそれが氣樂……無左様手前が立戻つて今日拜見を致したる猿樂の様を充分悴に話したら夫れも亦一興にありませう爾う斯う致して居る内刻限になつて權左衛門の宅へ舞臺を構へまして猿樂が始まり心地能げに無二齋殿は之を眺めてお居である門人達も今日の舞を喜んで見て居る内に早や夜も八時となつて猿樂も相済み後は皆門人達が集つて居る事故無二齋殿も何時になく氣機能く武術の話し杯をさされ常には深く酒はお飲みませぬが權左衛門の發應にツヒ、は銘配あされ其内に若侍士達は己が隨意立歸つて仕舞ひました後に殘つた吉岡先生「扱權左衛門殿今日は終日能を見物致し其上鄭重の

櫻應に預かり事の外酌に及びました。最早は暇やうと禮を述べて立歸らうとしますから權左衛門は止めまして、權先生最早深更にも相ありましたから今夜は見苦しくとも拙者宅に一泊ありて明朝伊歸宅あされては如何でございませう。無イヤ、それは誠に厚けあいが悴も定めて手前が立歸り猿樂の話をしてやるのを樂しみに待つて居るであらう、病人と云ふものは白晝に寝て夜分になると寝られんのが病人の常是からブラリと戻りませう。權左様でござりまするか、それはどうも併しお送りやませう。無イヤ、お送り下さるあ、却て一人ブラリと……それに今晚は月夜ではあるし月を眺め歸るも一興と爰が所謂年寄の冷水、遂に權左衛門に別れを告げて言問無二齋は此處を立出でました。此折權左衛門心中大に心配を致してお送りやうとは思つたが併し自分の宅へ人を夥多集めて猿樂を催し其後仕舞等も種々ございませう故ッヒ、夫が爲に送りも致しませ

ん、無二齋は是より致して權左衛門の家を立出て、から道の三四町も参りますると何となく酒の酔が段々醒めて参りました。尤も「酔心月に取られて戻りけり」と云ふ發句がございませう、お酒に酔ふて歩きながら月を見る時は自然と酔も醒めるものでございませう、無二齋殿お宅は權左衛門の家から二十八九町ございませう、通り掛りましたのは、城下の杉林、向ふは小山がございませう、此方には細き流れがある、夜の更けるに従つて杉林の邊りは何となく物凄くドゥ、と川の流れの音は激しく聞へます、無二齋は高聲に謠ひを謠ふて杉林を少しく此方へ立出でまする時に後ろの方に何やら人ありと心得ましたるが爲にヒョイツと振り返ります途端に突出したる一筋の鎗、無エ、何致すと云ふ内に向ふの小山の蔭より又一人飛出して切込で來たを月の光りに明々見れば是れは是れは久三郎岸柳ならずや、卑怯未練なる振舞、此無二齋が酌酌して戻るを待つて暗打にせんとは卑劣千

藏 武 本 宮

萬あ奴 岸 黙れ、汝の爲に佐々木久三郎は何れにか仕官になるべき身を有馬温泉場にて不覺を取り夫が爲に誰言ふもなく日本中の評判となり今では主取りも叶はんは汝のお蔭、サア老老木刀を持って立合ふ時は兎に角、眞剣立合あら不覺は取らぬと云ふ内に後ろより足音もせず伺ひ寄つた一人、是ぞ岸柳の門人誰でありまするかは面を包んで居りますから分りませんが卑劣千萬にも二間餘の鎧を以て吉岡無二齋を聲をも掛けつ突通しました無二齋は鎧もて横腹を通されアツと叫んで踏跟く處を岸柳の爲に眉間の邊りを切られました此位の名人が誠に不覺のやうでありまするが其時は大醉をして居りましたが爲に身体自由になりません併し手傷を負ひながらも暫時は体を交して受けましたけれども何を云ふにも鎧にて横腹を突かれましたる故其苦しさ言はん方なく後へにドゥと倒れました處を佐々木岸柳は吉岡無二齋を滅多切り、岸、サアモウ是で宜い門人共は鎧を其儘棄置して早う此

藏 武 本 宮

場を去て仕舞へ手前も是より……併し兎も角も止めを差さう、どのし掛らんと致しました時に向ふの方よりトットトツと足音かする、南無三見谷められてはあらんと其儘に岸柳も門人も何處ともかく逃げて仕舞ひました處へ参つた一人の男、是なん彼の八百屋の久助、是は今晩吉岡様のお宅へ少々先生にお願ひがあるとして來つて見れば若旦那のお話しに今日父上は多田權左衛門殿宅にて猿樂があるに依つてそれを見物にお出でなされ未だお戻りがおいと云ふ事を聞き久助は若旦那清三郎殿追々快氣の喜びを述べ我が宅へ歸らうと思つたが吉岡先生はお歸りが餘り遅いからヒョツとして……何時もや有馬温泉で大層は酒を深く召されて前後も知らずお寝みなすつた事があるから今日も今日とて多田權左衛門様のお宅で湯酌をなさされたやうな事ではないかと胸に浮んだのは常日頃此吉岡先生を主人の如くに思つて居る久助でございませすから爾うだくと胸に問ひ腹に答へて唯だ一人

多田權左衛門の屋敷へ参らうと丁度来た杉林向ふの方へ二人ばかり驅出して往く奴がある、ハテ怪しいと思ひながら段々其處へ来て見ると一人倒れて居る者がありますから近寄て見れば斯は如何に大恩を受けた吉岡無二齋先生、驚ろく八百屋の久助が 久「ヤッ先生……」
……二聲程呼だ時にマダ息は絶へぬと見へて無二齋が両眼を開き久助の顔を見て。無敵は佐々木岸柳……其お聲も誠に調子の低い言ひ方。久「ナニ佐々木岸柳が敵でござりまするか先生お氣を確かにお持ち遊ばせ……」と云ふ内に早や此一言が此世の別れ遂に息は絶へました。久「ヤッそれヒヤア佐々木岸柳が有馬温泉場の立合の一條から旦那様を今日此處で……」それでは今二人向ふへ驅けて参りしは全く岸柳さらん、後追驅けてと言つた處が向ふは劍術の先生八百屋の久助ヒヤア任方があゝそれより早くお屋敷へ歸つて若旦那様に申し上げやうか、イヤ、若旦那様は病中、それより多田權左衛門様に申し

上げやうかド、何うしたものだなア……イヤ一層の事己れが岸柳を追驅けやうか、心は二つ身は一つコリヤ何したら宜らうなア……チヨンド木が這入つて舞臺が廻りますると芝居のやうですがナカ、それ處ではない久助はお屋敷へ立歸つて若旦那様に知らせやうと思つたが病中の事故に顛倒なされて若し病氣が重くなつては相ならんと早速の利たる八百屋の久助直ぐに多田權左衛門の屋敷へ驅着けまして此様子を知らせると權左衛門は直ぐに一刀を手挟み驅着け来る杉林、モウ先生の身体は冷たくあつて居る。權ソレ久助、お目附へ届け参れ、お目附へ申し上げると早速役人達出張を致しました然るに清三郎はマダ之を知りませんから多田權左衛門、お目附續いて大目附、久助も共に清三郎の枕邊へ來つて云々斯々と申し入れる……茲に諸君へ鳥渡すし上げて置きますが吉岡無二齋のお連合は今を去る事六年前に病死なされまして清三郎もマダ無妻で一人病の床に臥して

蔵武本宮

父の歸りを待つて居りました清三郎之を聞くより直ぐ起上つて枕刀を執り、清三郎父上を佐々木岸柳が……立上つて二足三足驅出でやうとしましたたが病中の事故後へにドウと倒れましたたお目附大目附が「イヤお騒ぎあるな清三郎殿と取鏡め置き何は兎も角直ぐに浮城下の出口々々へ手配をしやうと其夜の内に手配りを致しましたた無二齋先生の死骸を擔ぎ込もうと思ひましたたが權左衛門の計らひにて病中の清三郎殿へ父上の死骸を籠に入れては却て宜しくあるまいと直ぐに浮城下の浮菩提所へ其場から擔ぎ込みまして立派に葬式を致しました此時清三郎は定めし氣が落ちて仕舞つて尙は病が重るかと思つて人々心配を致しましたが其處は侍士の嗜み之では往かんと氣を取直して一日くど快くありました尤も病は氣から生ずるもので君父の仇俱に天を繼かぬと云ふ考へがありますから氣を屬まして病氣も割合に早く治りましたた彼是れ致して日數も二た七日三七日と過

蔵武本宮

ぎましたたが兎に角此一條に就ては弟は當時肥後國熊本之城主加藤肥後守殿藩中宮本武左衛門の養子となつては居るものゝへも知らせなければあらんと書面を以て知らせました然るに清三郎は何分マダ病後の事故今仇討發足と云ふ譯にも参りませんで至極残念に思つて居ります又毛利輝元公も悉くお歎き遊ばして直ぐに全國の大名其他の領分等へもお頼みに相なつて佐々木岸柳の行方をお尋ねになりましたたがナカノ奸智に長けたる奴何處を何う潜つて逃げて居りまするか更に相知らせせん今日と經ち明日と經ちまして早や四月五月になりました内に清三郎の弟七之助當時宮本武左衛門の養子宮本武殿政名が之へ乗込み來りまして兄清三郎へ對面を致し親しく兄と相談を爲し武兄上は浮病後の浮疲勞もあり敵を尋ねんと諸國をお廻りに相なる其内に又病に罹り身体を悪ふなされては宜しくまい敵は此武殿が討ちまする。清併しお前は宮本武左衛門方へ養子となつて見

藏 武 本 宮

ればモウ宮本の相續人。武イエ、養父の武左衛門よりも許されま
した。養父の仇討をするに何の他より苦情を申し入れる者があるもの
かと許されて参りましたから兄上、心配あるな、殊に此武藏は是より
マダ國々を廻り、劍道の修行を爲し、父上が編出された二刀の流名を尙
は私が充分に日本に廣め、我が名を揚げんと心得る。敵討は敵討、修行は
修行、兎に角、此處を發足仕りたいと爰で兄と約束を致しまして、宮本は
毛利公の修重、役其他親無二齋の門人共と親しく此一條を談り合まし
て遂に、武州を發足爲し、是より大阪に至つて足を止め、此處で宮本が賭
試合を致した杯と云ふ事を、今迄能く講談に述べまするがナカ、金
錢を以て賭試合をする杯と云ふソンの卑劣な宮本ではございません、
是より武藏は都へ上りまして、京の地、足を止める事、半月餘り、彼方ら
此方ら京見物と云ふは、表向き、内心は岸柳の行方を探して居りました、
夫より都を去て、近江路や關の清水の名も清き軒を并べし、大津の宿と

藏 武 本 宮

れをば過ぎて、栗津、暇勢田の唐橋、打越へて草津の宿に差掛り、是より兎
又角中仙道を下り、上りは東海道を通らんと、中仙道と東海道の草津の
道分を左へ外れて、守山の宿、木曾街道を打過ぎまして、信濃路から出羽
奥州の果迄も、武術修行、又二つには親の敵の岸柳を尋ねんと廻る事、二
三年、それを過ぎて、武藏國へ入り、此度は東海道を上つて、上方路へ越く
途中は東海道有名の箱根山圖らずも、夥多の狼に出遇ひ、之を宮本が退
治ると云ふは、講談の眼目、宮本武藏の狼退治、一匹二匹の狼にあらす數
匹の猛獸を退治するには、鳥渡宮本も、休息致さなければなりません
から、口演者も、休息して、然る後に、狼退治に移りませう

第九回

扱宮本武藏の狼退治と申すは、名高き事であり、まする故に、此一回に詳
しく辨じ、申す能く、昔しから「箱根八里は馬でも越すが、越すに越され
ぬ、大井川と申すは、昔し諸大名の参勤交代に、長持を擔ぐ人足が

蔵 武 本 宮

力を採出す鬮子歌で東海道の一の籠所は大井川でございするが箱根山もナカ〜籠所で川止めはあつても山止めはないかと思ふと爾うでない、大昔しは箱根の山止めと云ふ事がありました何となれば之は親知らず子知らずと云ふ場所がございます、其邊りへ参りますると大風の吹く時杯は實に激しいもので容易に此處を通れません、夫が爲に三島の宿へ泊り或は小田原へ泊つて翌日の天氣模様を能く見定めて出立致します、若し山中にて風に巻かれますれば人間が忽ち命を落とすと云ふ位な危険な場所、これに又狼の出ます時がありまするさうです、サウ年中出るものではないが送り狼と云ふのがありまするさうです、之は人間が通り掛りますると後へ尾て参ります、併しナカ〜容易に人間へ噛付くものではないさうです、頼りと足下を廻りまする故に大抵之にて煉んで仕舞つて往來へ屈むとか或は倒れるとか致しますると直に噛付くものでナカ〜立つて居る者へは滅多に噛付きま

蔵 武 本 宮

せんさうですが遂には狼の方が昔つて来て後ろから前の方へ頭の上を飛びます、大昔しの話ですが一人の六十六部がありました、箆を背負ひ六部の事ですから笠を冠つて通りますると狼が送つて参りまして、其内に一匹の狼が笠の上をヒョイッ〜と二度ばかり飛越へた時にモウ是迄と覺悟を致しました六部は用意の懐劍の鋒を自分の冠つて居る笠の上へ三寸ばかり出して持つて居るとは知らずして狼が後ろから笠の上を飛びまして遂に咽から腹を裂いて死だど云ふ事が或る書にも出て居ります、茲に武藏先生は通り掛つた東海道、小田原の宿も早や過ぎて箱根山の麓迄参りますると一軒の立掛茶屋がございますから其れへ這入つて食事を爲して、無爺さんや、是からソロ〜越さうと思ふが何うだらう、爺、ハイ左様でござりまするか、今日はからお越しに参りますると日が暮れて仕舞ひます、ソヤア山へ今晚お泊りに参りまするか、武山と申すは………爺、左様でござります箱根の

官本武藏

宿でございます。武ア左様か、今日一日には越せんか。並ハイモロ今頃からお出でになりましてはナカ〜越す處ではございません、ナシなら斯様な不潔い立場ですがお泊り遊ばしては……武イヤ〜少し思ふ事あるに依て夜道も厭はず越すのじや。並ソレはお氣を付け遊ばせ夜道も厭はずと仰しやいますすが晝間でも昼つた日杯は眼が
出て参りますから夜分になりますると尙更の事此節はモウそれが爲に大抵晝十二時から二時を分迄の間より外は山を越さぬ位でござい
ます。爺さんが親切に申して呉れますが併し之も修行の一つありと思ひ厚く禮を述べまして茶屋を立出で夫より段々と箱根へ登つて往
く此處に三枚橋と云ふがありまそ之は名高いものでありまして其橋を過ぎますると向ふは湯本の村、只今温泉杯がありまする所は右方に當つて居ります、之を段々登つて参りますと向ふに小深があります、尤も只今でも湯本の脇に信夫ヶ淵と申す深が三つ程に分れて落ち

官本武藏

居ります、里人呼で一名初花の瀧と云ふ、寛勝五郎の妻初花が此瀧に掛つて良人の病氣を祈つたとか言つて今だに初花の瀧と申します、併し宮本の通つた時分は其名はありますまい段々と参ります内にモウ、ッロ〜日が暮れ掛つて来たが十八日の事でございまして依て月も出ますから道に迷ふ氣遣ひもあるまいとブラリ〜と参りますと後から ○オイヤ且那少しお待ちあすつて……且那へ……呼ぶ者が
ある、武藏は振返つて、武アイヤ何じやな ○且那何うです歸り駕籠で
すが乗て下さいませんか 武アトム何方らへ歸るんだ ○三島の方へ歸るんです、乗てお呉さい、無イヤマダ駕籠に乗る程疲れて居らん
○爾う言はずに何うかお乗あすつてお呉さい、駕籠昇あんざアモウ何でも且那方を見りやア乗て頂だかなくちやア營業にあらぬ、庶く参りやすから三島迄……武併し三島へ歸ると云ふがナカ〜今晚三島迄は往けまい、箱根へ泊らうと心得る ○ナアニ且那今夜月夜です、

三島へお出でになるから今夜中に三島迄小荷が仕事をしますから何
うかお乗り下さいと云ふ駕籠昇の様子を見ると、デッブリと太つた腕
節、何となく一癖あり氣さ男、不潔い襦袢を一枚着て三尺帯の代りに繩
を締めて頻りと騒めて居る、武藏先生の量簡では、ムー此奴事に依ると山
賊ではさいか、旅人を見ると無理に駕籠を勤めて届へ運込み路銀杯を
取る事は数々あるけれども此方らは宮本先生少しも驚かず、武、ハ
爾うか、それじゃア乗らうか。○「へー何うかお乗り下さいアせ、モウお
幾らでも宜しうございあす、俺は空駕籠を握いで往た日には却て早く
道が歩けません仕事をして居りやア歩けるんですから何うか一つお
乗り下さいあせ、武、ア乗らう、併し棒組は何うしたんだ。○「へ
一棒組は向ふに居りますから今持つて参りやす。武、ナニ向ふに居る
から持つて来る……○「へー……武、面白い奴じやなア、武藏も不審
を打ちまして此方の石に腰打掛け、此駕籠屋は妙さ男だ、棒組が向ふに

居るから連れて来ると云ふのが當り前だのに持つて来るとは怪しい
と思つて見て居ると、○「旦那少しお待ちなさいと山駕籠を其處に下
して突然向ふの方へ参つて石を一個抱きまして軽々と其處へ持つて
来ました、爲る事が不審ですから政名先生「何だそれは、○「へー之が
私の棒組です、武、ハ、お前の棒組とは……○「此奴が片棒握いで
歸りやすから、私が片棒握いで旦那を乗せて往きやす、武、何の爲だ。
○「へー、私はモウ何時も一人です、棒組があると氣が合ひませんで往き
ませんから年中此石を片ッ方へ付けて而して私が擔ぐんです」武、ハ
、ア之は恐れ入つた、餘程お前は力があると思へる」○「へー、別に深山
もありませんが……サア旦那構はずにお乗なさい、威程其筈だ當り前
から駕籠が真中にあつて棒の先きが左右に出て前と後ろで擔ぐので
すが之は駕籠が棒の端に付いて居つて此方らの棒の端へ繩を以て石
を括り付けて真中へ運入つて擔ぐ物、物を荷ふと同じ事でございますか

ら武藏も面白く思ひ。武ヤア之は面白い奴じや、乃公をナニか乗せて
擔げるか。○「エー戲言やちやア往けやせんお相撲さんが来やふと何
んな重い人が来やうと棒組が石で口を利きませんから愚痴も言はず、
それに量體は堅いし……武、それは石は堅いに極つたものだ。○「一
番氣が合つて宜うがす、サア且那お乗ささい面白い奴であるど武藏も
喜んで駕籠へ乗りました併し此山駕籠へ乗つけませんお方は少し振
られますると駕籠の棒で頭をコツン〜と打ちます、グツと反て脊
中を後ろへ押付け前の方へ足をやりますれば宜しうございますすが乗
つけぬ人は真直に乗るから往けさせん武藏は國々を廻りましたが爲
に山駕籠は固より種々旅の駕籠にも乗て居りまする故乗方は旨い。
○「ヤッ且那感心々々、旨うがす武藏先生大小を膝の所へ載せて、武
ッラ宜いか。○「へい宜しうがす突然ウンと擔ぎ掛けられた時に武藏殿も
面白い奴じやと思つてお調弄ひなさいまして。武、オイ駕籠鼻、其石は

何の位重味があるか。○「爾うですぬい、マア且那の体量が二十貫は無
い、十五六貫位でせうか、尤も宮本武藏は小兵あ人でありましたさうで
す。○「大抵、マア十五六貫位さものでせう、石も大抵其位……武、サア
乃公を乗して擔げるか。○「戲言を言つちやア往けやせん、宜うがすか」
と云ふて息杖もなく真中へ這入つてグツと一ツ肩を入れた。○「且那、
ナカ〜重うがすなア」武、何うだ……此折宮本が右の手を出しまし
て松の根へ捉まつて居る、ウンと擔がうとして。○「ヤア且那餘程重い
……是じやア重い譯です、それをグツと腰を切ると武藏の持つて居た
松の木根がボカリと取れた、之に武藏は驚いて。武、ヤ、ナカ〜剛い
奴だ。○「且那戲言やつちやア往けやせん、お前さんが両方の手を出し
て捉まつたつてソナ事に驚ろさやアしない、サア宜うがすかい、スタ
〜擔ぎ出す、成程二人で擔ぐより一人で中へ這入つて擔ぐ方が乗心
も宜うございませう、前に石を付け後には宮本が乗て居る、其駕籠を

蔵 武 本 宮

モ輕さうに鼻歌杯を歌ふてツン／＼／＼山へ上つて往く。○旦那是から少し場所が悪うがすよ、怖がつちやア往かせんよ。武ナニ怖い事はない。○宜うがすかい。武、オーモウ月の顔も出た夜道を往くのも楽しみだ。只今の箱根山とは違ひまして其時分の事ですから道と云つた處が碌な道はありませんで或る時は旅人が生茂つて居る様を拂ひ道を開いて往く位でございます、武蔵は駕籠の中て腕拱いて希代な奴だ、モウ餘程の道を擔ぐのに先刻から更に肩を換へぬ不思議な奴だと考へて居ります、大抵モウ一町或は二町と往けば何ぞ駕籠昇でも肩を換へるが此奴右の肩へ擔いだ儘モウ一里餘も来てマダ換へない。武、時に駕籠屋……○ハイ、武、實に感心じや、お前肩を換へさいではないか。○へー面倒ですから、併しモウ此處いらでソロ／＼換へませう、是より上つて参りますと、ドゥツツと大樹にあたる風の音は物凄く夫より段々と嶺上の方へ掛つて参りまして下の方を見るとゴウ

蔵 武 本 宮

ツと谷の流れの音が聞へる、深山にて谷の音を聞くは随分物凄いものでございませ、其谷際を歩きながら。○ドリや肩を換へやうかと云つて突然ドツと右の肩から左の肩へ廻す、之は廻し肩と云ふのでございませ、此時宮本がヒョイツと此方を見ると肩を廻しましたから全然武蔵先生の乗て居る駕籠は崖を離れて谷の上の所になりました。武、コレ／＼駕籠屋危険いぞ危険いぞ……○大丈夫だ、旦那落ちた處が五丈か六丈下の路へ落ちるまでの事だ。武、爾う飯呑き肩の換方をするな。○ナアに落ちちりやア落ちちりたまでの事だ、旦那怖うがすか。武、之は怪しな奴だ、又二三町往くと云ふと肩をグツと廻す、詞弄ふのですか、時々録の所へ宮本の駕籠を廻す、それですが武蔵の乗て居る駕籠が前へ来る時は駕籠屋の方と向いて乗て居なければならん、又後へ廻る時は駕籠屋の背中を見る、グル／＼面白づくに左と右へ廻すから。武、コレ／＼好い加減に致せ飯呑じや。○旦那少し怖く

藏 武 本 官

なつたかね、宜うがすろれじやア今度肩の換やうを變へやせう。……早
や夜も八時々分に相なりまする段々上つて來て今度は廻し肩でな
く突然、雨の手を棒に掛けるが否やエーッと指上げた、ア一危険いと思
ふ内に左の肩へヒヨイッと載せませす、又十間程住くと、エーッと云つて
両の手で駕籠をグツと指上げる、實は之は世に言ふ大力を過ぎて怪力
どでも云ふのでせう、駕籠屋は巫山戯ながらエーッ……始終肩を換
へるから武藏は駕籠の中でヒヨイッ……踊つて居る。武藏、駕籠屋、マア少
し待つて呉れ。○旦那、大分貴殿もお疲れさすつたやうです、ね、駕籠へ
乗て居ても疲れの出るもので……ぢやア此處らで一つ立場をしませ
うか。武、ムー其處へ下して呉れ、大きな杉の木、根がたの所へ駕籠を
下しまして。○サー旦那、一服やりやせう。武、此處は何と云ふ所か
○向ふに見へるのが、アレが湖水、此近所を誰が名を付けたか知らない
が、賽河原と云しやす極樂でございます。武、ムー之が箱根山で名高き

藏 武 本 官

賽河原か。○爾うです、極樂もあるかと思やア地獄もある、チ旦那、今
日は俺も心持能く仕事を致しやす、其言葉の様子と云ひ爲る事に宮本
が、大きに氣に入りました。武、面白い、ア、駕籠屋、威心したよ、お前の今
日の力には。○お待ちなさい、今煙草の火を拵らへますから、纏て煙草
の火を拵らへ。○旦那、ソナ、寒かア、ねい、が一あたり當りやせうか
ね、木の葉を集めて參つて焚火を致して當りながら。○旦那、貴殿はナ
ンです、ねい、お身は小さいが、体はスツカリ鍛ひてあると見へて、ナカナ
カ、目方もございませすな。武、ムー乃公は、身体が鍛ひてあるから、目方
もあらう。○旦那、何うです、エ、少しお寝みなさいな、ナニ、逆も今夜山を
越して仕舞ふ譯にやア、往きませんから。武、駕籠ン中で搦がれながら
寝ると云ふものは、好い心持だが、本統には眠られぬものじやのう。○
チッ、旦那、お寝みなさい、私も此處で澤山寝なくても、一時計り眠りや
ア宜んです、爾うして往くと三島へ丁度夜明方に往きやすから、旦那、マ

ア少しお寝みささいませ」武「サウか、それヒヤア乃公も大分疲れて来たから」と云つて駕籠に寄掛かり腕組をして眠る、けれど油断はない、眠る杯と云つて附銀に手を掛ける曲者も眠り離いと少しも武蔵は油断はない、駕籠屋は頻りに焚火をして居りました、火も段々消へて仕舞ふと之も向ふの石に腰打掛けて胸組をしながら眠り始める、早や夜も十二時を過ぎて二時にも近い刻限「チーッ……」と云ふ聲がする、武蔵はトロ／＼と眠みましたが、異様な聲に目を覺し扱は狼の出で来たかど心得て居ると、駕籠屋が「旦那々々々々、サア来た」武「何だエ」○「来たました来たました」武「ナニ狼が来た」○「オ、一、来た」之はと驚く宮本は駕籠の中より飛出しました「○旦那、騒いじやア往けねい、騒いじやア往けねい、今夜ウンと来ますせ……」ヤ、面白く奴が来た」武「コレ」少し待て、駕籠屋面白く奴が来たとは何を云ふ、人の脈やがる、狼を……」○「これだから實は旦那先刻から

ね、此處へ駕籠を下して旦那に少しお寝みなせいで、狼の来るのを待つて居たんだ」武「それヒヤアお前は狼の親方か」○「ヘーナニ親方と云ふ譯しやア無い、尤も狼は大抵人間の匂ひを嗅付けるものを見へて直さに人間の居るのを知て二匹宛參るものなさうです、一匹では来ないで必ず二匹連れで參るものなさうです、此時も二匹參つて木の陰から駕籠の中の匂ひを嗅ぎ、又石に腰を掛けて眠つて居る駕籠昇の匂ひを嗅いで一匹は彼方の山一匹は此方の山へ驅けて往つて「チーッ……」と云つて友を呼ぶ、此聲に武蔵も駕籠屋も目を醒したのでございませ、此チーッと云ふ聲が又其狼同士では分かるものと見へます、今人間が二人りたろ、一、同來い、繰出して來い、やアいと人間ならば言ふのでせう、併し幾ら講釋師でも狼の腹の内は分りません、爾う斯うするうちに向ふの谿間から二匹宛揃つて二十四匹ばかり、此方の山の陰よりも二匹宛揃んで二十五匹段々側へ參る様子、併し狼は火を嫌ふさうです、

藏 武 本 宮

それですから山道を歩く時には火繩を振て歩くと云ふ、此時忍籠屋は
焚火の火がマダ残つて居たのを皆消して仕舞ふから 武コレ〜 忍
籠屋何で火を消すのだ ○ナニ狼が火を燃ふから消してやるんだ、面
白い〜 来た〜、サア旦那お前さんもお侍士だ、此狼を皆殺てお仕舞
いなさい 武コレ〜 忍籠屋少し待て〜 ○オー〜 来た〜 来
た〜と云ふから見ると目ばかり光つて体は能く見へませんが五十
匹居るか百匹居るか分らん位、けれ共容易に側へ寄つて噛付きは致し
せん ○ヤァ面白〜、サア旦那……突然手拭を取て向ふ鉢巻をし
て石の上に大安坐をかいて ○サァ旦那之で見て居るからお殺さ
い 武コレ〜、其方何じや知らんが狼の方へ力を付けるやうじやな
いか ○ナニ旦那の御様子を見んるで……政名先生はヨシ〜
之も修行の一つあり、我れは親の仇を討たんと諸國を廻りし者あるに
茲に於て狼に出遭ひ命を取られ、ば夫迄の事、武術修行の一には斯う

藏 武 本 宮

云ふ獸を退治するも之も劍道の一つありと襷を掛け纏て支度をなされ
て右の手には大刀を持ち左の手に小刀を持つて廣き場所へ立上つて
居る所へ四方八方より夥多の狼が一時に向つて口を開き、今や武藏先
生へ噛付かんとする勢ひ、此折忍籠屋は石の上にて見て居たが武藏が
刀を抜たから ○ヤ先生容易に切りやア往けぬい往けぬい向ふから
飛付くのを待たさくちやア往けぬい……ソレ先生左を拂つた武藏は
充分に臆を定めて前の十四程を見て居る内に突然左の方からがワと
噛付く狼、アァ武藏殿は左の股へ噛付かれしと思ひしに小劍を執つて
ハラリ拂つて其狼の首を落す、然れば人間が喧嘩をしても同じ事、仲間
の者の血を見ると気が大きくあると云ふ位、今迄は唯だ取巻て居た狼
が武藏の爲に一匹の友が切られたから外の狼も一時に武藏先生へ噛
付て来る、宮本武藏が両刀の極意を以て右劍と左劍に數十匹の狼を退
治ると云ふお話し一寸休息して次回に申し述べます

蔵武本宮

宮本武藏は両刀あればこそ之が防げますがナカノ一刀にては容易に防げません尤も何流でも正切返しと云つて四方へ向はれたる四人を相手に一人で受ける事もある大抵前を防ぎまするが然はあくして後ろの方を防がなければならんもの四方八方より飛付き或は又武藏先生の頭の邊りへ噛付く狼があります其内武藏は右劔と左劔を互違ひに振りまして右劔を以て受ける時は左劔を以て切込み左劔で受ければ右劔で切込みと云ふのが此人の術です然るに狼の事ですから數十匹体に飛付て参りました故に之を切るナカノ容易の事ではありませんが後に名を遣は程の名人でございますから忽ちの間に十四五匹を切ると又候向ふの籍間から三十四匹程参りました流石宮本先生も此時は大に困つた人間を相手に真劔立合をするよりか尙ほ骨の折れると云ふものは向ふが刀物を持って向ふなら之を受けまするが然は

蔵武本宮

あくして飛付くのでございますから少し隙があれば左と右より一時に来る之を一時に拂はなければならんから真背になつて仕舞ひました中には宮本先生が笑ひながら狼を退治した杯と云ふ事をやしまするがナカノ爾う云ふ譯のものではありますまい敵百匹の眼を相手にしてお居で遊ばすが爲に鬣の毛も逆立て参りマダ何程来るか分らんと思ひ餘程持餘して身体も亦疲れた様子を今迄腕組をして月明りに透し見て居た劔籠昇が「旦那ナカノソナ事じやア今夜中に皆退治する譯にやア往かねいお助太刀を致しませうと云ふより早く石の上より飛下りて其處へ飛込で来て何をするかと思ふと突然狼を一匹殺しましたすると狼は宮本の方へ向ふのもあり又劔籠屋に向ふものもある、〇コン畜生乃公を誰だと思ふんだ三島の三次だ年中此山ア登つたり降つたりして居る乃公に向やアがつて喰ひ付くかサア面白」此劔籠屋こそ笑ひながらです突然右から飛付て来る狼の鼻づらを奪

藏武本宮

を以て打つ、又此方から嚙付て来る狼の上臑と下臑を捉まへてバラバラと裂くと口から腹迄半分程裂ける位、切斯く致しますと此處籠屋の方へ今度は皆一意に向ふ、ソレは又狼の方にも夫だけの義のあるものと見へまして、新丁の駕籠屋が出たから今迄宮本先生に掛つて居た狼が皆一意に此方へ向いますから武藏殿はホツと一息をして杉の木の下へ立上つて、武藏籠屋危険いぞ危険いぞと、〇「ナニ旦那、今迄は旦那に骨を折らしたから是から私が殺ります、サア傍見ささい」ニイヤ〜と懸聲をして飛付き来る狼を引摺いで五、六間向ふへ投棄る、其力は何の位ありますか、投られた狼の腹は裂け腸も出るばかり、又嚙付て来るを上臑下臑を持つて口から裂く、餘りの事に武藏先生も感心致して見て居る内、忽ちの間に此駕籠屋が數十匹の狼を退治して仕舞ひました、其中の狼仲間でも年古りましたものが数匹、駕籠屋の爲に口から裂かれて仕舞つて後とは所謂兵隊——兵隊と云ふのはありま

藏武本宮

すまいが其下に属く狼は之は敵はんと思ひましたか、一匹が「フー」と唸りますると後にも俱に唸つて又前の通り二匹宛井んでバラバラと裂くと口から腹迄半分程裂ける位、切斯く致しますと此處籠屋の方へ今度は皆一意に向ふ、ソレは又狼の方にも夫だけの義のあるものと見へまして、新丁の駕籠屋が出たから今迄宮本先生に掛つて居た狼が皆一意に此方へ向いますから武藏殿はホツと一息をして杉の木の下へ立上つて、武藏籠屋危険いぞ危険いぞと、〇「ナニ旦那、今迄は旦那に骨を折らしたから是から私が殺ります、サア傍見ささい」ニイヤ〜と懸聲をして飛付き来る狼を引摺いで五、六間向ふへ投棄る、其力は何の位ありますか、投られた狼の腹は裂け腸も出るばかり、又嚙付て来るを上臑下臑を持つて口から裂く、餘りの事に武藏先生も感心致して見て居る内、忽ちの間に此駕籠屋が數十匹の狼を退治して仕舞ひました、其中の狼仲間でも年古りましたものが数匹、駕籠屋の爲に口から裂かれて仕舞つて後とは所謂兵隊——兵隊と云ふのはありま

藏 武 本 宮

て往きませう「武、ム、モウ大丈夫か」○「エーモウ大丈夫です、モウ一
旦狼が降参をして逃げたんですから来る氣遣ひはござんせん」武、お
前は感心だなア、能く狼の事を知て居るなア」○「へーモウ彼奴等と仲
間みたやうなもので……今夜来る氣遣ひはござんせん、ア、旦那お待
ちませう、是から焚火をさせよう、又焚火を始めた。○旦那お腹が減り
ましたか」武「ア、大分乃公は空腹になつて来た」○「宜うが、サア
旦那に握飯を移馳走させよう、駕籠の屋根に結び付てありました麻の
袋より六七個の焼握飯を取出して武藏にも與へました、空腹い時に粗
味い物なく武藏も二三個之を喰ひました。○旦那貴下はナンです、ね
い、劍術仕ひです、ア、武、イヤ、劍術家と云ふ譯ではないが……○「何
うです、旦那一つお立合を願はうじやアをさいますせんか、扱はと考へま
した先生、ハ、ア、して見ると此處で今狼を打殺し或は引裂いて退治し
たる様子はナカ、尋常の者ではないと心得たが扱は之りや雲助と

藏 武 本 宮

姿を變へて居る柔術家か或は劍客じやなと思ひ、武、オ、面白しく、
今お前が狼を退治した腕前又拙者が兩刀を持つて狼を切た所を見込で
立合とは……○「旦那お待ちませう、幸ひ向ふが荒人、明神様後のお吐
前が好い場所、彼處で一つ立合ひませう」武、此月の牙へたるを幸ひ一
本立合を願はうか ○「ヤ、先生、伊郎、寧ろお言葉、サア此方らへお出でな
さいと少し離れたる所へ來ると向ふにお鳥居があります、其お鳥居前
の所へ來て ○「旦那お待ちませう、旦那も何か木刀がなけりやア、往き
ますまい、今私が木刀を持つて來ますから見て居る内に社の後ろへ參
つて一柵にしてある木刀を持って來て ○「サア旦那、此中で貴下の手に
合ふ木刀をお持ちなさい、見ると長い短かいもあり、或は細い太いもあ
り、武藏が毎時持付けの木刀の如きも五六本ありますから少し長い
のを右に持ち、短いのを左に持つて、武、サア然らばお立合致さう」○「宜
うが、願ひませう、此雲助も其中の木刀を一本取て、○「サア先生、

藏 武 本 宮

ンナ雲助じやアあります。が些つとばかり好む所があつて……今じやア三島の三次と名を取た雲助が先生方と立合が出来るのは有難い……宜うがすかい、彦免……と立上つた彼の雲助がビタリと木刀を附ける、武藏は例の通り右劔左劔を天地に構へた、其時に彼の雲助が「エー」と打込だを武藏はヒラリと体を交して右劔でバキッ受止めながら左劔にて雲助の横面の邊りを「エー」と打つ……武ア「コレ何處へ参つた」實に不思議と言はんければなりません、向ふから打込だのを右劔にて受け、左劔にて打つ時は大抵お者が之を受止める事は出来ません受けあがら打つんですから皆武藏の爲に打たれて仕舞ふが「エー」と打つ途端に此雲助の姿が見へない、流石の武藏も茫然として之りや人間ではない、魔神の爲せる事かと思つて、武「コリヤ雲助よ」と云ふ時に、〇「先生此處だ」と云ふ聲が頭の上でしますから仰いで見ると、明鏡の鳥居の上に腰打掛けて木刀を出して居る、武「ヤッ、汝は何うして其

藏 武 本 宮

處に……」〇「先生ドンナもんだい、餘りの事に武藏は驚いてタヂと二三歩後とへ下がる時、お鳥居の上からヒラリと飛下りて、〇「サ、先生此處だ々々、宜うがすか、エ、又打込で来る、又受けあがら向ふの隙を狙つて、又候打込む時に、又例の通り鳥居の上にヒヨイと飛上がる、尤も鳥居と云ふた處が餘り高いのではありませんが、斯くする事三度之にて、政名は後へ下つて二本の木刀をそれへ投棄、武「アイヤ、雲助殿、お中しては失禮、彦本名を承りたい」〇「何を言はつしやるんだい、先生……」武「彦身は三島の三次杯と言はれるのは、彦變名であらう、手前事は吉岡無二齋の次男、幼名七之助、仔細あつて宮本武左衛門の養子と相あり、當時宮本武藏、政名でござる」〇「オツと皆まで曰ふか、彦身を宮本先生とは三枚橋で知て居て、態々仕事をしたいと云つて、遂に是迄擔ぎ込み、今夜あたりは、狼の來るのを知て、彦身の腕を試さんがため、併し、貴下を狼に取巻かしたと云つて、拙者が狼に頼んだのじやない、天晴れ、武藏先生

蔵武本宮

のお腕前恐れ入た「武マテ」
「〇」然れば吾こそは紀伊
國の産關口彌太郎とす者「武」
「〇」強人間一生涯皆修行
手前も日本國內を廻り
何故雲助の姿には……
諸所道場をお尋ねして立合も
致し又斯く身を落して在ると
云ふものは山に登つて木を
敲き、磐石に下つて岩石を
碎き長年の間一派を編出
さんと苦心を致したは即ち
此飛切りの術、雲助と相なつ
て道々武家と見たら乗て貫
ひ其武家を捉まへては此邊
りへ連参り狼狽に驚いて逃
げる武家は取るに足らず唯
だ仕事をして三島へ送り腕
のある方々に就て立合をして
は我が腕を堅めて居る、
修身も修行拙者も修行三箇
年此邊りで飛ぶ事の稽古を
致した夫れが爲に漸う高き
所より低き所に飛下り低き
より高きへ飛上かる此術を
昨今にして少しく極めたり
何れも修行は爰でござる宮
本先生も關口の名を聞て居
つたが爲に「武マテ」は關
口先生にお目に懸つたのは
誠に辱けない又只今の

蔵武本宮

飛上りの術には實に感服の外
ござらん如何致して其術は
……「強」武藏先生、修身が
今兩刀にて打込ひ氣合を先
刻より拙者は充分考へたか
ら飛上りやした併し之にて
手前も一の効を得たり其飛
切りの術は斯く致して失禮
ながら修身にお譲りやさんと
遂に夜明方迄五六十遍宮
本に此飛ぶ術を教へました
武藏は實に喜んで虎に鬩を
得た心地然れば此處にて關
口彌太郎から飛ぶ術を授かり
ましたが爲に佐々木岸柳を
討つ時岩石碎き燕返し
の早業をも難なく避けました
それは敵討に詳しくやし上げ
ます扱爰で關口彌太郎先生の
生長から此人の履歴のお話
しもありまするが、これを演
じますると肝腎の敵討が遅
うなりませます、實は武藏が
關口彌太郎に飛切りの術を
教はつたは一夜ではござい
ません、山に居る事凡そ一箇
月餘りにて自分の術をも彌
太郎に譲つて所謂武術の交
換をしたのが實際でござい
ます、ソレで關口も聞

なく箱根を去て紀伊國へ立歸り宮本先生も彌太郎に別れを告げまし
て一先づ肥後の熊本へ歸らうと云ふ積りで先づ箱根山を下り伊豆路
を過ぎて駿河路や大井川を打越へて金谷の宿へ上がり段々と遠州路
をば後とに爲し三河國岡崎へ参りまして圖らする亦一人の柔術家に
出會ひ此處にて宮本が又一の妙手を受継ぐと云ふお話し

第十一回

扱武藏は箱根山にて關口彌太郎と互ひに妙手を取換へ夫より伊豆國
へ参り伊東一刀齋と鍋蓋の試合をした杯と或る本にもおりますし又
講談師社會にても演説まするが之は大きに相違致して居りまして其
時分は伊東一刀齋は伊豆には居りません又如何に達人と雖も鍋蓋
を以て受ける杯と云ふ事は初對面の人に向つての禮ではありますま
いアレは所謂草双紙に作つた宮本武藏のお話しですから其腹味たる
所は演じません是より岡崎の宿に参ります尤も道々街道筋に劍術の

宮本武藏

宮本武藏

稽古場或は槍術柔術等の道場があればそれを尋ね日を置ねて岡崎の
宿へ参り一々早うございませうが疲れても居りませうから旅宿を取ら
うと傳馬町の両側を眺めて通りませうと或る一軒の宿屋で若い者が
若お早うございませうお泊り様じやアございませうかお早うございま
す頭りと呼込みませう故武拙者は一人旅だが宜しいか若へーお
一人様でもお二人様でもお半人様でも宜しうございませう武コリヤ
若い者一人二人は分つて居るが半人と云ふのは何か……若へ
いお半人と云ふのは眼一で賊でございませう武戲言を言ふか主人は
それへ出て参りまして主お早うございませうエー今晚は少々宿が込
合つて居りませうが何うぞ侈不承を願ひませう武ア一宜しい主コレ
竹の二番へお通しやしな之は三河屋惣助と云ふナカノ大きい
宿屋でございませう下女が來つて六疊の室へ案内をする其内に入浴も
済み武藏先生食事を爲して居ると何となく騒がしうございませうから

給仕女も聞くと隣の小室の室に相撲取が十二三人泊つて居るとの事、尤も之は其時分の事ですから勸進相撲ではございませぬ大昔しは節會の相撲と云ふ之は古代の事でございまして大關々脇杯と云ふものが出來たのは寛永の十九年七月の十七日に徳川將軍より許され江戸表四ッ谷鹽町に小屋を装置ひまして此處で木戸錢を取り汚免を賣る密現はしまして所謂勸進相撲其時分の即ち兩大關の元祖が東を明石志賀之助西が仁王仁太夫之が大關の元祖でございませぬ其昔しは大關を秀手役と申しました併し是等は相撲のお話しですから茲には略しまするが其時分は圓々に相撲が澤山ございまして早く言ふ芝相撲草相撲杯と云つた時分で三河屋へ泊り込みました相撲は何れも尾張或は美濃邊りから來て駿河路へ廻るものと見へまきて皆各自に大きな聲をして話しをして居るもあれは或は膏藥を伸ばして貼て居る者もありませぬ其内に夜も十時過にあつて表の方も段々と往來が寂しくあ

ると「按摩針の療治按摩ア」と云ふ聲が耳立つて聞へると一人の相撲が「オイ〜姐さん彼の按摩を呼込で呉れ」女お相撲さんおよしなさいませ」相何だ……女何だか知りませぬがね彼の按摩はナシでございませぬ横柄を按摩で呼込みますると何方がお客だか知れないやうな奴で憎らしい按摩さんおよしなさいませ其内にモウ一人温和しいのが來ますからそれを呼びませう」相イヤ〜何でも構はない呼で呉れドンきに威張る奴でも己れ達ちやア相撲取だ驚ろかねいから呼で呉れ」女ハ一爾うでございませぬか二階の窓から女モ〜按摩さん」按ナニ呼ぶのかオ〜今往つてやるぞ」女ソラ傍聴あさいお相撲さん大きな事を言つて居ますよ」相何でも構はない呼べ……處へ這入つて参りまして。按ア〜相撲取か揉で欲しいと云ふのかの……」大さにお相撲が驚ろいて。相ヤ剛い事を言やアが」と見ると総髪で年の頃五十にマダならぬ位四十八九とも覺しき目のギョロ

百三十二

ッとした一癖ありさうな男、短かい木刀を一本差して、浴衣を入たる箱
 を持つて按摩針の療治導引杯と饒舌りながら座りまして、按「サー揉
 でやらうかの」○「オイ」二子山「汝れ先きへ揉で貰へ」△「諾し己ら
 揉で貰わう……」オイ「按摩せん、ナイッとナンだよ、強揉でなけりや
 ア往かねいよ、素人は力が無いから柔らかに揉で貰ふと云ふが己れ遠
 が肩が張れた日には力が満ちて堪らんから強く揉で呉ねいさ」按「取的
 旨い事を言て居るの……」△「何じやい取的とは……」按「強う揉でや
 るが宜いかな」△「サー宜い」二子山と云ふお相撲さんが両肌腹で
 △「サーやつて呉れい」後ろへ廻つて是から揉始めました、按「何うだね」
 △「エー、ソん事じやア利かね」モ些と強く揉で呉れ」按「ハ、ア、モ
 ソッと強いが宜いかの、之じやア何あもんだ」△「マダ左様な事じやア
 利かねい、モツと強く揉で呉れ」按「此位か」△「それでも利かん」按「ハ
 、ア、驚ろくなよ」△「ナニ驚ろくもんかい、按「それじやア宜いかホラ、

百三十三

エーイツ……」と聲を掛けると二子山はウン轉倒つて仕舞つた、側に見
 て居た相撲が「ヤー飛でもない事をさッしやるな、按「此お相撲が強
 く揉め強く揉め杯と生意氣を吐すに依てチヨイと殺して見たのだ
 相「酷い事をしやアがッて何うする、按「イヤ」今活かしてやるは……」
 又抱き起してヒヨイツと何處やら揉むと云ふと直ぐ氣が付いて△「
 ハ、モウ侈免だ」○「何うだい二子山此按摩は……」△「ヤ大變さ
 按摩だ、己れを殺しやアがッた、○「我慢は出来ねいか」△「出来ねいッ
 ム、エーイツとやられた日にやア、己らアモウ氣が遠くなつて仕舞つた、
 汝れ一つやつて見る」○「諾し……」と云つて瀬多川と云ふ相撲がそれ
 へ出て「瀬「コレ按摩せん……」按「宜いか、一つやるせ」瀬「ム、やつて
 呉れ」按「矢張りお前も強揉みかな」瀬「己れも強う揉で貰わう、二子山
 とは違ふからソツカリやつて呉れ」按「何うかな」瀬「マダ、ソんな
 事じやア利かねい」又力を入れて、按「何んあもんだ」瀬「マダ利かねい

藏武本宮

「オー大分強いな、それでは堪へられるかやつて見やうせ。ヤン……」又
瀬多川が顛倒へる暫く経つて又活かす、相「ヤ、面白く、此按摩さ
んは、揉で見たり揉殺したり、爾うかと思ふと活かす之は自由な事をす
る按摩さんじや、已れが一つやつて貰はう、今度は其お相撲さん達の中
でも頭ら株の阿武の森と云ふのが出て、阿「サー、ッカリ遣て呉れ、按
摩が阿武の森の身体を見て、△「ヤお前は少し骨があるな、阿「馬鹿な
事を吐け、骨の無い奴があるかい、△「今の二人とは少し違ふ、此位太つ
て居りやア少し揉心地がある、そら何うだ、大「マダンな事じやア利
かねい……ヤ、二子山瀬多川、汝等ア何だい之しきの揉方に痛いく
と云つて驚ろくたア、コンな事は平氣あるんじや、ソラモソツと奮發や
つて呉れ、△「宜いか、何うだ、阿「マダ利かねい、△「之でも利かんか
阿「マダ利かねいと流石阿武の森は我慢をして居る内に段々く、と強
揉にあつて来るから少し阿武の森も驚ろいたが我慢をして居る内に」

藏武本宮

△「何うぞやア、エーイツ……」と云ふドタンと倒れる、一同「ヤ又やられ
たと云ふ内に又活かす之を見てお相撲さん達二十人計りが皆呆れ返
つて之りやア危険な按摩だ己らア涉免だ涉免だ、と騒いで居る、宮本先
生は先刻より隣座敷の相撲取がワ、云ふ聲の爲に寝られせんで
ウツラ、として居る内に、ヤ、エーイツと云ふ聲がする、其掛聲は
武術に適つて居りますから唐紙を細目に明けて見て居ると三四人の
相撲を一時殺し又活かす、宮本之を見て之りやア柔術家だな、相撲共は
氣が付かぬが柔術の妙手を以てやつたのだ、之は面白いと思つて手を
打くと宿屋の下女が「ハイ何でございます、誠に今晚は騒々しくてお
氣の毒さま、武「イヤ、騒々しいのは構はんが隣室に居る相撲の中
に行司が一人居るやうだ、女「ハイ、向ふの隅で笑ひながら見てお居で
さる、アレが行司の源助さんと云ふお方でございます、武「ム、爾う
か鳥渡呼で呉れまいか……ア、コッヤ、按摩に知れないやうに呼で

呉れ 女め更しりました是より下女げにょが行司ぎょうじの源助げんすけに此事このことを言いふと何事なにことかと思おもつてソツと此座敷このざしきへ來きるを武藏ぶさうは側わきへ呼よんで、武たけお前まへが行司ぎょうじさんか、お前まへ達は氣きが付つくまいが今彼處いまあそこへ來きた怪あやしな按摩あんまが二三人にさんにんの相撲しよぶく取とり衆しゆを強揉つよもみだと云いつて一時殺ひとときころしては又活またいかす様子ようす、アリヤア柔術じゆじゆつ取とりだ 行ぎやうア左様さやうでございませうかな 武たけお行司ぎょうじさんでも氣きが付つくま
い、ソコでな私もア云いふ按摩あんまに一つ揉もみで貰もらひたいもんだけれど私わたし
が今此處いまここに泊とどつて居ゐる侍士ざむらいしと云いつては往いかんからお前まへの弟子でしの行司ぎょうじ
だと云いつて私わたしが彼處あそこへ這入はいるから何なにうか含こんで居ゐて呉くれれ 行ぎやうハ一宜いち
うございませう、之これは面白おもしろい、畏おそりましてございませう按摩あんまは又外またの相
撲しよぶくを今度こんどは當あたり前まへに揉もみで居ゐります、行司ぎょうじが向むかふへ歸かへつて暫しばらくく經かつと宮
本先生みやもとせんせいが椽側えんがわの所ところから 武たけヤ一皆いちの衆大層しゆだいらう揉もみで貰もらつた外またのお相撲
さん達は妙たぎち顔かほをして何なにが這入はいつて來きたと思おもつて居ゐると 武たけモン、
按摩あんまどん、何なにうか其仕事そのしごとが濟すだら私わたしを一つ揉もみで貰もらひたい按摩あんまは振返かへ

つて 武たけハ、アお前まへは何なにだニ、武たけ私わたしは行司ぎょうじ源助げんすけの弟子でしで行司ぎょうじ見習みならひひ
の者もの…… △「ハ、ア行司ぎょうじ……何なにと云いふ名なだニ」武たけ源助げんすけの弟子でしで……
源助げんすけの弟子でしで…… △「何なにと云いふんだニ」武たけ源吉げんきちと云いふ者ものです、△「ア
一爾いちうか揉もみでやらうか、武たけハ一揉いちで下ください其内そのうちに外の相撲そとのしよぶくが濟すむと
宮本先生みやもとせんせい其處そのところへヒタリと座まつたから今強揉つよもみをされて目を廻まわした相撲
さん達が互たがひひに顔かほを見合みあせて妙たぎち者ものが來きた中なかには彼あれは先刻さきどき隣の座
敷しきへ泊とどつた侍士ざむらいしじやアないか、此按摩このあんまも普通ふつうの按摩あんまぢやア無い、之これりや
ア面白おもしろいと密々ひそひそ囁ささいて居ゐる内に突然とつぜん揉もみ始めて、武たけコラ、お行司ぎょうじさ
ん、お前まへは大層たいらう身体しんたいが小さい故強揉つよもみは往いくまいさア、柔ならから揉もみでやら
うなア 武たけヤ何なにうか強つよう揉もみで貰もらひたい」△「コンナ小さい身体しんたいで……
武たけ己おれれは体たいは小さいが平生へいぜいから按摩あんまに掛かつては強つよう揉もみで貰もらふのが樂たの
しみだ 按あん爾にうか、ハ一宜いちいかさ、ヤツ……」と云いふ掛聲かこゑで揉もみで來きる武藏ぶさう
は揉もみまして居ゐながら考かんがへて居ゐると成程なるほど柔術じゆじゆつの手てがチヨイ、ある、エ

蔵武本宮

「イッ」と強く力を入れた時にお相撲さん達は自分も力を入れて居ますから尙ほ痛い宮本先生は向ふで力を入れるとヒヨイと氣を抜き、些ども私はマア利かさい、按、ナニ利かさい……之で……」武、オー利かさい、モウ一つやつて呉れ、按、宜いか、ヤツ……平氣で居る、按摩も少し驚いて此行司は体は小さいが剛い奴だ、モウ是迄と思つたから有ん限りの力を込めて、ヤツ……」と云ふ聲を掛けた時に大抵なら其處へ願倒つて仕舞はなければならぬのに武藏先生は「エーイッ……」按摩の掛聲と自分の掛聲と合ふやうにして向ふの手首を捉まへて後の方へヒヨイッ」と体を引く途端に按摩が「ヤツ……」バタン／＼、忽ち三室向ふの座敷へ按摩がヒヨイと飛びました、お相撲は驚ろいて「何じやや」と云ふ内に向ふの座敷より立上つて、按、イヨォー行司ナカ／＼やゝ居るな……」ア相撲は驚ろいて、相、妙だ、ア何だい、一体化物同士○

蔵武本宮

寄集りか杯と云つて驚いて居る、此時宮本先生が「時に按摩殿感心な致した、按、何う感心をさされたの、」武、手前が氣合にて手首を取て、身を投げた、投げられた、傍身は手前の襟へ……」武藏が右の手にて首筋を押へますると丁度首筋の所に膏藥が二枚貼てありました、之は宮本が按摩の右の手首を取て「エー」と投げる時に左の手にて箱の中にあつた膏藥を取て早くも武藏の首へ貼た、按摩の早業、真劍ならば武藏は首を切られたも同じ事でございます、武藏は感心をして、武、恐れ入た、何うか願くは尊名を承りたい、按、シテ傍身は何人だ……」武、若年故に手前から姓名を名乗りませう、拙者は行司源吉杯とは詐り、實は肥後熊本の臣宮本武藏政名でございます、按、オー扱は貴殿が宮本先生か、ムー然もありなん、二度三度手前がエーヤツと云ふ掛聲で強く揉だ、それを一々氣を振て力を弛める、之りや尋常人ではない、柔術取とは見受けぬが何れ武術の修行をさされたお方と見たが扱は宮本氏か、武、シテ、

藏武本官

、お手前は……按拙者は竹内常陸之助でござる「武」ナニ扱は竹内先生であつたるか後へ下つて武藏は両手を支き事鄭寧に挨拶をなすお相撲達はヤ大變お先生達が集まつたど驚いて居る扱爰で鳥渡一言致して置きまするが之を寛永の宮本と稱へて常陸之助を加賀之助として講釋師が皆讀で居ります竹内加賀之助は宮本先生が老体にあつた時分、壯ん赤人で實地を調べれば能く分りますが茲に竹内中務大輔久盛と云ふ人がありました之は小具足捕手の達人で元此人は作州津山の城下波賀村の人で自ら竹内流と一派を廣めました柔術の方ではナカク古い先生、澁川流杯から見るとズツと昔々の事であります此人は天文元年六月二十四日に死去致しました此人の子が竹内常陸之助と云つて今按摩にあつて居りましたのは此人です此常陸之助の子が加賀之助で之は中務大輔の孫でございまして寛永の時代に京都川東に道場を出して大層行はれた人でございまして夫故に按摩

藏武本官

にあつて居たのは加賀之助でございまして其親常陸之助久盛と云ふ人でございまして之が實際ですから貞玉は斯く演じます其常陸之助が何故あつて按摩導引杯をして居るか云ふに吾れ一代の内、人の体だを扱ひ事一万八千人と云ふの願を掛けたと云ふ事尤も一代按摩で送ればそれは扱ひませうけれ共儘かの内ではナカク大變でございませう人の体だを扱んで見れば皆身体骨組が違ふもので語り接骨醫杯は柔術取の先生方は皆出来ると云ふものは身体の急所々々、骨組の工合をチャンと心得て居るから出来るのです夫れを能く究めたい爲に願を掛け斯く修行をして歩く併しそれには竹内常陸之助では往けまいから按摩の常平とか常藏とか出鱈目の名を付けて國々を廻つて居たもので此岡崎の宿に十日計り居りまして圖らずも今日宮本先生に出會つたのでございまして武藏は鄭寧に武、之は竹内常陸先生でありませたるか誠に無禮を致した何とあれば先刻お手前が相

藏 武 本 宮

撲の強姦其度々の掛聲が武術に適つて居るが爲に唐紙の間より隙見致して武藏と名乗らず行司杯と詐つたは甚だ恐れ入つた「常、イヤ、其様な汚換扱では却て手前が面目ない、手前も竹内常陸之助を按摩杯と云ふのは之も矢張り修行の内、異なる所でお目通りを致した、それでは是より一杯呑みませう……」お相撲は呆氣に取られて見て居りましたが、○「ヤ、イヤ、二子山道理で敵はない筈だ柔術の先生だ、此方は又剣術の先生、成程先生同士のナニは別だあア……」△「爾うさ己れも初めから何うも怪しいと思つた……」お相撲達も竹内先生と聞て遂には皆各自に謝するから「常、イヤ、謝する所はない此處へ宿屋の亭主も出て参りまして、亭、ヤ、モウ按摩さんどやしては失禮……何うも此間鳥渡お呼びやした時に普通の按摩さんとは思へなかつた殊に宮本先生のお泊り下すつたのは私の家の譽れ何うか十日でも二十日でも一年でもお泊り下さいませ」之を聞て居た宿屋の若い者は旦那様は飛

藏 武 本 宮

でもあいなアンナ黄澤を言つて大きな事を言ふ按摩さんと擊劍家に泊られた日よは營業の邪魔になるだらうと心あき者は愛へて居る、明日に相撲は此處を發つて仕舞ひ武藏と竹内先生は一室を借りて五六日逗留致しまして武藏は親無二齋より傳はりました両刀の氣合、又竹内常陸之助は親の廣めた竹内流の極意一手二手を宮本に話しをして互ひに交換をして夫より常陸之助はマダ東國を廻ると云つて岡崎にて武藏に別れて東海道を下り、又武藏殿は岡崎を立ちまして一度京都へ這入り堂上方の伊家來の内に若や佐々木岸柳が居りもせんかと尋ねました、何うも知れず、是より丹波路へ這入ります、其昔し丹波には誠に強賊が澤山居ましたが大江山に酒呑童子と云ふ鬼が居た杯と云ふのはアレは附會説で決して鬼が居たのではございません、是より武藏は丹波丹後但馬の三ヶ州を過ぎて美作國へ這入りました、其頃作州津山の城主は浮田中納言秀家卿でございまして之を寛永と致

藏 武 本 宮

したが爲に森大内記公が在城のやうにやす人もございませぬがマダ
其時分は森公は在城ではありませぬ而して此津山には劍道の達人
其外鎗術馬術弓術砲術武藝は悉く先づ其頃ひの大名では津山公が一
番と言はれる位、それを聞きましたから何卒津山城下へ参り有名先
生と立合をして修行を致したいと云ふ積りで日に歩み夜に泊つて此
道へ這入り、丁度津山から致して一里半程此方の新田村へ参るとモウ
日は暮れて仕舞ひました故に何處か宿はあからうかど見ると向ふに
木賃宿と云ふ看板が出て居るから、武ハイ御免よ……亭主がそれへ
出て、亭ハイ此方へお通んなさいませ、不潔しい宿屋でございませ
るかお泊りでございませるか、武ハイ今晚津山迄往きたいか何分津
山迄はモウ遅うあるに依つて一晩泊めては呉れまいか、亭ハイ左様で
ございませるか、それにモウ今頃から津山へお出でなさいませると、本町
へ這入つて仕舞へばモウ宜しうございませぬが城下外れの並木が物

藏 武 本 宮

騒で此節は天狗様が出まして夜分にゑると通行人がございませぬ
宮ハ、ア左様か別に氣にも留めず笑ひながら足を洗ぎ一室へ通つて
間もあく入浴も済み湯膳を喰べて居ると隣りの室へ泊つた商人体
客人二人、〇モシ彦兵衛さん昨夜は三人切られたさうだ、△ハ、左
様か、エライ物騒お事だ、〇何でも人の噂では人間じやない天狗様だ
と云ふ評判でございませぬ、△ハ、ア左様かの、マア寮間の内であけれ
ば津山街道は通らぬ事さ、武藏は此話しを聞いて扱は先刻當家の主人が
異事と言ふと思つたが其話しに違ひないと思ひ態々帳場へ参つて
宮ハ亭主、今隣席に泊つて居る商人達の話しに昨晚二人切られたとか
投げられたとか言つて居るがアレハ何か、亭ハ左様でございませぬ、ソレ
は此節は城下外れへ每晚何でも天狗が五六羽も出ましてな人を捉ま
へて田の中へ投つて見たり、手向ひをする者を切て見たり、何でも先月
の末から始まつて此節は夜分にあると一人として通行人はございま

官本武藏

せん「武、ムー左様かそれは面白い何時頃に出るだらう」亭、左様「マア
宵の内は餘り出ませんが何でも十時過から出始めるさうです、モウ知
て居る者は其時分は通りませんが知らぬ者は皆捉まりまするさうで
す」武、ハ、ア左様か面白い乃公が今晚往て見やう」亭、マア貴下飛で
もかい事を仰しやいます若やお怪我でもあつたら何うおさいます」
武、ナニ怪我扱は少しも驚ろかない爾う云ふものは一つ退治て呉れや
う」亭、貴下は全体何う云ふお方で居らつしやいます、劍術の先生です
か」武、イヤ劍術の先生と云ふでもないが少しばかり劍術の稽古をし
て國々を廻る者爾う云ふものゝ出會はんければ修行にはならんから
強て往きたい此時官本武藏とは亭主は知りませんから、亭、それじや
ア、マア往て多覽あさい何でも危きに近寄らず人が投げられる處でも
見たら歸つておいであさい、宜うございますか」武藏は十時少々過に喉
だ一人宿屋を立出で是より一里七八町もある所を宿屋の亭主から、詳

官本武藏

く、聞て急いで参りますと折しも秋の半ば殊に月夜にて心地能くアラ
リ、と参る内に少し空撲様が悪くなつて月は雲間に隠れましたか
ら却て都合好しと武藏は彼方の並木の所へ参つて松の根に腰打掛け
何か出るであらうと待つて居ると向ふの方より黒頭巾を被つた者が
二人來たと思ふ内に又一人松の木の下から來た様子、之は武藏が此處
に居るのを知て來たのか知らず來たのか更に様子が分りません、武
藏は立上がりまして旅人の体に何氣なくツカ、とそれへ参ると左
方から一人「ヤツと云つて切付けたをエーイツと体を交して投げる途
端に右に居つた一人が大刀スラリと引抜て「己れ手向ひするかと切
付けるを早速の早業向ふへ投げる、尙ほ一人續いて切込み遂には三人
一齊く掛かりましたを箱根山にて彌太郎より學んだ天狗飛切の術に
てヒラリと彼方へ飛上がる、武藏は一刀を抜かすしてトウ、三人を
投倒す、三人の者は驚ろいて却て武藏を天狗ではなきかと二人の者は

本町の方へ逃て往く續いて一人も逃出すを此時武藏は考へて扱は若
侍士が刀試し斯う云ふ輩が犬を切て足に噛付かれ或は橋の欄干や並
木の立木を切て刃を損すと云ふ馬鹿者の類取押へて意見を言ふて吳
れやうと追駈け参りますと彼の者逃道を失ひマゴトとして並木を少
し離れたる松の林の内へ逃込むと木の枝に結び付けて一の紙帳が釣
てある是幸ひと追はれ來つた此天狗は突然紙帳の中へ逃込むを逃し
はやらじと政名先生紙帳を上げて彼を掴まんと片手を差入れたる時
より武藏の手首を捉まへた者があるサシモの武藏も身体が解れ之り
や今追駈來つた天狗の輩ではある何者が居るならんど紙帳の外より
聲を掛けました扱政名先生の手を掴んだ者は何者でございませうか
次回に演じます

第十二回

木の間に紙帳を釣て居ると云ふのは怪しいやうですが昔しは武術仕

行人又は六十六部杯が旅へ出ます時は何れも油紙の紙帳を用意し
峯に上り谿に下り又は原野に宿る所がある時は雨露を凌ぐ爲に紙帳
を釣て寝る事は間々ございませう今宮本に追駈けられた一人が其中へ
逃込みましたから彼を取押へやうと差入た手首を捉へられた内に逃
込んだ者は紙帳の後ろを明けて逃げて仕舞ひました餘りの事に武藏は
驚いて、武何人であるか姓名をと云ふ時に、
〇「ア、能う寐て居る
處を無法に一人飛込み來り又一人が手を差伸べて私が頭を撫でた
故押へたのだ」と紙帳を上げる途端に月は雲間を離れて去の如く、
〇「お若い方は何人だと言はれて武藏は「恐れ入たは身は何處の
仁にて在るか拙者は此節當城下に夜々怪しの者が出て試切りを爲す
とか云ふ之を取押へんが爲に酔狂のやうではござれど宿屋を立出で
之へ來り三人の怪しの者を見受けたに依つて之を取押へんとしたるに
二人は早くも逃去り今一人が此中へ逃込みたるが爲に取押へやうと

宮本武蔵

致したをば身の爲に手首を取られ恐れ入た、手前事は宮本武蔵政名でござる。○「オー扱は無二齋殿のほ子息あるか、斯は恐れ入た」武、ソテ親の無二齋を存存じの許は……後へ下つて、○我等は吉岡憲法……「武、ナニ吉岡憲法氏……武蔵も驚きました、此吉岡憲法に就て鳥渡お話しがございます、此憲法を衆房と書てあるものもございます、が全くは憲法と云ふのが本名でございます、元此人は京入流の達人でございます、之を後に鞍馬八流杯と人が言ひます、之は鞍馬に八人の僧があつて何れも武術を盛に致した、が爲に鞍馬八流杯と言ふがソレな流儀はございませぬ、京入流が本統でございます、此憲法の侍を又三郎と申します、然るに度々クドイ事を申し上げてお目障りにありませう、が宮本の傳記を皆寛永時代に作つたが爲に前の竹内常陸之助を其子の加賀之助にした如く憲法をも侍の又三郎にしてございませぬ、が全くは憲法が其時分の人でございます、此人京入流から致して一度武

宮本武蔵

蔵の實父無二齋先生に就て武術を學びました、が若い折酒を好みまして無二齋先生に小言を食ひ遂には自分から退身致しました、が仕舞ひには吉岡流と一派を廣めました、元此人は京都の成る紺屋の形付の職人で形を付けながら籠を持つて廻を打つ事に妙を得て、それから劍術を學んだ杯も申しますが夫は全然空談で決してソレな人ではございませぬ、都に居つて室町家に仕へて居つた立派な人でございませぬ、此人の流名は吉岡流と云ひ或は憲法流と申したのが實際で然るべき書物にも皆斯の如く出て居ります、ソレで武蔵は「それでは其以前父上から聞た憲法氏はお手前であつたか、始めては面會を致した其時は手前幼少にしてツイ」尊顔を忘れて仕舞ふた、何故憲法先生が之へ……「憲と申すは矢張りお手前と同様、常津山街道の並木に天狗が出て人を害すとか或は刀試しをする者があるとか云ふ事を聞て爾う云ふ心得違ひの者は取押へて意見でも言はうと酔狂のやうではあるが

藏 武 本 宮

能々都を去て此處へ來り餘り眠さに用意の紙帳を釣り其中で今トロ
と目睡んだ處へ何かは知らず驅來つて紙帳の中へ這入る奴があ
る目を覺す途端に伊身が差伸た手が手前の頭まへ當つたのだ「武、ヤ
之は恐れ入た併し吉岡先生に之にてお目に懸らうとは思はあかつた、
それでは兎も角も憲法氏此紙帳の中で夜明しをなさるは却てお身の
毒今晚は手前宿へお泊り下さるやうに言はれて憲法も懸て紙帳を取
外し大きな麻の袋に這入つて居る食物を提げて殊に憲法先生は頭の
毛は剃つて坊主でございませぬ異な姿をして宮本と共に夜の二時を分辰
つて來て宮本は「宿屋表を明けて呉れい」亭へ何でございませぬ
武先刻天狗を退治に往た侍士だ「亭ソリヤ喚アせんモウ化けて來た、
馬鹿なお侍士が天狗退治に往く杯と出掛けなすつたが定めし殺され
て仕舞つて化て來たのだらう……私の方へ化て來るのは少し見當が
違ひませう」武早う明けて呉んか「亭イェ〜明けてませぬ 武乃公

藏 武 本 宮

は化物でも幽霊でもない早う明て呉れると笑ふて居る戸細に明けて
覗いて見て「亭喚アせん幽霊が連を連れて來たせソラ見ろお前坊さ
んが居るじやアあいか彼是れ言ふて居るから武藏はモドカしく思ひ
戸を押明けてツカ〜と這入れれば後に續いて吉岡憲法も這入つて來
るを宿屋の夫婦は驚ろいて居る、武「コリヤ〜、何も心配は要らない、
モウ寢る間もあるまいに依て酒を一抔燗けて呉れる是から亭主が其
處へ來て親しく尋ねますから詳しく話すと、亭それ玄やア京都の
吉岡先生貴下は宮本武藏先生……ヤ喚アせん剛いお方が宅へ泊つて
下さつたろ之が已れの宅の看板になる譽れにあると亭主は大に喜び
亭「サア〜おあがり下さいませ酒は幾らでもございませぬ頭りと懸應
致しまする故に之を断つて居る内にモウ夜も明けました處へ浮田公
の御番中よて大濹要人と云ふ人が出張を致しまして、要「コリヤ〜
亭主當家に都からお入來にあつた吉岡憲法先生宮本武藏先生伊在宿

藏武本宮

にみる様子……「亭へー」左様でございます。要大瀧要人が出張
致した御面會を願いたい宿屋の亭主はキョロ／＼して何事が出来た
らう、お小言ではいかと心配をしながら取次をする。大瀧要人は兩
先生に面會をして、要實は昨晚御身等の爲に取押へられやうとした
は當家の足輕組の者に致して鶴岡平竹村宮左衛門伴野兵衛此三人
の者は劍道を能く仕ひ侍士の中にもナカ／＼及ばぬ位も腕前此三
人が申し合せて城下は出て人の命を取るのではないが唯だ腕を堅め
んが爲に人を取って投げ或は真と切らずして切ると見せて腕を固め
して居つた。然るに昨夜お手前達の爲に三人に取押へられやうとし
と今朝目附達へ彼等自訴致したに依つて法通り三人は牢へ入置た其内
の一人曰く紙帳を釣て居た一人の老人と尙ほ若き侍士との話を木陰
にて承り兩先生と云ふ事を知り後を尾け参れば當家へ参つたとの訴
へに依つて推參致した彼の三人の者は何れ重き刑にも行ふべくそれは

藏武本宮

後しての事然るに早くも家中の若侍士達が宮本先生吉岡憲法先生の
お名前を聞いて太守へ申し上げし處主人秀家公殊の外御満足に思召し
兩人が當城下に来たる事幸ひなり早う呼べどのお言葉に依つて我等お
迎ひに参つた。コリヤ／＼宿屋の亭主能くも其方は斯う云ふ先生を宿
へ泊めた孰れ上から御褒美が出る宿屋の主人は大きに喜び、亭主
褒美は幾ら出ませう。要ソん事分らんは……是より宿屋の亭主
も供を致して憲法宮本の兩人は津山の城内へ遣入りますると暫時
控へさして充分のお手當爾う斯うする内にお少く過る刻限にお晝
食を頂戴致し案内に連れてお馬場へ参りまするとお馬見所の正面に
はお毛氈を敷き浮田秀家公は着坐遊ばされ御重役が三十八名お目見
以上の人が二百名お目見以下の者が三百人何れもお馬場の左右に并
び今や遅しと待つ處へ大瀧要人の案内にて外見にも構はぬ吉岡憲法
宮本武藏の兩人はお馬場へ出ますると一枚の御線が敷てある。それへ

宮本武藏

兩人坐を占めると秀家公は傍前へ出でられ、秀憲法武藏
兩人傍身等は今戦國に其名も高き武術の達人、此度當城下へ來り候段
予も過分、此に於て願くは名人同士の立合を一見致したし、この言葉
でございます、お受けに及んで宮本武藏直ぐ憲法氏と立合はんと其
處はマダ年若故に血氣に逸るを憲法は老体故言葉靜かに、憲有難き
太守のお言葉に候得共武藏政名は吉岡無二齋の伴にして若年とは言
へど、劍道は名人此憲法は最早老体にしてナカ、政名には及びずさ
す、と云ふの味も言葉が尙更、意に適つて、秀勝敗の論には及ばず唯
だ傍身等兩人の立合を見たと二度のお言葉に己を得ず、憲然らば
武藏殿一本立合せせうか、武心得ました茲に於て憲法と武藏は互に
木劍を執て其場へ立上がりました、此時大流要人は股立を取上げて素
足にありお馬場の砂を踏で、別に行司役と云ふ迄の腕ではありません
が、双方無禮のさきやう、又大切な立合ですから所謂検査役でございま

宮本武藏

す、此時秀家公は馬見所の一段低い所迄お降り遊ばして傍遊ばす、傍
家來一同はシンとして居る、悠々と致しまして互に會釋、此時吉岡憲法
は名人武藏は達人ナカ、立上る迄は容易ではない、双方睨み合て居
る内に、ヤ、エ、イ、ツ、掛聲と共に立上がり、憲法は木劍を右の手に持ち
左の手を帶の所へ當がひまして、浮船に構へ、浮船とは眞直き構へで
ございます、武藏は例の通り左の手に持た、木刀を頭上へ上げて所謂上段、
右の手に持た、木刀は正眼之を天地陰陽の構へと云ふ、又或時は向ふの
相手に依ては木刀二本をブラリと下げる構へ方もあります、さうで
すが、兎に角憲法を相手です、から斯く構へものでございませう、武藏が
突然打込で來たのを憲法ヒラリと後へ体を交しました、南無三仕舞つ
た、武藏は左劍を持つて拂ひます、と憲法は又此方へ飛びボツキリ
受止める、折しも又武藏が右の手に持た、木劍にて拂はん、とするとボキ
リと受ける、此時は驚ろきました、武藏は二本此方は一本、其一本の木刀

藏 武 本 宮

百五十八
が二本よりも働きが激しくエイヤ〜と打込まれて政名先生は少し
く後へ下つて之では往かんと又取直して稍暫くの間双方共天で三合
地で二合沈んで受ける虚々實々千變萬化を盡して立合つて居る内武
藏の方よりも段々疲れが出まして身体はビツッヨリ油汗をかき憲法も
若き折と違つて眞青にあつて油汗を出し双方睨み合つて居る内宮本
武藏の目よりダラ〜と血が流れ憲法の鼻よりもダラ〜と血が流
れ出る木刀と雖も互ひに眞剣を持って立合ふ如く武藏の鬚の毛は逆立
ち憲法の頭りは血の汗が滴れるかと思ふばかり双方所謂固くなりま
した此時大瀧要人が「アイヤは両士勝負は是迄……秀家公も「要人
早う止めいナカ〜」容易に止まりませんから大瀧要人が鐵扇を執つて
眞中へ出で双方を押分け 要モウ是にて充分立合は相分つた言は
れてハツと氣が付く宮本後へ下つて木刀をそれへ置て、武吉岡憲法
先生若年の武藏甚だ恐れ入た逆も傍身には及ばん 憲イヤ〜 政名

藏 武 本 宮

百五十九
殿感心した吾も若き折より夥多の人と立合をしたが傍身の腕には恐
れ入た憲法遠く及ばん 武イヤ〜 政名は遠く及ばん 双方譲り合ふ
を見て太守は兩人の腕前と云ひ心と云ひ實には感心遊ばされ傍家來
大勢は今ならばヒヤ〜と云つて所謂拍手喝采でせうが昔しの事
すからワ〜ワツと聲を揚げました茲にて兩人も暫時休息扱武藏の目
から血が出た憲法の鼻から血が出たと云ふのは之りやア實地に至つ
て見ると能く言ふ言葉ですが藝人が咽喉から血が出る迄饒舌り血の
汗を搾ると云ふが双方眞剣になると斯の如き事も幾らもある事です
ソコで今日の勝負は何れが勝何れが負と云はずして勝負あり然れば
武藏流祖録にも吉岡憲法は宮本と立合をして其勝負分らずと書てあ
ります大層太守は感心遊ばしにして充分のお手當を賜はり「願くは
何うぞ當城内に足を留めて居て呉れと云ふお頼み其晩は親しくお側
へ召されて兩人も傍酒を賜はりました武藏先生は有難き太守のお言

藏武本宮

葉だが自分親の敵討を致たし又一度は熊本へも往きたいと云ふ處から強ての傍上意を以辭退し上げ僅か一箇月程足を留め伊家來の人々に二刀の氣合杯を致へて此處を立去り憲法は津山に居ります事遂に三年ださうでございます此老人は後に都へ立歸り仔細あつて相果てました之は憲法のお話し扱武藏は作州津山を立て一度肥後國熊本へ參らうと云ふ途中播州姫路の尾引城其お天守に此程夜々怪物が出で姫路の藩中驚ろいて誰一人も其妖怪を見露はす者がございません故遂に宮本は太守の許しを受け姫路のお天守へ上り其妖怪の身体を見露はすと云ふ世に名高きお天守改めの講談

第十三回

宮本武藏が播州姫路のお天守改めを致したと云ふ事は只今の世迄も諸人言傳へて居る名高きお話しでございますから茲に一回演じます、併し世の中に化物の論を立てますと先づ幽霊と云ふものは無いと

藏武本宮

云ふ之は幽かの靈にして神經でございます例へば人を殺せば其殺した時の向ふの悔しがる顔つき或は息を引取る様子杯が己れの目に影つて居ります故に自然と其事を思ひ出し何を見ても先方の姿に見へると云ふ所謂之は神經の作用であります之に反して化物は全くありませぬ何となれば世界の物に化かす物は早い早く言へば世の中が段々開けて參れば開化の世の中だと云ふ即ち開けて化けて世の中が變つて来る又清水を器に汲で長く置けば遂に其水腐り中に蛆杯が生く是れ水の變化又桶が年を経れば石と化す即ち化けるのです斯う云ふ類は擧て辨へ難い位人間は化けぬ代りに筆けて仕舞ひます餘事は指さまして播州姫路のお天守に守護神と致して小刑部明神と云ふがございます其由来を尋ねるに元來姫路は別所小三郎長治の持城でございしましたのが豊臣秀吉公の御手に入り夫より要害を堅固にせんとて竹中半兵衛重治小寺官兵衛孝高の兩人に命じ賜ひ繩張を改め其序を

藏 武 本 宮

以てお天守を築きました其築くべき地所に五輪の古墳がございまし
た之があつては障礙にありませ故夫人に命じて取毀たんと致しまし
たる時不思議にも俄かに暴風吹起り樹木枝を鳴し且つ大雨が降來り
ましたから其日は中止致しました然るに其夜秀吉公伊豫所にあると
美しき官女桃花の如き唇を動かして君願くは妾が言ふ事を聽取へど
呼起しますからお眺め遊ばすと此官女が
現なら跡の印を誰にかは問れしものゝありてしもがな
と之を三度唱へましたから斯は不思議なる事と秀吉公俄然お床の中
よりお立上り遊ばさうとするをお側に居りました者が一は前々々を
云ふ聲にお目をお覺し遊ばした之を全く夢でございませした茲に於て
秀吉公は不密に思召し小寺官兵衛竹中半兵衛の兩人を呼出して昨夜
の奇夢をお話になり何か此邊りに盛場でもある事ならんどのお尋
ねに半兵衛の申し上げるには之は足利將軍義氏公の執事高野武藏守

藏 武 本 宮

師直の娘小刑部姫とやす者久しく禁中に仕官仕る内に伏見の中將殿
息男出羽之助諸道とやす者と密かに通じ遂に其事露顯致し出羽之助
は此地へ左遷ひ小刑部姫も其後を慕ひて當所へ尋ね來りし後幾程も
なく出羽之助は配所の愛に堪かねてか空しく當所にて相果てました
故小刑部姫の歎き壁ふるよ物なく悲嘆の涕にくれて之又問もかく世
を去りしを里人等が憐れに思つて厚く之を葬り碑を立てる由申し傳
へると云ふ事を明細に申し上げますと秀吉公之を聞し召され然す
れば昨夜の夢は其碑を何處迄も遣さんか爲の願にてありつらんと流
石は三國無比の名將故早くもお考へなされて然らば之を天守の守護
神と致したが宜からうとて遂に此小刑部姫を崇つて小刑部大明神の
神號を贈り天守の内之を祀る事になりましたナゼ之を尾引の城と
云ふかどやしますれば之を祀りました當座は城中宿直の者共が夜分
よなるも長き毛を引つた怪しの婦人の姿を折々見たと云ふので自

藏武本官

然と此事を言傳へて尾引の城と申します武藏が姫路お城下へ参ると
其時にお天守は怪しい物が住んで居てお天守番はやすに及ばず時に依
ては浮城下の人々も怪物の爲に憚むと聞き殊には武藏先生佐々木岸
柳を尋ねる一の便宜とならうかと思ひました故に宮本武藏と名乗
らすして吉岡七之助と云ふて姫路城内へ足輕に住込みました其頃の
浮城主は木下勝俊殿でございますで城内の足輕連中は毎夜お天守の
下を廻りッレ昨夜は怪しい物を見た又は誰か目を廻した杯と毎日の
評判愈々武藏が廻る當番になりました時にお天守の下を廻るばかり
では面白くないから何うかして上へ上つて見たいと尋へ其夜の六時
々分お天守の番頭井上幸五郎諸岡金大夫の所へ参りまして、七お願
ひ申します「番頭何である手前は……」七「お足輕七之助でございます
すが今晩は唯だお天守下お馬場等を廻らす致してお天守の上へ上つ
て一夜番を致したうございませす」番頭「ヤ、コリヤ、何を言ふ容易な

藏武本官

らぬ事を言ふ奴じやナカ、以てお天守の上へ上れるものではな
い「七お許しになりませんか」番頭「イヤ許さぬ事はないが上れば必
ず小刑部明神のお罰を蒙り両眼が潰れると云ふものか又はお天守よ
り身体を大地へ投げられて一命を落とすと云ふものか必ず無事では
れぬ」七「イヤ其處でございませす爾う云ふ事を聞けば尙更上りたい凡
ろ世の中に不思議はない等小刑部明神と神に崇められたるものが罪
なき人の命を取る杯とは甚だ以て奇怪千萬是非共上りたい此七之助
は一命を棄る覺悟でございませす」番頭「兎に角待て候令お前が當番で
あらうとも新參の足輕如きに其様な事を直に許すと云ふ譯には往か
ん今夜は先づ當り前にお天守下お馬場等を廻るか宜からうお前が夫
だけの度胸があつて怪物を見舞はし又は妖怪を退治ると云ふ志しは
最も賞めべき事であるが事重大の件であるから只今我々に於て取計
らう譯には参らん依て明日重役を以て上へ願ひ出る迄待て」七「左様

藏武本宮

でございませうか。其夜は、お天守下のお馬場を廻りまされたか。成程夜の二時々分になると、お天守の上にて怪しき物音がします。大に不審を打ちました。其明る日になると、諸岡井上の兩人は直ぐに重役へ申し上げ、重役より、太守勝俊朝臣へ七之助の願を申上げると、太守は、御足に思召して、一期半期の奉公人身分、輕き者でありながら、其様な剛氣のあるのは、誠に以て感心な事である。之は許して遣はせど、お言葉でございませうから、直ちに重役は、諸岡井上を呼んで、右の趣きを沙汰に及ぶ。併し、其者血氣の勇に逸りて、空しく一命を落すやうの事があつては、宜くない。兎に角、身共の屋敷へ連参れ。其人物を見たいと云ふので、七之助をば、重役齋藤甚太夫と云ふ人の屋敷へ呼寄せて、七之助の舉動を能く見ると、何となく尋常人でないから、重役も委細承知とあつて、愈々武藏の願ひが叶つて、其夜にあると、支度を爲し、お天守の番頭、諸岡井上の詰所へ参つて、夜の更けるを待ち、早や十二時近くに参りました。から番頭

藏武本宮

の詰所を出でますると、諸岡井上の兩人もお天守の一番下の梯子段迄送つて呉れました。故、七イヤモウ是にて宜しうござる。一人、宜う氣を付けて……手燭を差出したる時に、七アイヤ、之は往けない怪物を見歸はすに、燈火は却て宜しくないと、斷り、唯だ一人氣強くも、第一階から二階三階と、遂に五重の天守の頂上迄上がり、ますると、此所は、強が凡ら二百疊も敷けると云ふ大したものでございませう。彼の尾張の名古屋城、即ち名高き金の鱈の上つて居ります。お天守へは、貞玉も、昔年、其知に暫く住居致しました。折に拜見を許されて、屢々上りました。が、一番下の所は、成程三百疊も敷かるかと思ふ程でございませう。が、一番上は、漸く三十疊位あるものと心得て居ります。然るに、其時分の姫路のお天守は、上が三百疊も敷かる。と云ふ大したものでございませう。此中に又一重を作つて之へ、小刑部明神の靈を祀つてあります。武藏は、悠々と進んで、其神前を見るに、傍には、半ば破れて落ち、何となく神威も衰へて、物凄き有様

藏武本宮

でございます其邊りへヒタリと座を占め何か出よかしと控へて居ると早や夜も八時と云ふ刻限に向ふの破れて居る伊藤の中に畑の見へる様子斯は不思議なりと武藏は両刀を側へ差置き腕掛いて見詰めて居りまする内々今明るくあつたかと思へば又暗くなる暗くなると思へば又明るくなる自然と武藏先生の身体は身の毛も屑立つばかりにありました其内に御座の蔭に現はれたものがありますから見ると長き髪を垂れ十二一重を着し懸立つばかりの緋の袴を穿た一人の官女でございます茲に於て政名先生扱は狐狸の類からん引捕へて太守への手土産に爲さんと思ひ大音上げて、武藏先生の身を以て人を重りかさんとするも人にこそ依れ我こそは宮本武藏政名ありと大手を廣げて飛掛らんとする時彼の官女は莞爾と笑ひ、女勇なるか英勇必ず騒ぐ事おかれ我こそは決して狐狸變化の類にあらす小刑部明神の神靈あり我が靈は豊臣家の恵みに依て小刑部大明神と崇められ當城

藏武本宮

守護のため此所に鎮座する上は何事か神慮に適はざらんや水難火難は言ふに及ばず當城内に異變ある時は神靈を現はし時を告げ知らせんとするに皆憶病未練の者共よして却て我を恐れて狐の業あり或は變化の業なりと種々なる事を言觸せしを天下に無比なる豪傑が此五重に上がり今夜此處にあつて怪しの事を充分に認めやうと云ふは成心の至り我が日本國は武國なり武家たる者は武を忘れてはならぬのに動もすると武を棄て柔弱に流れるの傾きある中に汝の如きは成心の至り其寝美と致して之を取らする小刑部明神と名乗られたる官女は手に携へて居りました小刀を武藏に渡しましたからアア不思議なりと思ひ推戴く内に何となく暗くなり又パツと明るくなるは不思議なるかな今迄お天守の上とのみ思ひしに芒尾花が嵐に戦ぎ見渡せば四望は十里あるか二十里あるか知れぬ程の原野、武オ、扱は正しく狐狸の類にてありつるかど氣を取直し刀を執らんとして氣が

藏 武 本 宮

付けば又元のお天守の頂きでございました。爾う斯うする内に早や東雲を告げて東が段々ど明るくなり明り窓から四邊を見るに別に變りし事は全く向ふには小刑部明神を崇り奉りました宮がある。唯だ不思議なるは昨夜小刑部明神が手に渡したと思つた小刀が一本其處よりました之を持って直ぐ天守を下り詰岡井上に對面を致して云々の由を申し上げると兩人も驚ろき早速右の趣きを重役へ申し出でました。抑も小刑部明神が武藏へ渡した刀と云ふのは郷の義弘と云ふ鐵劍でございます。世に之を松倉郷と云ふは越中國松倉の郷に於て鐵治を致しました故松倉郷の義弘と申したのでございます。併し此義弘の刀は極く少ない品で俗に化物と義弘は見た事が無いと云ふ位の貴い品でございます。そこで太守に於ても實に感心遊ばされました。其明り日は一家中も皆舉つてお天守へ上がりました。が別に怪しい事もございませぬ。扱此實際のお話しは前申し上げた通り秀吉公が之を神に崇り

藏 武 本 宮

て天守の守護神とする時に右の義弘の短劍を伊神体として納めておつたのを宮本が持つて歸つたと云ふのが天守改めの實説でございます。然るに種々様々の面白味を付けて古い狐が此處に住で居て怪を爲した。或は宮本武藏に其狐が術を教へた杯と様々に勝手な事を説き又勝手な事を草紙杯にも書いてございます。が決してうさでない。其實は武藏が夜中お天守の上に入り小刑部明神の社の内を改めて見たら一本の劍があつた。是れ郷の義弘であつたと云ふのが實際でございませぬ。併し講釋も餘り實地ばかり述べますと味がなく。併して仕舞ひます。例へばお肴を召上るにしても幾ら旨い刺身でも醬油を付けなければ旨くないやうなもので其れに味を付けて婦女子の目成は耳に面白う聴かしたものです。ソコで太守も武藏の度胸を感心遊ばされて右様なる者を足輕に致し置くは惜き事であるから取立てやうと致しました。時に始めて宮本武藏政名であると名乗りましたから重

役始め家中の面々驚ろいて直に太守に申し上げ太守よりはお目通りを許され此處に一百日程足を留めまして家中の者に二刀の術を教へ、夫より一度熊本へ立歸らうと當城下を立ち其途中に於て圖らする一人の町人を助け之が爲に佐々木岸柳の所在が知れ數年の苦心空しからず遂に親の敵を討取ると云ふお話し

第十四回

茲に宮本武藏は姫路を立ちまして五六里参りますと最早晝邊にありました故或る立場茶屋へ遣入り食事を爲して居りますと向ふに深淵笠を被りし一人の侍士が酒を呑で居りました其處へ表より町人体の旅人二人連にて入來り彼方の椽臺へ腰打掛けんとしたる時に如何なる構みか彼の侍士が椽臺の上に置きました刀の鑢へ衣類でも觸りましたか其刀が椽臺より落ちまきた之を見て彼の武家は大に立腹をして二人の町人を取押へ 侍士其方は不屈きな奴武家の刀を足踏に

致した上は勘辨ならん二人は驚ろき両手を支て謝しましたが聞入れんで無禮打にすると云ふ立場の亭主も其々に謝りましたが承知しや、其内に表には夥多の人が集かり逃場もあく二人は眞背にあつて謝るのを聞入れんで今や一人の首を切らうとするから先刻より眺めて居た武藏先生は彼の侍士が笠を脱がぬから分らぬが事に依たら佐々木岸柳ではないか縦し爾うでなくも二人の町人を助けんと其處へ飛込みますと要らざる事をするかと武藏へ切付けける体を交して彼を投げ、投げられた彼の侍士は面目なげに逃げんとするを追迫つて笠を取り顔を見ればマダ漸う二十八九の侍士にて岸柳ではございませんから武藏は意見を言ふて放しました町人二人は大に喜び、町貴下のお蔭で助かりましたお武藏様は命の親蔭の爲お酒を一献……武、ヤ、其様の心配には及ばん、テお前は何處の者か、町私に豊前の小倉の者で巴屋五郎兵衛と申しまして旅籠屋を致して居る者、播州巡

りを致して今國へ歸らうとする途中、此者は私の手代を致して居る重助と申します、イヤモウ彼のお武家様へ粗相をして既に首を切られるかと驚ろさました貴下のお蔭で助かりました、テ先生様は何處の御仁……武イヤ私は名を名乗る程の者ではない、五併し旦那様何うか私は貴下にお禮を致したうとございますから、武イヤ、禮杯は決して要らん時に町人相尋ねるが小倉は當節黒田公が伊城主だ……今迄皆小笠原公で讀で居りましたが之は寛永に致したからの事、實際其頃は黒田甲斐守殿がお預り遊ばして居たのでございませ、武彼の黒田家は當節武術は盛かな、五、ヘーモウ誠に盛でございませ、武蔵が城下々々の人に武術の話しを聞くのは第一に岸柳の所在を早く知たいからでございませ、此立掛の亭主も元は武家と見へて色々武術の話しをして興に入居る内、早や夕景になりましたから、旦那様方、不潔じい所ではございませ、が今晚は如何でございませ、お泊

り下さいましてはと頼みますから、マ、早いおそれでは泊らうと茲で三人が泊る事にまつて其夜武蔵は巴屋に向ひ、武今小倉では誰が一番武術で名を得て居るかな、五、何でも尋ねて来れば一藝ある人は皆お抱へまなりませ、が先づ只今伊城下にあつて、武術を大層盛にして居でなさる方は、佐々木勘太夫様……皆まで聞かず、武ナニ佐々木勘太夫、シテ其者の年齢又は人相は……問はれて一々答へる其言葉、分違はぬ、佐々木岸柳、マ、嬉しやと宮本が、何うか巴屋、私は熊本迄往くのだが一度小倉へも参りたい、お前の宅が宿屋とあれば尙の事一夜泊ては、呉まいか、五、ヘー一夜處ではございませ、一年二年お泊り遊ばすとも決して爾う云ふ事は、御心配遊ばしませ、な、貴下は大恩人併し、今佐々木勘太夫様のお噂をする、とお顔の色が變りまして、何やら物趣とをさされる、伊様子、それには深き仔細もございませ、う、私は町人ではございませ、れ、巴屋五郎兵衛とせば、小倉城下では少しは顔も知られ

藏 武 本 宮

て居ります者併し今日貴下に助けられて始めてお知合になつたばかりでは馬には乗て見ろ人には添て見ると申しますから私の氣性もマダお分りにはなりません貴下のお名前は全体何と仰せられますか武それはマア就れ小倉へ参つてからの事にしやうと三人共寢に就き翌朝は打揃ふて當所を立ちました途中の話しは別段ございませぬ日を重ねて豊前の小倉へ乗込み巴屋五郎兵衛は宮本を自宅へ連参り女房や若い者にも紹介して大層取持つ其夜始めて巴屋五郎兵衛に向つて武彼の佐々木勘太夫の宅へ明日案内をして貰ひたい實は拙者は吉岡無二齋の一子前名七之助當時宮本武藏政名であるエーッど五郎兵衛は驚ろいて五ッマア貴下は宮本先生それでは彼の佐々木と云ふ人は……武之は今國々で誰知らぬ者もない本名佐々木岸柳に相違ないけれ共當人の顔を能く見ぬ内は世間には同姓同名の者もあるが若し岸柳あらば親の敵である眞心を表はして武藏の物語り聞くと

藏 武 本 宮

り五郎兵衛は「宜うございますそれでは明日貴下は劍術の修行人となつてお出でござされて充分向ふとお認め遊ばせ併し向ふには弟子も大勢居りますから御油断おされませぬ」武ナニ弟子が何百人居らうと夫等に驚く武藏ではないと勇氣を増して翌朝巴屋五郎兵衛番頭重助等の案内に依て宮本は小倉の裏町佐々木勘太夫の道場へ参りますと勘太夫も五郎兵衛は知て居るから奥へ通し勘何だ……五ッエー先生劍術の修行人が一人尋ね参りました勘何といふ名前だ五ッ宮原金十郎と申す者で今迄國々を廻つたが何れの道場へ参つても不覺を取た事は一遍も無い就ては佐々木先生に一本立合を願ひたいとマア年若き侍士で大層高言を吐て居ります昨夜私の宅へ泊りましたがア云ふ天狗の鼻は先生のお腕前で敲き折ておやりなされたら宜からうと心得て速て参りましたと旨く欺けば勘宜しい爾う云ふ奴は門人共に……五ッエ先生ナカク口ぶりの様子では劍術も能く仕

藏 武 本 宮

ひさうですからお弟子を出すより最初に貴下が天狗の鼻をお折り遊ばせ然迄思かき岸柳ではないが遂には五郎兵衛に欺かれて爾うかど云つて道場へ出て参ると雖て巴屋の手代重助は道場の脇に向ふに顔を見られぬやうにと潜んで居る宮本の側へ参つてサア此方らへどの案内に道場へ入つて見れば擬ふ方なき岸柳の人相武藏政名は大音上げ、武如何に岸柳汝我を存じ居るかどの一言にアツと驚く勘太夫の本名岸柳が「ナニ我を岸柳とは……」武「オー汝の爲に討たれたる吉岡無二齋の一子七之助當時宮本武左衛門の養子とありし宮本武藏政名なるぞ」岸「オー扱は汝は無二齋の倅であるか如何にも我は佐々木岸柳汝の親の爲に一時不覺を取りし爲長年の間劔道を以て世渡りもあらず斯く致せしは汝の親夫に依りて如何にも打果したを若年の其許が吾を討たんとして参りしか」武「固より君父の仇俱に天を敵かず、卒さ之にて……」岸「待て武藏汝の名も聞及び居る何時か尋ね来るゆ

藏 武 本 宮

らんと待つては居たが此道場にて我を討果す時は私まの仇討になる、夫よりも城主へ願ひ互に尋常の勝負を爲し汝を討つか岸柳が討たれるか武士道を立てる氣はないかと云ふのは岸柳も宮本の高名は今迄尋ね来りし修行人からも折々聞て居る故に兎に角此場を逃れて後に工風を旋らさんど一時逃れの一言武藏は固より義者ですから 武「オー汝の言ふ通り城主もあれば私しの仇討より立派に届けて後にはせん」ど云ふ内に表に居つた巴屋の手代重助が早くも浮城内へ馳付けお目付へ此由を申し立てましたからお目付の高岡慶藏と云ふ方が足輕二十五人を召連れて早々浮出張に相成り段々お調べになると如何にも吉岡無二齋の倅武藏又岸柳は舊年無二齋を問討にしたに相違ない事が分りまして茲でお目付は岸柳が逃げあひように一時宅番を爲て其翌日に相なつて役人から城主へ申し立て愈々第三日目に敵を討つ事になりましたが若し見物の内に岸柳の門人又は岸柳に恩を受た者で

藏 武 本 宮

も居て折角の敵討に岸柳へ助太刀を爲し縦令名人と雖も万一宮本の
身體に害があつては往かんから之を避ける爲に矢來を組せうかこ種
々様々に重役達も心を砕いた末夫よりか一層彼の中島一名小島とも
やしますへ上陸さして船にて周圍を取巻き他人を上げずして立合は
せるが宜からうと極りましたから此由や入れると岸柳も武藏も承知
致し其當日は船にて漕出しました尤も大昔は敵討に矢來はございま
せんでしたか或時女と子供が敵を討つ時愈々立合の場になつて敵が
其場を逃去て行方知すになつた事が寛永時代にわつて夫から後は矢
來を拵らへて敵の逃さないやうにしたと云ふ事がございます扱此日に
なるど浮城下の人が知て皆一同に岸邊に驅付けて見て居ります爾ら
斯うする内に宮本武藏は巴屋五郎兵衛にお目附二人足輕六人と共に
船に乗て向ふへ漕付け此方も同くお目附二人足輕十六人岸柳と共に
小船にて着く此方らの岸は全然立錐の地もなき數万の見物でござい

藏 武 本 宮

ます此方は双方上陸致しますとお目附は左右を警固致して居る内に
武藏は眞綿を刺子に致したる稽古着を着し其上に段小倉の袴を穿き
革の道入つて居る鉢巻を後ろにて結び尤も繪には鉢巻子を着て居る
處が書てあります但實際は爾うでない岸柳は又白繪子の衣類を一枚
着し其上に紺緞子の踏籠を穿き總髪に鉢巻を爲して支度は充分出来
ましたソコで繪には岸柳を討つ時に宮本は襦を執つて向つたやうに書
てあり又講談にも爾う讀む人があります岸柳程の腕前のある者
に對して船の櫂を持つて向つた杯とソンの馬鹿な事はありません全
くは矢張り兩刀を携へたのでございます愈々支度も出来てお目附の
一言に依つて双方其處へ立出で岸柳は大刀を引抜き武藏は例の通り兩
刀を持つて構へエーヤツと互に聲を掛け暫くの間戦ひましたナカ
く以て岸柳の働きは大したもので先づ腕前を較べると岸柳の方が
武藏より一枚方上手なのであります併し此方らは孝子の一心天に

藏武本宮

通じたのでありませうか岸柳も一生懸命大刀を振つて突然宮本の腰の邊りへ切付けるを武藏はヒラリと此方へ飛び左劔を以て切付けたのが岸柳の眉間、忽ち岸柳は仰けに其處へ倒れましたから岸邊に見て居る數万の見物はソレ切られたと聲を上げる、宮本はヤレ嬉しやと思ひけん乗し掛つて右劔にて切付けましたる時に、エーッと岸柳が起上り赤がら拂つたのが岸柳の妙術、岩石碎き燕返し、卑劣にも死だと思つて敵を欺きエーッと拂つた大刀の爲にアッヤ武藏は両股の下から切取られたかと思ふばかり、此折劔道ばかりならば岸柳の燕返し、爲に足を切られるのであります、箱根山にて關口彌太郎より天狗飛切竹内常陸之助よりは柔術の極意等を學んで居りました爲にエーッと飛上りましたから岸柳の刀が武藏の草鞋の砂を拂つたと云ふ若し武藏が二寸飛上りやうが低ければ足首を切られて歸討にあらうとする實に間一髪い處、武卑劣者、と大音上げて飛上がりさま左劔を以

藏武本宮

てエーと拂ふ、何かは堪らん岸柳は右の手首を切られまして、岸、残念ッ……と後へ下がる處を飛下りる途端に右劔を以てエーと突く、其切先に岸柳は額を突かれてトウッ倒れました、此早業にお目附始め見えて居りました人々は思はずアツと聲を上げる、武藏は隠さず止めを差し恨みの一言はやすに及ばず首尾能く此處で親の敵を討取りました、時に慶長の五年八月十五日でございました、岸柳の死骸は別に引取人がございせんから城主に於て其邊りへ之を埋めました、然れば此小島にて岸柳が討たれましたから只今では之を岸柳島と申します、武藏は黒田公の重役等に厚く禮を述べ此處に留まる事八日間にして此地を立去り、藝州廣島へ参り、兄清三郎に面會致しました、が之は多病にして今は殆ど隠居同様ではございませうが先づ岸柳を討たる事を兄にも詳しく話し續いて親無二齋の追善等も立派に致し一度肥後の熊本へ歸りました處、加藤肥後守清正公はお果てさされ、子息肥後守忠廣殿

宮本武藏

百八十四
伊代でございまして後に之は徳川へ敵たふ事がありまして忠廣公の代にてお家は潰れましたソコで養父の武左衛門も年長けて相果てましたから武藏殿は何處にても人間は死ぬ迄は修行であるど夫より又諸國修行に出で國々を廻り末に至りて熊本に立歸り正保二年五月九日を以て病死致しまして法名を玄信二天居士とやします此武藏の術を承継で能く極めました者は門人の青木城右衛門金家と云ふ人でございまして此人後に二刀鐵人流と一派を廣めました茲に鳥渡やし上げて置きますのは宮本の修行中には塚原ト傳其他日本國內の有名鐵客者と立合の事もありまするが是等は附加へたものでございまして略しまして以上は宮本の正味を演じたのでございまして又今迄の草双紙や何かに岸柳の事を賞めてあるのはございせん之は人の敵どおつたからでございませうが併し人は一つ悪事があつたからとて必ずしも悉く其人を悪いとは言へません人一代には善い事もあり又悪い

宮本武藏

事もあるものでございまして成程岸柳が無二齋を討たのは悪いには相違ございせんが腕はナカク、達者であつたと云ふ事は確かお説でございませう幸ひに宮本武藏が仇討を致した實説が手に這入りましたから茲に更めて宮本武藏の實傳を口演爲し一冊の講談速記本と致しました先づ宮本武藏先生のお話しは是にて大尾でございませう

英雄
美談
宮本武藏終

明治卅一年三月廿四日印刷
明治卅一年三月廿九日發行

講演者

淺草區福富町廿九番地
錦城齋貞玉事

柴田

貢

發行者

神田區佐久間町三丁目卅八番地

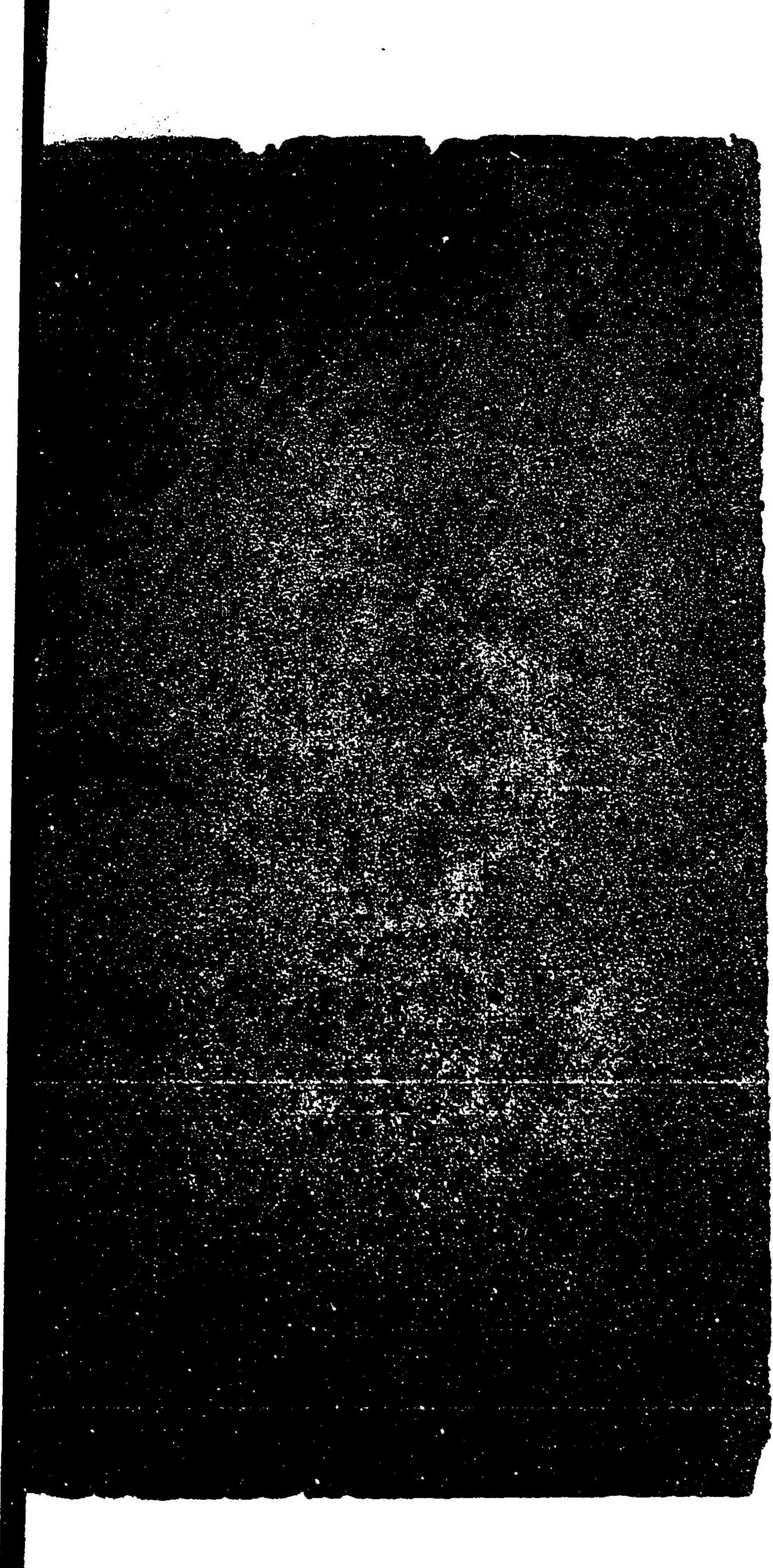
市川路周

印刷者

神田區南桑物町十五番地
龍雲堂大場沃美

賣捌所

神田區佐久間町三丁目卅八番地
文事堂





097708-000-1

特8-981

宮本武蔵 (英雄美談)

錦城齋 貞玉 / 講演

M31

DBS-1643

